早稲田大學三十九年度

法學科第一學年講義錄

作文修辭法

武島又次郎

67
1103

文學士　武島又次郎講述

作文修辭法

早稻田大學出版部藏版

作文修辭法目次

總說……一
第一章　言語……九
第二章　文……二〇
第三章　段落……五四
第四章　明瞭……七二
第五章　生氣……九二
第六章　流麗……一一〇
第七章　構想法……一二一
第八章　記體文……一三九
第九章　敘事文……一六一
第十章　說明文……一八〇
第十一章　議論文……一九八

作文修辭法

文學士　武島又次郎述

總說

一、作文修辭法とは何ぞや。　人間は思想を持つてゐる。而してこの思想をあらはすべき言語をも持つてゐる。すでに思想と言語とある以上は必ずや文章がなければならぬ。文章といふは畢竟文字にかきあらはしたるとあらはさゞるとを問はずすべて人間の思想を表したものをいふのである。さてしからばいかにせばこの思想の表白をたくみにすることが出來るか。則文章をたくみに作ることが出來るかといふに、これを說明するが則修辭作文法のつとめである。言を換へていへば修辭作文法といふはもつとも有効に吾人の思想をあらはす手段を說いたものであるのである。

さて吾人が吾人の思想をあらはすにあたりてさしあたり必要なる道具は言語である。次には言語のあつまつて出來てる文である。次には文のあつまつて出來て

ゐる段落である。次には段落がまたあつまつて出來てゐる文章である。されば吾人、いかにせば吾人の思想を最たくみに人に傳達するを得べきかにつきて研究せむとするものはまづ言語の使用法を知らなければならぬ。第二に文の構造法につきて知らなければならぬ。第三に段落の布置法につきて知らなければならぬ。而して第四に文章といふもの則文章の各種類につきての智識をもたなければならぬ。されば吾人は章を追うて一々これらの問題につきて説明しやうと思ふがまづその以前にこの總論に於いてその大體につきてのことをかいつまむでいはうと思ふ。

二、言語。　文章の根本といふべきは實にこの言語である。古來の雄篇も大作も詮ずるところ言語のあつまつたものである。畫家に畫具がなければ畫がかけぬと同じく文章家に言語がなければ文章をつゞるとは出來ぬ。さてこの言語にも形の短いものもあり長いのもある。質素なるもあり花やかなるもある。意味の廣いのもあり、意味のせまいのもある。これら種々異りたる言語をいかに用ゐわくべきか。これは文章をかく者の第一に知らなければならないことだと思ふ。またこの言語を豐富にするといふことも文章家にとりては極めて必要なことでこれら言語の性質を研究するとともに心得ねばならぬことである。古來の文章家を見るに多くの場

合に於いて言語の豐富であるか貧窮であるかといふことがその間の優劣をさだむる一點になつて居るらしい。文章を以て家をおこさむとするものが言語の貯蓄に多大の注意をそゝがざるべからざるはいふまでもあるまい。世の傳ふるところによれば、ヂッケンスやサッカレーの用ゐた言語は約三千語であるといふことである。またミルトンのは七千語にのぼり、更にシエークスピーアにいたりては實に二万一千語の多きにのぼつたといふことである。ヂッケンス、サッカレーがミルトンに及ばずミルトンがシエークスピーアに及ばざる原因はまたたしかにこれに由ることも多いであらうと思ふのである。

三、文。　言語があつまつてきて、あるひとつのまとまつた意味をあらはすやうになつた時、これを名づけて文といふ。こゝに文といふのは記事文叙事文などの文といふのとは意味がちがつてをるのであつてまとまつた意味をあらはす言語の集合といふことである。さてこの文にも形の長いのがあり短いのがある。あるは對になつたのがありならぬのがある。その他種々の性質上の分類がある。おの〳〵の性質はどうであるか。いかにこれらを用ゐ分くべきか。このことはまた實に文章をかゝむとするものゝかならず知らなければならぬことだと考へる。

四、段落。　言語があつまりて一のまとまつた思想を形つくるが如くに、更に文があつまつて一層大くまとまつた意味を形づくる時はこの文の集合をさして段落といふ。則花といひ、咲くといふは言語である。これがあつまつて花咲くといへば一の文である。この文があつまつて花の咲いてをつて美しいといふ一の大い思想をあらはす時にはこれをさして段落といふ。この段落といふことはこれまであまり、日本の文章家の注意しなかつたことであるが、しかしきはめて必要なることで段落のつくり方の善いか惡いかの如何によりては文章が明瞭ともなり、整齊ともなり、また支離滅裂ともなる。されば、この段落の構成といふことにつきてはどうしてゆるかせにすることが出來やうぞ。

五、文章。　段落がだん〳〵あつまつてくると遂に最後の大團體たる文章といふものになる。さて一口に文章とはいへどこれにも種類がいろ〳〵ある。支那の分類法にしたがへば敘事、記事、論、贊、序、跋、題、引、敬、表、頌、碑、銘、傳等、一々數へあへぬほどあるがしかしこの分類法は無意義なことが多くて正いものといふことが出來ぬ。そも〳〵天下すべての文章はこれを二に大別することが出來やうかと思ふ。則物事をのべしるした文章と道理を論じた文章とである。一を修辭作文法の上で記載文といひ二を理論文といふ。

まづ記載文につきて考へて見るに、總稱してかく名づくるうちにもあるひは事物を興味あるやうにかきしるして人に快樂を與ふるを目的とするものもあるし、あるひは單に事物のわけがらを說明的に記載して人に智識を與ふるを目的とするものもある。たとへば同じく櫻といふものにつきて記載するにしても、歌人や文人の記載したるものと、植物學者が記載したるのとは其間に大なるちがひがある。歌人や文人は櫻のことをかきて、あるひは雲にまがふといひ、錦を張れる如しなどのべて、ひたすら櫻のうつくしきことを賞してひとへに讀者に快樂をあたへやうとすることをつとむれども、植物學者はこれと異なつて、たゞ櫻の說明にとゞまるのである。則櫻はいかなる種類の花であるとか、その花の形はいかゞであるとか、その葉の色はいかゞであるとかいふことを記載するにとゞまるのである。則櫻の美所を發揮して人を樂ましむることはなくして櫻の何物たるかを說明するに止るのである。されば記載文もまた分れて二種となりてくる。則快樂をあたへむとする美的の記載文と智識をあたへむとする說明的の記載文とである。これをかりに呼びて前の方をたゞ美術的記載文といひ、あとの方を科學的記載文といふ。この科學的記載文はまた一名

説明文ともいふ。

更に一歩すゝみて美術的記載文につきて考へて見るに、これもおのづから分れて二種類となるかと思ふ。なぜであるかといふと、天下の事物は必ず運動の狀態にあるか、もしくは靜止の狀態にあるものである。古來の歴史を見よ。一盛一衰、榮枯興廢、天地のありさまは常に變轉して止らないではないか。もしこれを記載したならば、やがて運動してゐる事を描いたものといふべきではあるまいか。しかし一方から考へて見れば天地は悠久のものである。鎮靜したるものである。山はとこしへに泰然として動かず、海はいつまでか漫々として盡きない。これらは實に靜止のありさまにあるもので、もしこれらを記載したならばこれやかて靜止してゐる物を描いたものといふべきであらう。而して十中八九までは物體は靜止し事件は運動してゐるものである。されば運動せることを描くといふのはとりもなほさず事を敘するので、靜止せるものを記するといふのは則物を記するのである。こゝに於てか記載文が二に分れてくる。一は事をしるすのであつてこれを名づけて敘事文といひ、二には物をしるすのであつてこれを名づけて記體文といふ。

さてまた前の理論文につきて考ふるにこれにもまた二の種類があるかと思ふ。

それは一の方は單に理を論ずるにとゞまりある眞理を證據だてるといふことを最後の目的とするものであつて二の方は立證といふことにとゞまらないで一歩すゝむて讀者の心をわれになびけわれに從はしむるを目的とするものをいふのである。たとへば惡をなすべからずといふことを先哲の金言もしくは今人の動作などの上より證據だてゝそれで終つてしまつたならばこれ普通の議論文である。しかしその論文によつて人心を善に導びかうとしたならばこれは第二種の議論文であるかと思ふ。第一の方においてはたゞ惡をなすべからずといふことを證するだけであつて人が善をなさうと惡をなさうとは作者の毫も關係せぬことであるのである。さて第一種のものをたゞ議論文といひ、第二種のものを誘說文とよぶのである。

かくの如く文章を分類してくるとすべての文章はわかれて五種となる。第一に記體文第二に敘事文第三に說明文第四に議論文第五に誘說文である。たゞしこれらに加へて今一つしるすべきものがある。それは何であるかといふと則書簡文である。

この書簡文といふものはその內容の上より考ふれば、ある時は記體文ともなりある時は說明文ともなり、ある時は議論文ともなつて、したがつて前の文章のいづれか

の種類中に入れることが出來るけれどしかしその文體が一風ちがつてをるものであるからこれを別に文章の一種として數ふるが適當であるかと思ふ。かくして文章は合せて六種類となる。

- 記載文
  - 美術的記載文
    - 記體文（一）
    - 叙事文（二）
  - 科學的記載文（說明文）（三）
- 文章
  - 理論文
    - 議論文（四）
    - 誘說文（五）
  - 書簡文（六）

第一章　言語

一、言語の貯蓄。　前にものべたる如く文章の根本となり基礎となるは言語である。なほ根本基礎がたしかでなければ堅牢なる家屋の建築せられざると同一の道理で言語につきての研究が深くない時は到底完全なる文章を作ることが出來ない。さて言語につきての研究というても種々ある。そも〳〵文章は天地間の無限の事物をうつししるすべきものである。さればそれをするには、まづそれに應ずべき十分の言語がなくてはならない。則言語を澤山貯蓄しておかねばならぬ。これを以ていかにしたならば言語を貯蓄し言語をゆたかにすることが出來るかといふことは言語につきて研究すべき第一の事項であると思ふ。

これにつきて第一に守らなければならぬことは吾人が新たに知りたる言語をなるべくしば〳〵用ゐるやうにするといふことである。いかに萬卷の書物を讀むでもしろき言語を知り得たりとてもたゞ知りたるのみにては決して用をなすものではない。これを文章の中に屢使用する時はそこで眞にその言語が自分のものになる。決してこれを忘るゝといふことがなくなつて永久に貯蓄することが出來るの

てある。

第二に守るべきことは思想をあらはさむとする時に必ずそれを寸分のたがひもないやうにあらはさむとつとむることである。思想を思つた通りにあらはさむとする時は自然言語のえり好みをすることになる。この言語でもいけぬ、あの言語でも適當せぬといふやうなわけで多くの言語を穿鑿するからしておのづから多くの言語に目がふれておのづからそれにつきての智識をもつやうになつてくるのである。

第三に守るべきは文章のうちに同語をくりかへさぬやうにつとむべきことである。もしいかなる場所にも同語のみくりかへす時はほかに同意味の新らしいおもしろい言語があつてもそれを記憶する機會がない。たとへばいみじくといふ意味のところにいつてもいみじくいみじくとのみ同じ語を用ゐたならば外に甚だしくとかいといたうとかゆゝしくことのほかになどいふ言語がありても、これを自己の者とすることが出來ぬ。則貯蓄をすることが出來ぬわけになる。

第四に守るべきは多讀といふことである。第五に守るべきは多作といふことである。多讀と多作とは歐陽修が文章三訣のうちにかぞへたものであるがげに動かぬ斷案てある。多讀して諸家の文章に目をさらし、多作して筆端のさしつまらぬやうにすることは言語を豐富にするにつきてまことに缺くべからざるとてある。

二、言語の數。　よしや言語は十分に貯蓄し得ても、ある思想をあらはすにあたりてどの位言語を用ゐてしるすべきてあるかといふ事が明てないとその思想が時として曖昧に時として不明瞭におちいることがある。言語が足りないために思想が判然しないといふのは、無論のことてあるし、あまり多すぎても諺にいふ船頭多くして船を山へのぼすてかへりて思想をまちがつた方角へそらしてしまふことがある。さればいかほど言語の數を用ゐるべきかといふことは言語につきて研究すべき第二の事項てあらう。

きはめて簡單にいひあらはせば

あるひとつの思想をあらはすにはそれに十分なる言語のほか、餘計なものを用ゐてはならぬ。さうかというて思想をあらはすには少し足りないと思はるるばかりにしてもいけぬ。つまり一語も增減すべからざるほどに言語の數を用ゐねばならぬ。

といふことになる。これはかきしるしては、かく短く、守るに難作もなきやうなれど、

このとほりにするは非常に困難にして實際はしば〳〵必要なる言語以外に餘計なるものがあらはれたがるものである。この事を總稱して冗漫といふが、この冗漫といふもまた三種ばかりにわかれてゐる。必要もないのに同じ思想をくりかへすのはたしかに冗漫の一である。

卜居を定む。夕陽ゆふべの空にしづまむとす。

彼と而して是と。定りたる一定の時間。

このあやまりを名づけて重複といふ。

同じ言語はくりかへさぬとしても必要のなき言語を添ふること、これ冗漫の二である。たとへば

白浪の沖よりよせ岸よりかへるさまおもしろし

といふ文において沖よりといひ岸よりといふは必要のなき言語である。たゞ

白浪のよせかへるさまおもしろし

といふても十分意味は通ずるのである。かくの如きを稱して贅語といふ。

また必要もなき思想をくりかへすにもあらず同じ言語をつらぬるにもあらざれど意味を直接にまつすぐにいはないでまはりくどく迂遠にいふことがある。これも冗漫の三である。歐陽修が醉翁亭記を作つた時始めは文の冒頭においてこの亭の所在地なる滁州といふところを說きて四面山を以てかこまれたるとをこま〳〵と敍したりしが、のちそののべかたの迂遠なるをさとりて、こと〳〵くこれを削りわづかに環滁皆山也の五字を以てこれに代へたりといふ話があるが、これは以てこのあやまりを正したよき例といふことが出來やう。このあやまりを名づけて迂遠といふ。

さてこの冗漫といふことを避くるにはいかゞせばよからむといふに、最効力のあるは、とにかく何返も文を削りとるといふことである。しかしながらこれを實行することはきはめて困難なことであつて、自分が一文章を作る時はそのうちの一語一句は惜しいこゝちがせられてそれを刪り去るは甚殘念な氣もちのするものである。この惜しいといふ心が實に文章に冗漫を生ぜしむる大賊である。文章を作るものはよろしく大なる眼を開きてこの病をきりさらねばならぬ。

しかしいかに文章は削り去るほどよいとはいへ、あまりに省きすぎて極端に言語の數を少くするのもまた一のあやまりである。かくする時には文章の言語に少しのゆとりがなく餘裕がなくなつて、したがつて思想が露骨に又時としてとぎれ〳〵

になつてくることがある。されば文章を作るにあたりて常に忘るべからざる規則は

言語の數はなるべくこれを少くせざるべからざると同時に又思想を十分つゝみ得るだけの言語を供給せざるべからず。

といふことである。

三、殊語と汎語。　思想をあらはす時それに供給すべき言語の數につきて知りたるだけにては無論未だ言語につきて智識を十分得たとすることが出來ぬ。その供給すべき言語にも性質の上よりわかつべき種類が澤山ある。その各種類の言語の性質はいかゞであるか。それをいかに用ゐわくべきかといふことは言語の研究につきての第三の事項であらう。

まづはじめに言語に殊語といふ者があり汎語といふ者がある。殊語とは何をかいふ。意味のせまき言語をいふ。汎語とは何をかいふ。意味の廣き言語をいふ。たとへばこゝに琴といふ言語がある。また箏の琴やまと琴などいふ言語がある。この場合において箏の琴といひ、やまと琴といひ、ともにたゞひとつの物しか意味して居らぬけれど琴といふはひき物の總名であつて一團體の物をふくむてゐる。そ

れ故に箏の琴といひ、やまと琴といふは殊語であつて琴といふは汎語である。この他けだもの、人、着物などいへばその意味が廣い故汎語であるが、それに對して虎、男、羽、織などいへば意味がせまいから殊語である。

そも〳〵殊語はかく意味のせまい言語である。從つてその特質は意味を限定して明瞭にあらはすことである。さればこの殊語を文章の中におほく用ゐる時は文章の意味が明瞭となり具像的となつてきて事物のありさまをよく紙上にをどらすることができる。これが實に殊語の長所である。この故に天地山川の景色をゑがくとか花鳥風月のありさまをうつすとか、その他四季をり〳〵の風光をうつすとか、もしは人物の容貌服裝などをしるすにあたりてはなるべくこの殊語を用ゐるやうにするがよいと思ふ。たとへば

春の都のありさまを見ればくさ〳〵の木うちまじりて美なる織物を張れるが如し。

といふよりも

春の都のありさまを見れば柳櫻をこきまぜて錦を張りたらむが如し。

といふ方がありさまが明瞭にうかぶ。これ殊語が多いからである。

また次の例において

たけたかき毛ものに赤くいかめしうよそひたる人の打物もちて乘りたり。

とあるよりも、

たけたかき馬に緋縅の鎧きたる人の太刀もちて乘りたり。

とある方がはるかに意味を明瞭にあらはしてをる。これ前の文においては、汎語が用ゐられたるに反して後の文においては「馬」とか「緋縅の鎧」とか「太刀」とか、殊語が用ゐられてある故である。

汎語は前にもいうた如く意味の廣い言語である。物の團體をあらはしてゐる言語である。それ故に文章の意味の廣くわたるが如き時、則漠然と事物を指定するが如き場合にはこの種類の言語を用ゐた方が利益がある。されば抽象的のこと理論上のことをいふ場合にはなるべく汎語を用ゐたがよろしい。たとへば

年々歳々花相似たり。歳々年々人同じからず。

とある有名なる古人の句を

年々歳々梅相似たり。歳々年々男同じからず。

としたならばいかゞであるか。甚滑稽な不合理なものと成り了るべきではないか。

植物の永久不變なるに反して人間はまことに無常なるといふこの詩の主旨は抽象的である。一の道理である。そこで梅とか、男とかいふ殊語を用ゐるよりも花とか人とかいふ汎語を用ゐた方がかへりてよく事理を說明してをるのである。

かやうに殊語と汎語とは各短處もあり、長處もある。用ゐて可なる場合があり。用ゐて不可なる場合がある。決して時と處とを擇ばず、混交して用ゐるべきではないので題目にしたがひ文意に應じてよくこの二の言語を用ゐわけむといふことは文章をものするものゝ必ず心がくべきことである。

四、綺語と平語と。　言語を性質上他の方面から考へるとまた綺語と平語との二に分れてくる。綺語とは何であるかといふにかざりのある言語である。外觀の美のある言語である。しかつべらしい言語である。これに反してかざりない言語、質素なる言語、むきだしの言語、これを名づけて平語といふ。一は耳をよろこばせ耳をおどろかさむがためにもてつけのある言語をいひ、他はたゞ意味を平易に簡單にあらはさむためにありのまゝに思想をあらはしたる言語をいふのである。されば綺語は耳をよろこばせ目をおどろかさむがため、多少虛飾のかたむきのある言語をいふ、平語はたゞ思想をむきだしにあらはしたる言語をいふのである。御手紙とい

へば平語であれど華翰などいへば綺語である。拜見いたすといへば平語なれど拝讀といへば綺語である。御無沙汰といへば平語だけれど報音まことに寥々たりなどいへば綺語である。また

御歌會につらなりてありがたし。

などいはゞ平語もて作られたる文なれど、

詩賦の清筵に陪するを辱うす。

などいへば綺語から出來た文である。

綺語はいかなる特質があるかといふに言語がかざりがあつて立派であるからして文章をうつくしくし立派にし、ために多くの感動を讀者にあたふることがある。されば おごそかなる場合に用ゐるべき文章とか、かざりを主とすべき文章などにはこの綺語を多く用ゐる方がよろしい。これに反して平語の方は質朴で意味をあきらかにあらはしてあるから、ひたすら意思の傳達を目的とする文章たといへば日用の書簡文とか兒童によまする文章とかその他教科書に用ゐるべき文章などにはなるべく多くこの平語を用ゐるがよろしい。

もし文章の目的がたゞに意思を傳達するといふことにのみあらば平語が綺語にまさることもとより自然のことである。しかしながら文章は意思の傳達といふ目的の以外にまた感ふかく力づよくあたふるといふ必要のあることがある。而してこの感ふかく力づよく意思を傳達すといふことがまた果して文章の第二の目的であるとすれば綺語のかくべからざることもまた自然の道理といはねばならぬ。

しかしながら世間には一の誤解をなしてゐるものがある。それは綺語を用ゐるほど文章がおもしろくすぐれたるものになつてくるものであると考へてゐることである。かの中學の生徒などが、やたらに漢語を使用して文章をつゞるものあるが如きはその一例で、これはいみじきあやまりといはねばならぬ。

もし一般の上よりいへば文章にはなるべく平語を用ゐて綺語を用ゐぬがよろしい。さりとて平語と綺語とは根本的に優劣があるのではなくつてただ時と場所にしたがつて、かゝる時には平語が宜しく、かゝる場所には綺語がよろしいといふやうに比較的の價値があるものであるからしてよくその時と所とを明にしてこれを使ひわくるようにしなければならぬ。

第二章　文

一、文とは何ぞや。總論の時にものべたるが如く文章の最小成分、則文章の根本ともいふべきものは言語である。しかしながら吾人が思想をあらはす時はこれらの言語がたゝぼつりと一つ出てくるものではなくて必ずや、多くまとまつて一つのまとまつた思想をなしてくるのである。たとへば吾人が花のことを話す場合にたゞ花といふ一語若しくはたゞ咲くといふ一語だけを發言するものではなくて必ずや花が咲いたといふやうに少くとも二つ以上の言語をまとめて發音するものである。この言語のあつまり、あるまとまつた意味をあらはした言語のあつまりをさして吾人は名づけて文といふものである。されば文といふのは英語ならばセンテンスといふに相當する語で、記事文叙事文などにおける文とは少しくその意味をことにしてゐるのである。

さていかやうに言語があつまつてくると意味がまとまるかといふに必ず、ある事物についてあることが話されねばならぬ。たとへば雨ふるといはゞ、雨といふ物につきてそのふるといふ働がいはれてある。故に意味がまとまつてをるのであつてこれは一の文である。また出世はうれしといはゞ出世といふ事につきてうれしといふありさまが話されたる也。故に意味がまとまつてをつて一の文である。さてこのある事や物をあらはしてをる言語を主語といひ、そのありさまとかはたらきとかをあらはしてある言語を説明語といふ。されば少くとも一の主語と一の説明語がなければ文といふものは出來ぬのである。

（主語）　（説明語）
けふは　さむし。
鳥　とまれり。
（汝は）　かなたを見よ。

さてたゞ一の主語と一の説明語とをもてる文を文法上にて單文といふ。則前にある如きものをいふのである。

さてもし二以上の主語と二以上の説明語とがある文である時にはこれをなづけて複合文といふ、例へば次の如きものをいふのである。

雨ふらばわれはゆかじ。
月あかければありさまよく見ゆ。

(我)いそぎたれば(我)忘れたる事おほし。

山青く水きよし。

馬にのる者もあり、あゆむものもあり。

雨ふり風ふく。

さてかくの如き場合においてもし二以上の説明語が互に關係してはなすべからざるものならばその文を名つけて複文といふ。例せば前の文の第一第二第三の如きものをいふ。ふるならばゆくまいといふにてふるとゆくとは關係して離すべからず。又あかくあるによりてよく見ゆといふなればあかくと見ゆとは離すべからず。いそぎたるによりて忘れた事が多しといふなればいそぐと多しとは關係あり て離すことが出來ない。故にこれらの文を複文といふ。

もしまた二以上の説明語がその間に關係をもつてをらないでひとつ〳〵に離すことが出來るならばこれをさして合文といふ。則前の例の第四第五第六の如きものをいふのである。山が青いといふことゝ水が清いといふことゝはたゝならべたばかりで別々のことである。馬にのるのもあるし歩むものもあるしといふにてこれも別々のことである。雪がふつたり風がふいたりするといふにてこれも別々のことである。さればかくのごときものを合文といふのである。

さてこれらは文法上の組立てかたであつてこゝに話してゐる修辭法のことには關係からすくあるやうなれど、なほこの文法上の組立てかたにつきて正しい智識をもつといふことは修辭上の組立てかたの根本になるものであるからして一言こゝにいうておくのである。

二、長文と短文。　文といふものは前にいうた文法上の組立てかたがあると同時に修辭上の組立てかたがある。さてその修辭上の組立てかたとはいかなることをいふかといふにこれも種々ありてまづ始めにいふべきものはこゝにしるせる長文と短文といふことである。長文とは文の形の長いものをいふのである。短文とは文の形の短いものをいふのである。

はる〳〵と踏みわけたる通路もさせることなき人の行きかよふはいといとまれなることにておほかたはなき人のなかきわざいとなむとて山路の露にぬれつゝたどりくるものゝみなれば常なきよのさがもことさらに思ひしられぬ。

これ長文の一例である。はる〳〵といふよりおこりて思ひしられぬといふところ

までて一文をなしてをるからである。これに反して

京のうれしきあまりに歌もあまりぞ多かる。
夜ふけてくればところ〳〵も見えず。
京に入りたちてうれし。

これらは皆短文といふべきである。

多くの場合において單文は短く、複合文は長きことあれば、短文はやがて單文長文はやがて複合文なりと考ふるものもあらむなれど、この兩者全く同じといふべきでない。則單文でもその形の割合に長いのがあり、複合文でもその形が甚だ短いのがあるからである。例せば

欲めよ、歌へよ。

などの如きは合文であるけれどその形が甚短い。又

見る人もなき月のさむくすめる廿日あまりの空こそ心ぼそきかぎりなれ。

などの如きは單文であるけれど、その形が割合に長い。

短文はその形がかく短いからして、短い簡易の思想をあらはす時に殊によく適してゐる。たとへば小兒によまする如き文章とか、もしくは平易を旨とする文章とか

にはよく適してゐる。すべて社會が進歩せざるほど人間の思想が簡短であるものであるによつて野蠻人の思想をあらはしたものなどには短文が多いのである。保元物語に爲朝が鬼が島にわたつた時島人が語する條がある。その語をしるして次の如くいうてある。

日本の人こゝに島ありとも知らねばわざとも渡らじ。風にはなたれたるらむ。昔より惡風にあうてこの島に來るものの生きてかへるものなし。荒磯なればおのづから船はくだかる。この島には舟もなければ乘りてかへることなし。食物なければ忽に命つきぬ。もし船あらば粮つきざる前に早く本國にかへるべしとぞ申しける。

ことゞく短文を用ゐてあるのはよく未開化人の言葉づかひに適合してゐると思ふ。見よ源氏物語の文よりも竹取物語の文の方が短文が多く、竹取物語よりも古事記の方が短文が多い。これは全くその思想が漸々に單純になつてをるからである。

また短文は短くこまかしきことなどをうつすに適當してゐる。次の一節を見ても知ることが出來やう。

汽車の役員はいそがしく客車の戸をあける。乘客はおりる。乘りこむ。しば

しは混雜である。

御免躺窮如として闕を跡え來る。上る。坐す。叩頭す。天氣の挨拶をなす。茶を呑む。煙草を喫す。一服二服又一服。手を以て坐右の火桶を摩す。或は火箸をとりて灰に畫がく。彼は何のために來りしか。漠として知るべからず。

短文はまた急激なる時の動作あるは思想をうつすに適してゐる。急激なる時の動作はおのづから短くそは〳〵しく、急激なる時の思想は吾人のしば〳〵經驗した如く決して長たらしくあらはれ來るものでないからである。次の如きは一例と見るべきであらう。

さては主上はいづくにおはしますぞ。黑戸の御所に。內侍所は。溫明殿に。劍璽はいづくに。夜のおとゞに。と左衞門督次弟にたつねたまひければ別當かくぞ答へられける。

これは平治物語にある一節で平治の亂の時信賴內裏をおそひければ主上あはただしく出でたまひけるあとに左衞門督光賴參內して主上の御ゆくへを別當惟方にとひたづねたる段である。

吾人文章をよみゆく時には句點より句點のあるところまでは一息に讀みつゞけるものであるが、短文においてはこの文が短くしたがつて中に含めらるゝ思想が多量でないからしてこれを讀みて手早く理解せらるゝのである。從ひて文章に短文を用ゐる時はその意味が明瞭になつてきて混雜がおこらない。例せば

萬の事はたのむべからず。おろかなる人は深く物をたのむ故に恨みいかる事あり。勢ありとてたのむべからず。こはきものは亡ぶ。財多しとてたのむべからず。時のまに失ひやすし。才ありとてたのむべからず。孔子も時にあはず。

とある文章を見よ。そのいづれも短文にして少しづゝ意味を傳ふるが故にいかにその明瞭なるかを考へよ。これ短文の長所である。

然れどもひたすらに短文のみを用ゐる時は一時にたゝ僅少づゝの思想しか與ふることができぬ故甚だまだるこく、齒がゆく感ずることがある。是が短文の短所である。まして關係のある思想を二つにきりはなしてこれをおの〳〵短文であらはす如きことがあらば思想と表白との適合を缺いて時としては、いはゆる思想の支離滅裂となるので、必ず注意して避けなければならぬことである。例せば次の歌において

旅ころもまとろむ間なし。夢さめてやぶれし窓に時雨ふる也。

その意味はやぶれた窓に時雨があら〳〵しくふりそゝいでくるものだから旅にいでゝまどろむ間がないといふことで、則時雨のふるといふことがまどろめないことの原因になつてをる。故に時雨ふるといふことと、まどろむ間なしといふ二の思想はその間に離ずべからざる關係があるのである。しかるにそれをあらはすに二の短文が用ゐてある。まとろむ間なしといふにて句が切れたればこれが一の文である。時雨ふる也といふまでがまた一の文である。かくは、なすべからざる思想を強いてはなして文にあらはしたるを以てこの歌をよむとおのづから調子のわるい、妙な感じがおこる。それは全くこの故である。もし

旅ころもまとろむまなし夢さめてやぶれし窓に時雨ふれゝば。

などいはゞ調もよく、變な感じもおこらざるべし。これ二つ關係ある思想を關係あるやうまとめて一の文中にをさめたからである。

さて短文と反對で長文は形が長い。したがひてその中に多の思想をこむることができる。それ故にこれを文章中に用ゐる時はこまかしくて一々短文にあらはさば面倒なるべき思想をひとのみこみに理解することが出來る。これが實に長文の長所といふべきであらう。人間の思想といふものは、いつでも單純なものばかりではあらぬ。こまかしいいくつもの思想が一の大なる思想に關係してつながつてあらはれてくることが度々ある。それをよくあらはすにはいかにしても長文といふものがなければならぬ。

しかしながらまた長文を極端にはせてあまりに長くする時はその文中にふくむてゐる多くの思想をとてもひと息にのみこむことが出來なくなる。また文の終の所を讀むでをる時分には前の方を忘れてしまふといふやうな不便もおこつてくる。これは實に長文の短所である。次のは榮花物語の一節であるが始より終までつゆ切目がなく一の文であるが、あまりに長くして終をよむ頃には前の事はほどむど忘るゝばかりである。

あらたまの年立ちかへりぬれば雲の上もはれ〳〵しう見えて空も仰がれ夜の程にたちかへりたる春の霞も紫にうすくこくたなびき、日の氣色うらゝかに光さやけく見え、百千鳥も囀りまさり、萬皆心あるさまに見え、枝になかりし花もいつしかと紐をとき、垣根の草も青みわたり、あしたの原も荻のやけ原かきはらひ、春日野の飛火の野守も萬世の春の始の若葉をつみ、氷とく風も向かへ吹きて技をならさ

ず谷の鶯も行末はるかなる聲にきこえて耳とまり船岡の子の日の松もいつしかと君にひかれて萬代を歴むと思ひて、ときはかきはの緑の色ふかく見え、もたひのほとりの竹葉も末の世はるかに見えはしのもとのさうびも夏をまちがほに短きなどしてさま〳〵めてたきに朝拜より始めて萬にをかしきに宮の御方々の女房のなりとも常だにあるにまいてものあざやかにかをりふかきもことわりと見えたり。

かくの如く長文と短文とはおの〳〵利益と弊害とあるものなれど、一般からいへばなるべく初學のものは短文を用ゐるがよろしい。されど時としてその間に長文を挾むことも決してわるいことでないが、かへす〳〵つゝしむべきは前に例としてあげたる如き非常なる長文は用ゐぬことである。

三、句斷文と中斷文。これがまた修辭上から見たる文の組立てかたの一つである。句斷文とはいかなる文をいふかといふに句點まで讀みゆくにあらざれば意味が完結せぬ文をいふのである。而して中斷文といふのはそれと反對で文の終末までよみ終らずとも少くとも一箇所文中において意味のきれるところのある文をいふのである。例せば

おのれはみやびやかなる點において、變化ある點において、流暢なる點において源氏物語を愛す。

といふ文ありとすれば源氏物語を愛すといふ所まで讀み終へざれば文の意味がまとまらない故にかかる文をさして句斷文といふ。また

おのれは源氏物語の文を愛す、みやびやかなる點において、變化ある點において、流暢なる點において。

といふ文ありとすれば、文を愛すといふところにても意味がまとまるし、みやびやかなる點においてといふところにても、變化ある點においてといふところにても意味がまとまりて結末にいたらざるうちにすでに三所意味のきるゝところあるを以てかくの如き文を中斷文といふ。また

言語に生氣をあたへ勢力をあたへ典雅をあたふるは思想也。

といふ文あらむにこれも文の結末まで讀むにあらざればその意味が理解せられない故に句斷文といふべきものである。されどかくいはずして。

思想は言語に生氣をあたへ、勢力をあたへ、典雅をあたふ。

といはむには生氣をあたへといふところにて意味はまとまる。（あたへは第二變化

にて終止段でないけれども、もとこれ終止段にいふべきを都合上合文になす爲に續用段になしたるなれば意味はきれてをるのである。）また勢力をあたへといふところにてもまとまる。かく結末にいたらざる前にすでに二箇所意味のきるゝところがあるからかゝる文を名づけて中斷文といふ。次の例によりてもまた句斷文と中斷文との區別を知るがよい。

貧里に生れて萬難にかち絶大の記憶力を以て古今の書籍を胸底にをさめ、さても目ある人は不自由なるものかなと嘆ひし菅學者塙撿校が一生は正確なる批評によりて描がゝれたり。（句斷文）

菅學者塙撿校は貧里に生れて萬難にかち、絶大の記憶力を以て古今の書籍を胸底にをさめ、さても目ある人は不自由なる者かなと嘆ひしがこの人の一生は正確なる批評によりて描がゝれたり。（中斷文）

當代の大儒にして稀世の豪傑なる物徂徠の門人として知られ、自らみること高く敢てかる〳〵しく人に許さゞる大宰春臺をしてなほかつ伊藤仁齋は豪傑の士なりといはしめぬ。（句斷文）

大宰春臺は當代の大儒にして稀世の豪傑なる物徂徠の門人として知られみづから見ること高く、敢てかる〳〵しく人に許さゞる者なりしがなほかつ伊藤仁齋は豪傑の士なりといへり。（中斷文）

文字においても內容においても續日曜講壇は明治三十三年の初秋に出版したる日曜講壇の續編のみ。（句斷文）

續日曜講壇は明治三十年の初秋に出版したる日曜講壇の續編のみ文字においても內容においても。（中斷文）

さてつら〳〵思ふに、かく句斷文とは文の終まで讀過するにあらざればその意味の理解せられざるやうつくりなしたる文をいふなるが、文の意味を理解せさするにあづかりて最も必要なるは實に主語と說明語とである。殊に主語を然りとす。この主語はその文字にても知らるゝ如く文中の主人である。故に主語の何たるがわかりてその文が何をいはむとするかの大部分は知らるゝのである。されば主語が早くあらはるればあらはるゝ程意味が明になる。これに反しておそくあらはるゝ程意味がおそく明瞭となる。されば主語をなるべく文の終においてあらはすやうに作つた文をもなづけて吾人は又句斷文といふのである。例せば

古來人の主語大業をなし偉功を奏せしや。

古來大業をたて偉功を奏せし人。

といふ二文があるとすると前の文においてはよみ始めからたゞちにその主語が人であることがわかる、而して次の文においては最後にいたりてやう〳〵主語があらはれてゐる。されば前のは中斷文といふべく後のは句斷文といふべきである。次のごときはまたこの例とすることができる。

ゆく〳〵松林の立ちつゞく中に入りて。(中斷文)

ゆく〳〵立ちつゞく松林の中に入りて。(句斷文)

こゝも松林立ちつゞきて綠したゝるばかりなるが。(中斷文)

こゝもまた綠したゝるばかりに立ちつゞきたる松林なるが。(句斷文)

やかてとゞろく鈴の音。(中斷文)

やかてとゞろく鈴の音に。(句斷文)

舞子が濱は須磨明石を左右にひかへ、淡路島を前に擁し、沙白く、松青く、けしきいと、おもしろきところなり。(中斷文)

須磨明石を左右にひかへ、淡路島を前に擁し、沙白く、松青く、けしきいとおもしろきところなん舞子が濱なる。(句斷文)

句斷文と中斷文といふことは以上にてほゞ說き終へたればこれよりは兩者が特質について一言しよう。そも〳〵句斷文はその終まで讀まざれば意味が完結せざるによりて自然讀者の注意を文の終まで持續させる働がある。讀者の興味を文の終まで把持する働がある。それ故に巧みなる句斷文にありてはこれを讀むものがたえず注意力をひきおこされて甚たおもしろみを感ずるのである。これが句斷文の利益である。しかしながらたえず句斷文のみを用ゐるか、あるひはあまり長き句斷文をたび〳〵用ゐる如きことがあると讀者の注意が章を終るまで引き張られ又長時間ひきつけらるゝために疲勞を感ずるやうになる。又あまり長き句斷文になると文の終まで讀みゆき更にたちかへり文の始尾を通じて大體を捕へなければならぬ故に二重の注意力を用することになる。これが實に句斷文の弊害といふべきものである。

これに反して中斷文の方は一文のうちに少くとも一個所の意味のやすみどころがある故に讀者が必ずしも文の終まで注意力を引きつゞくる必要をもたぬのである。途中で一度なり二度なり休みて讀み終へることが出來る。されば少しも讀者の注意力を浪費せしめずしたがつて精神を疲勞せしめぬことが中斷文の長所とい

ふべきであらうと思ふ。

しかしながらまたあまりに中斷文のみを用ゐるときは讀者の注意はいつてもたるみて更らに興味を感ぜぬものとなる。文の勢力がなくなりてまことに單調な平板なものとならねばならぬ。これが實にまた中斷文の弊害といふべきものであらう。

要するに句斷文と中斷文との間には根本的の優劣はないのであつて、たゞ比較的の優劣があるのみである。則かく〳〵の場合には句斷文がよく、かく〳〵の場合には中斷文がよいといふのであつて、いづこに於ても句斷文がよいとか中斷文がよいとかいふことは出來ぬのである吾人がこの兩文に對すべき態度はほどよくこの兩者をまじへ用ゐるといふことである。必ず一方にのみ偏しては宜しくない。しかし小兒によまする文章とかあるひは只早わかりを用する文章とかにはなるべく中斷文を用ゐるが得策なるべく、中年以上の人士によまする文章とか生氣を主眼とする文章とかにはなるべく句斷文をしば〳〵用ゐる方が利益があるだらうと思ふ。

左にこの兩種の文をまじへ用ゐたる一二の例をあげやう。

劣れるものは見わけやすく勝れるものは見わけがたし。(中斷文)わが身と人と

を見るに、われより優れるもの、われより劣れるものあり。(句斷文)われより劣れるものは見やすかるべくわれより優れる者は見がたし。(中斷文)蟷螂の臂をはりて車に向ふはみづからの力を量らざれば也。(句斷文)

英國は往古より外國人の移り來るをこばまず。(中斷文)たゞにこれをこばまざるのみならず、かへりてこれを受憐する氣風あり。(句斷文)たとへば絹織の英國に開げたるは佛人の創業にかゝりその佛人は自國を放逐せられたる者なりしに、英人は毫もこれを擯斥せず、自由に營業せしめ、自國の生産をきざさしめたるが如きこれ也。(中斷文)故に獨逸人なり、露人なりその移り來る者はかならず國と人とを問はず皆その　由にまかせ各自の長所に就きてよく生業を營ましむるを以て大に國益をますを得たり。(句斷文)

四　聯構文。修辭上の組立てから見た第四の構造の文を聯構文といふ。聯構文といふのは一の文を組立てある部分が同じ形をもつてゐる文をいふのである。同じ形といふのは各部分が同じき言語の數をもち、かつその言語の順序が同じやうに配列されてあるのをいふのである。例せば「山青く水清し」といふ文があるとするとこれは「山青く」といふ部分と水清しといふ部分とから出來てゐる。しかるにこの

二部分はともに言語の數が二個であつて、この順序も主格か始めにありて形容詞がその次にきてゐて同じである。されば聯構文といふべきである。また「立てる者は怒り、座せる者は笑ひ臥せる者はねむる」といふ文があるとするにこれを組立てゝゐる「立てる者は怒り」「座せる者は笑ひ」「臥せる者はねむる」といふ三部分を檢するにともに四の言語から出來てゐる、しかもその四の言語も始めに動詞が來り次に名詞が來り、次に助辭が來り、次に動詞がきてゐて順序が全く同じである。されば これまた聯構文といふべきである。

かく嚴格なる意味においての聯構文はかやうであるけれど、文を組立てゝをる各部分の言語の數が多少のちがひでありとも、また順序がちがつてをつても大體において同じ形である時にはそれを名づけてまた聯構文といふのである。

また一文を組立てゝある各部分が同じ形であるものをかく聯構文といふばかりでなく、同じ形をもちてある二以上の文をも聯構文といふのである。

昔もしかりき。今もしかり。ゆく末もしからむ。

といふ三の文あらむに、その形がほゞ同じなるを以て吾人はこれを聯構文といふのである。

年々歳々花相似たり。歳々年々人同じからず。

の如きもまた聯構文といふことが出來る。されば聯構文といふのは從來對句上名づけてきたものよりも意味が廣いのである。

また一文がこと〳〵く同じ形の部分から出來てゐなくても一文中のある部分が互に同じ形をもちてある時にはそれをもまた聯構文といふことも出來るのである。

たとへば

谷よりのぼる白雲に浮よの事をおもへだてゝ、峯よりおろす松風に心の塵を拂ふなる奥山寺の明暮こそよろづに目ざむるこゝちはすれ。

とある文に於て始めの「谷よりのぼる白雲に浮世の事をたちへたてゝ」と「峯よりおろす松風に心のちりを拂ふ」なるとの部分が同じ形をもつてをるからしてこの文をもまた聯構文といふことが出來るのである。

今左に聯構文から出來てゐる文章の一例をあげやう。

いつはあれど照る月の秋のさかり、いづこはあれど行水のすみだ河原に、夕波のふた國かけたる月見むとて、からやまとの文人糸竹にたへなるをしもつらねてうかぶることあり。（以上聯構文）。舟は汐のまに〳〵棹ならずしてのぼり、岸は舟の

まに〳〵居なからにしてぞうつる。（以上聯構文）岸はるかに晴れて百のうてなに簾を卷き、風靜に吹きてちゞの舟の帷をうごかせり。（以上聯構文）あるは陸あるは舟、あるはたかき、あるはいやしき、呉の舞妓高麗のわさをぎ、色は波に匂ひ聲は空になむすみにける。（以上聯構文）これやこの蘆荻を分けつる國にやあるらむ、都鳥にことゝひける川にぞあるらし。（聯構文）時のゆければかゝる都にしもなりにけるとを、あるは目によろこびあるは心におどろき、あるは醉泣きして今をほめ、歌しのびしていにしへをなむかたらひける。（以上聯構文）時にある人のいへらく、わがすみだ川こふ川こそ多けれ。うちよする駿河なる、大鳥の出羽なる、この武藏なるは古の言の葉の集には下つ總のあはひとかゝれ、後の道ゆきぶりの記には相模の堺とぞしるしける。（以上聯構文）いてや月まつ程のなぐさめに人々この事定のたまはむなりといへば、あるが中にひとりあげつらふことはそれ古の集は後の人の筆を加へたるあり、後の日記は野らに問ひてしるすことあればよるべき者のなづむべからざるをや。そも〳〵蘆荻をや分つらむ、都鳥にや言問ひけむ、あしをぎは人草しげからむさがにして、鳥の名は都とならむしるしにぞありけらし。（以上聯構文）しかあれば、かゝる都の内にながるゝ川をしもたえせぬ御世のためしにも引き、ふりにし名どころのよすがにもいふべきなりけり、と言終ればまちとりて物の音をわなゝかしすみのぼる月にうそぶき出てたる、いづれのところかはしかむいつの時にかは忘れまし。（以上聯構文）すなはち舟こぎりてかしこければ、こよひのありさまのべつくすべし。たゞわれひとり醉ふ。かゝればなにの心をかいはむ。わだつみの夕汐のぼる。隅田川月の空まで船もゆかなむ。

ことにこの聯構文において文の各部分かあらはしてをる意味が互に反對の性質をもつてをる時にはその對照の働によりて一層多大のおもしろみを讀者に與ふることがある。たとへば

世平かなれば子、父を葬り、世みだるれば父、子を葬る。

實なる時は肩にあまり、虛なる時はたゝみて懷にかくる。

の如きものをいふのである。

しかしなから吾人の注意しなければならぬことはあまりに過多に用ゐないやうにすべきことである。ことに實用的の文章において用ゐ過ぎぬやうすることである。元來吾人の思想はきはめて複雜なものであるからして、それがあらはれてくる時いつでも同じ形の言語を以てするといふことは出來べからざる道理である。そ

れをもいづくまでも同じ形の言語であらはす時、則聯構文であらはす時には甚だ不自然に陥るをまぬかれない。これがあまり聯構文を用ゐすぎざるやうにすべき原因であるのである。

五、文の統一。　文の修辭上の組立てかたにつきて吾人のつぎに心得べきことは文には必ずや統一をたもたせるやうにすべしといふことである。すべて一の文の中にきちやむとまとまつた思想だけが含まつてをる時にはその文を名づけて統一のある文といふのである。則異種な無關係な緣のないもしくは緣のうすい思想が附たりになつて居らぬ時にはその文をなづけて統一のある文といふのである。例せば

原村の梅園は六郷河畔にあり。

といふ文がありとするに、この文中の思想はまとまつた單な思想であるからしてこの文には統一があると言うてよろしい。また

原村の梅園はなにがしの別莊なり。

といふ文がありとするに、これもまとまつた思想ばかりをふくむであるからして統一のあるものといふべきである。また

原村の梅園は開花の候は雅客の縱覽をゆるす。

といふ文がありとせむに、これも無關係な思想をふくむで居らぬ。また

原村の梅園はもはや見頃にちかし。

といふ文においてもおなじく統一ありといはるゝのである。さて

原村の梅園は六郷河畔にありてなにがしの別莊なり。

といはむに、この中には六郷河畔にあるといふ思想となにがしの別莊なりといふ思想と二つふくまつてをるけれど互に關係ありて緣がうすくないからしてかく一文中にこめてのべてもちやむとまとまつてをるといふことが出來る。更に、

原村の梅園は六郷河畔にありてなにがしの別莊なるが、開花の頃には雅客の縱覽をゆるす。

といはむに、この一文中には原村の梅園が六郷河畔にあることゝ、なにがしの別莊なることゝ、開花の頃には雅客の縱覽を許すとゝふことゝ三の思想をふくむでをるけれどなほ相關係して離れざるものなればこれもきちやむとまとまつてをるといふても差支あるまい。されどもし、

原村の梅園は六郷河畔にありてなにがしの別莊なるが開花の頃には雅客の

縦覽をゆるし、もはや見頃にちかし。

といはゞいかゞあるか。これは前の文と比べて更に原村の梅はもや見はごろにちかしといふ一思想をそへたものであるがすでに見頃にちかいといふ思想にいたりては前の三思想と直接に關係がないのである。無論梅園といふ事には關係があるが縦覽をゆるすといふこと某の別莊であるなどいふことは關係がないのである。則別の思想であるからしてかくの如きを統一のない文といふのである。「則別の思想であるからしてかくの如きを統一のない文といふのである。」また

蛾々たる溫海嶽には常に雲のいたゞきをめぐるを見る。

といふ文はその中の思想かひとまとまりをなしてをる、からして統一のあもるのである。また

連峰は前後左右に屏風の如くたつ。

といふ文もその中の思想が單一であつて則統一があるのである。されどもし

蛾々たる溫海嶽には常に雲のいたゞきをめぐるを見、連峰は前後左右に屏風の如くたつ。

といつたならば一の文中に關係なき二の思想をしいてこめたものであるからして

統一のない文といふべきである。

前に說いた短文とか長文とか、句斷文とか中斷文とかいふものはそれ〴〵の長所あつたなれど統一のある文に對する統一のない文は絕對的に排斥すべきものである。吾人は必ずや統一ある文のみを作らねばならぬのである。然らば何故に統一ある文を作らねばならぬ。これはいふまでもなきことであるが、文といふものはすでに前にくりかへした如くまとまつた思想をあらはしだ言語のあつまりである。まとまつた思想を込むべきものゝなかに、まとまらざる無關係なる思想をしいて加へることの惡しきは明かなることといふべきである。

統一なき文は文意が不明瞭となる。理解をさまたげる。意味の混雜をきたすわすれても陷るべからざるはこの統一をやぶるといふ誤である。次の文の如きは皆統一のないものである。

この書は古事記日本紀中の難語を辨明せられたるものにして、先生多年の考按中より抄出してまづ二冊を上梓せられたるものにて、古人未發の考多し。

明日の紀元節をかね、心はかりの披露の席を開きたく候間、手ぜまといひ、何のもてなしもなく候へども庭の梅やう〳〵咲き出て候を御肴に一獻差上たく畫すぐ

る頃より御こしくだされたく候。

東滿の子には在滿家をつぎ、江戸田安殿に仕官し、門人賀茂眞淵萩原宗固東滿の學風を傳ふ。

雨になりて水の聲ことさらに高く、はるかに鐘の音のきこゆるはいづこの寺かあるらむ。

五七調は古代より用ゐられたるものにして、そも〳〵五音は音數短き故に輕き—質をおび七音は數—長き故重き性質を有す。

かくの如きは皆次の如くしるし改むるを適當とす。

この書は古事記日本紀中の難語を辨明せられたるもの也。先生多年の考按中より抄出してまづ上冊を上梓せられしもの。古人未發の考多し。

明日の紀元節をかね心ばかりの披露の席を開きたく候間手ぜまといひ何のもてなしもなく候へども甚すぐる頃より御こしくだされたく候。庭の梅やう〳〵咲き出て候を御着に一獻差上たく候。

東滿の子には在滿家をづぎ、江戸田安殿に仕官す。門人賀茂眞淵萩原宗固等東滿の學風を傳ふ。

雨になりて水の聲ことさらに高く。はるかに鐘の音のきこゆるはいづこの寺にかあるらむ。

五七調は古代より用ゐられたるもの也。そも〳〵五音は音數短き故に輕き性質をおび七音は音數長き故重き性質を有す。

文に統一をたもたせるにあづかりて有益あることは一文中の思想をちがつた觀察點からしるさゞるやうにするといふこと也。それはいかなることをいふにかといふに、例せば

平家は戰やぶれて西海にたゞよひ、遂に壇浦にて義經に亡ぼさる。

といふ文がありとせむに、これは思想がまとまつてをつて統一のある文である。されども、これを、

平家は戰やぶれて西海にたゞよひ、義經遂に壇浦にてほろぼす。

といふならば統一がないやうに感ずるではないか。則平家が西海にやぶれたことと義經が壇浦にて亡ぼしたことゝ別々の思想のやうに見える。しかし前の文において見る如くこの二の思想は關係をたもたせることの出來る思想であるのをたゞ後の文において觀察點をかへたから別のやうに見ゆるのである。統一のないやう

に見ゆるのである。則前の文においては文中始も終も平家に觀察點を置いてそれを中心として他の働をしるしてある。平家がやぶれて平家が亡されたとかいてある。さるに後の文においては前半は平家が中心になつて方るけれども、後半になると中心が義經のをに移つてをる。則義經から觀察したかきかたになつてをる。則觀察點がかはつてをる。統一のないやうに見ゆるのは實にこの故であるのである。次にかゝぐる文の如きも統を得させることの出來る文なるを觀察點をちがへてしるしたるために統一のないやうに見えてをる例である。

我大日本帝國は亞細亞の東大平洋の西北に屹立し、あまたの島嶼むらがりて國をなせり。

歳華匆々明治三十六年もすでにゆきてこゝに三十七年の新天地をむかへたり。

七八十人の患者を收容すべき院内に僅々十數人となれり。

天何の心ぞやはやくも毒を奪ひて泉下の客となれる。

太古草昧の世すでに器物を裝飾するためいろ〳〵の物象を施したるものあるを見れば繪は器物を裝飾する目的たり物象をかきいだしたるが、その濫觴なるべし。

これらは皆次の如く改むべきであらう。

我大日本帝國は亞細亞の東大平洋の西北に屹立し、あまたのむらがれる島嶼よりなれる國也。

歳華匆々明治三十六年もすでにゆきてこゝに三十七年の新天地は迎へられたり。

院内に收容すべき七八十人の患者も僅々十數人となれり。

天何の心ぞやはやくも毒を奪ひて泉下の客となせる。

太古草昧の世すでに器物を裝飾するためいろ〳〵の物象を施したるものあるを見れば器物を裝飾する目的より物象をかきいだしたるが繪の濫觴なるべし。

文の文法上の組立てかたから考へて最統一をたもたせやすはき單文である。これ主語も說明語も一つしかない故思想に混雜をきたすおそれがないからである。次には複文である。複文は二以上の說明語はあるけれど、主なる說明語は一つであつてまた主語も一つであるからである。さて合文になると、二以上の主語と二以上の說明語があるからして前にくらべて比較的に統一をたもたせることが困難になつてくる。されば初學のうちはあまり複雜なる複文と合文とは用ゐざるやうにす

るがよろしい。

六、文の輕重。修辭上から見て最後に文を構造するにあたりて注意すべきことは文の輕重を明にせざるべからずといふことである。文の輕重を明にするといふのは文中の重き思想と輕き思想とをわかちて、重き思想をと中の主要なる位置におき輕き思想を文中の主要ならざる位置におくことをいふのである。文中の主要なる思想と主要ならざる思想とはわか心にて直に區別することが出來るけれど主要なる位置と主要ならざる位置とはいかにして見分くることが出來るかといふに、普通文中の最主要なる位置といふは文の始かもしくは文の終をいふのである。それ故に吾人の守るべき規則として主要なる思想は文の始かもしくは文の終におくやうにし主要ならざる思想は文の中部におくやうせよといふことがわかるのである。

次の一文に於て

今日ぞ梅は咲きいでたる。

今日ぞといふ語が文の始めに來れるからしてこの思想に重みがついてきて、この文の意味が昨日でもなく一昨日でなく今日咲いたといふことになつてゐる。もしまた

梅は今日ぞ咲き出でたる。

といはむには梅はが始にあるからしてこれが主要なる思想となつてきて、櫻でもなく藤でもなく梅が咲いたといふ意味になつてくる。また、

咲きいでたる、今日ぞ花は。

といはむならば咲きいでたるといふ語に重みが加はつて散つたのでもなく蕾むだのでもなく咲いたのだといふ意味になるのである。

かくの如く文の始が主要なる位置であると同時に文の終がまた主要なる位置である。たとへば

淡くして衰へざるは君子の交也。こまやかにして衰へやすきは小人の交也

といふ二の文がありとすれば君子の交小人の交といふ語がともに文の終にあるからしてそれに大に重みがついて最主要なる思想となつてくるのである。また

柴人の道々さくらこぼすかな。

といふ句があるとするに、もし作者の意が柴人がおへる黒々したる柴の間よりいとうつくしい櫻をこぼしゆくが、まことにうつくしい櫻なるよといふ如く櫻におもみをおくのであるならば、かくいひあらはせるは甚だ不適當といはねばならぬ。なぜ

てあるかといふに櫻といふ語が文の主要ならざる位置てあるところの中部にきてをるからてある。しかし、もし、

柴人の道々こぼすさくらかな

と直したならばさくらといふ語が文の終にくるからして(無論この場合にかなといふてにをはが文の最終にきてをれど、てにをはは思想上櫻に附隨せるものなればさくらといふ思想が終にあるのも同じとてある。)自然さくらに重みが加はつて、そのうつくしいことを感歎した意味となつてくるのてある。

かやうなわけがあるからして、主要なる説明語などは複文中の從句の形にして下につゞくる如きことをせずして、なるべくそのところて文を終るやうにすべきてある。從句の形にすればその説明語が文の中部にきて重みがおかれないやうになるけれども、文を切れば終にくるからして主要なるものとなるのてある。

例せば

雨ふれど我はゆかむ。

といふ文において、もしふるといふ説明語に重きをおかむとならば、

雨ふれり。されど我はゆかむ。

といふに如かないのてある。また

社會安寧なる故に文學興隆す。

といふ文において安寧なりといふことを重くせむとせば、これもまた

社會安寧なり。故に文學興隆す。

といふ方がまされるのてある。

吾人は以上においてほゞ文の修辭上の組立てかたの大體を知つた。更にこれをつゞめていはゞ吾人の文を作る時に心得べきは左の五個條てある。

一、初學のうちはなるべく文の形を長くせざるやうつとむといふこと。
二、句斷文と中斷文とを交へ用ゐるやうにするといふこと。
三、とき〳〵聯構文を用ゐるといふこと。
四、必ず統一のある文を作るやうにするといふこと。
五、必ず輕重を明にしたる文の作るやうにするといふこと。

第三章　段落

一、段落とは何ぞや。次にしるしてある文章を一讀せよ。

富士谷成章傳

富士谷成章字は仲達、はじめ層城と號し、その居宅の地名によりて北邊と號す。皆川淇園が弟也。三歳にして書をよくし、七才詩を賦せり。九歳の夏韓使の來聘ありし時韓人と筆談せしに幼にしてその才氣のいちはやく應答の速かなるに韓人も舌を捲きて嘆賞せりとぞ。

長ずるに及びて羣書を渉獵し、みづから思へらく近きを捨てゝ遠きを求め、目を賤め耳を貴ぶこと世の人の常也。聖人の書といへども異國の敎のみわが國の典故をまなぶにしかずとて國史律令はいふもさらなり、家乘遺集まであまねく搜り廣く索めて究めずといふことなし。

ある時皆川淇園清君錦と同じく成章が家に集會して百題を出し午時より子時をもて限としおの〳〵五律を賦す。淇園はやくなり、君錦次ぎてなる。成章ひとりおくれければ人々平日の穎悟敏捷なるに似ざるをあやしみけるにその出すに

および百題におの〳〵和歌一首をよみそへたり。こゝにおいて座を擧げて大に服せりといへり。

享年四十二歳。淇園にさきだちて歿す。

讀者はこの一篇の文章が四段にわかれ、各段新たなる行もてかゝれ又各段皆それ〳〵特別なる話說をなすを發見すべし。ひとしく富士谷成章の傳記に關せるものながら第一段においては成章が幼時鋭敏なりしことをしるし、第二段においては生長後の學風をしるし、三段においてはかつて一夜百首をつくりしことをしるし、最終段のにおいてはその歿せしことをしるしてある。

かくの如く一の文章が始より終に進みゆく間において話談の發達上ひときまりをなせるものを稱して段落といふのである。かく文章といふ上より考ふれば段落はその一部である。しかしまた文といふ上から考へて見ると、一の文がいくつもあつまつてゆきて、更に一の大きくまとまつた思想をあらはしてゐる時にそれが段落となるのである。

かくいへばとて段落といふ以上はいつても十も二十もの文があつまつてをるものであつてその形が非常に長いものゝみであると考ふるものは誤りである。前の

例に見ても第一の段落は四の文よりなり、第二のは二の文よりなり、第三のはまた四の文よりなり第四のは二の文よりなりである。その形の長いのもありまた短いのもある。畢竟意味がまとまれば段落が出來るのであり、意味がまとまらなければ段落は出來ぬ。意味のまとまるまとまらぬといふことに段落と段落ならざるとの區別がつくのであつて、形の長い短い上には何等の關係ももたぬのである。なぜ段落などいふものを切る必要があるが。これはちやうどなぜ文の下には文たるを知らせるため句點を切る必要があるかと問ふと同じである。思想のまとまつてきた時にはそのまとまつたといふことを知らせるために何かのしるしをしなければならぬ。それ故に言語があつまつてきてあるまとまつた思想となる時にはそのしるしとして句點といふものを切る。その文があつまつてきてあるまとまつた思想となる時には、そのしるしとして、始めの行は一字おろしてかき終の行は半分であらうと三分の一ばかりであらうとゝまるところで止めておく。而して次の段落は又一字あけた新たなる行もてかきおこす。是が實に形から見た段落のしるしである。

二、統一ある段落。　文には必ずや統一といふことがあらねばならぬといふたがそれと同じ道理によりて段落にもまた統一といふことがなければならぬのである。段落の統一といふのはいかなることをいふのであるかといふに、これも文の統一といふことと道理において同じことであつて、則こゝに一の段落がありとするにその段落中にふくまつてある思想は皆その間に關係があり、聯絡があつて、少しも無關係なものをさしはさみてをらぬ時にはその段落をさして統一のある段落といふのである。前にもいうた如く段落といふものは一の題目につきて、吾人があることをのべむとするにあたり、始よりすゝむでだん〳〵思想が終の方にすゝむでゆく、その間の發達のうへのひとくぎりをさしていふのであるが、すでに發達を示す一くぎりである以上はその一くぎりの中のものが、こと〳〵くその部分の思想の發達に關して關係せるものであることはいふまでもあるまい。もし無關係のものであらうならば發達することができぬからである。

されば、よい段落には必ずやこの統一といふことが備はつてある。段落の統一といふことはその作者の頭腦のしつかりしてをるといふことを證明する。これに反して頭腦のしつかりしない人の文章には常に段落の統一といふことがないのである。ある人がつれ〳〵草をよみてしるせる文章中の次の一段落を見よ。

この書は兼好法師がそこはかとなくかきつけたるものにて詞つきやすらかな

れど勢あり。そも文章は其人の心に思ふ事をかきしるすものなればこれをよむまにまに作者の常々の心づかひも察せらるべし。この書が無常をとき遁世を勸むるなど佛敎の趣味多きは法師の手になれる故也。その詞づかひ、あるはかしくあるはあはれにして文作る人のたよりなるべし。

この段落は四文よりなりてある。しかしながらそれらがよく相つゞきて聯絡をたもちてをるてあらうか。否決してさうといへぬ。第一の文にては徒然草の言葉づかひをのべたるゆゑその意味を發達さしてゆくのかと思ふと第二の文には一般に文章と作者との關係についてのべてある。しかるに第三の文ではまたつれ〴〵草につきてその佛敎くさきことをいひ第四の文になるとまたもとにかへりてこの書の言葉づかひのとにつきてしるしてある。則皆別々ではなれ〴〵になつてをつて少しも、しつかりした聯絡がない。これは實に最統一のない段落の一例とも見るべきものてある。かくの如き段落をしるす人に頭腦の明晰な者は必ずない。

統一のある段落であるならば、その段落中の趣旨が一貫してあるから、その大意をつまんでこれを單一の文にまとめることが出來る。しかしもし統一のない段落であるならば、中に無關係なもしくはとりはなせばとりはなすことの出來るぐらゐに

關係のうすい思想がはいりこむてあるからして、その大意をつゞけるには少くとも二以上の文を費さねばならぬ。則こゝに一の段落がありとすると、その大意をたゞ一の文につゞむることが出來るか否かといふことがその段落に統一があるかないかといふことの試金石になるてあらうと考へる。まづ次の段落をよめ。

雙六の上手といひし人にその手だてを問ひ侍りしに勝たむとうつべからず。負けじとうつべき也。いづれの手か、とく負けぬけぬべきと案じてその手をつかはずして一目なりとも遲く負くべき手につくべしといふ道を知れるをしへ。身を修め國をたもたむ道もまたしかなり。

といふ段落あらむに、その大意をつゞむれば雙六の上手がいひし敎の、修身治國の道にかなひしことといふこと也。則一文につゞめらるゝを以てこの段落は統一あり といふべきてある。また次の段落をよめ。

天地の間に萬國あり。萬國に各君ありて、その國を治む。君あるものはおのおのその君を仰ぎて天とす。國々みなその內を貴びては外を賤しとすること同じき理なれば互におのが國を尊び他國を夷蠻戎狄とすること、これ定れる習なり。されども萬國には皆易姓革命といふありてその國亂るゝ時は或はその君を弑し、

あるひは之を放ち、あるひは寡婦孤兒を欺きてその禪をうけ、あるひは世嗣絶る時は他姓の者を以てその位を嗣かしむるの類にして、その君の種姓他に移る事國としてこれなきものあらず。

もしこれが大意をつゞめて、かりに「天地間の萬國は皆自を尊び他を卑しとする風あり」といふ一文とする時にはなるほどこの段落の前半の意味は總括せられてあるけれど、後半の「萬國には易姓革命といふことの行はれざる國なしといふ心が傳へられぬ。もしまた「萬國は一として易姓革命の行はれざる國なし」といふ一文にてつゞむるとすると此段落の前半の意味がぬけてしまうのである。されば此段落は大意はいかにしても「天地間の萬國は皆自を尊び他を卑しとす風あり」といふ一文と「萬國は一として易姓革命の行はれざるものなし」といふ一文と都合二文でつゞめねばならぬ。これ則此段落に統一のないしるしである。もし統一を得さするやうにせむとならば「これ定れる習也」といふところにて切りてそれよりあとを別の段落としなければならぬ。さうして始めてそれらの段落はおの〳〵の一の文で大意がつゞるやうになるのである。

かやうに段落に統一のあることは必要なることであるが、しからば吾人が文章を作つてゆくにあたり、いかなる標準にしたがつて段落を切つてゆけば、その段落に統一があるやうになつてくるかといふに、これはつゞまるところ、前にいうた如く、思想がまとまつてきたところで必ず段落を切るやうにせよといふことになつてくるのであるが、しかし左にあぐる五個條ばかりのことはこの段落の統一を得ることにつきて少なからざる利益がありと信ずる。

まづ第一には、時といふことを段落を切る標準にするがよろしい。ある一の時の間におこつた事を一の段落にこめ、次の間におこつた事をまた次の段落にこめるといふやうにするのをいふ。時といひてもいろ〳〵ある一日、一月一年皆それ〳〵の場合にしたがひて便宜上標準としてさしつかへがない。歴史傳記などにおいては普通一年や一月を標準にして一年におこつた、もしくは一月におこつた事がらを一段落にしてかく。紀行文などにおいてはおほむね一日を標準にして一日中におこつた事がらを一段落にしてかく。今次にその一例をあげやう

二十三年鎌倉管領持氏その執事上杉氏憲を罷め、憲基を以て之に代ふ。氏憲怨望し持氏の叔父滿隆および其子滿仲に説て亂を作し兵を以て持氏の第を攻む。氏憲駿河に走りて今川範政に依りこれを京師に訴ふ。

持二十四年正月義持令を關東に下し、諸將に命じて持氏を助け攻めて鎌倉を復す。滿隆滿仲および氏憲等皆雪下の僧舍に自殺す。氏憲髮を削りて禪秀と號す。世これを禪秀亂といふ。

以上は年を以て標準とした段落のきり方である。

十一月後龜山天皇入りて宮中に宴し、留ること十餘日、歡を盡して大覺寺に還御す。尋ぎて太上天皇の尊號を上る。

十二月征夷大將軍義滿を左大臣となす。この月朝鮮使をつかはして來聘し、隣好を修めむと請ふ。これを許す。

これは月を以て標準とした段落の切りかたである。

十日朝まだきよりみぞれふりすさび風はげしければけふもこのやとに居り。終日埋み火に埋れて身うごきもせず、軒端なる楓のなかはもみちたるがいとうるはしきをひまより見て

雪よりもおろす時雨やそめつらむ紅葉も時をしらぬ色かな

十一日よし原を出づ。河原宿よりかへり見れば富士のねくもりなし。すべて山足東西にふみひらきうちなびきたる裾野まで、端山しげ山さはりなく、のこるくまなく見えわたれるはこのわたりより中の郷なての間なるべし。

これは日を以て標準とした段落の切てある。

第二には論理上の一區分をなせるものを以て段落を切る標準にするがよろしい。論理上の一區分といふのはたとへば甲と乙とは同じてある、乙と丙とは同じてある、それ故に甲と丙とは同じてあるといふ一の論斷を下すことがあるとするにこの場合に於いて甲と乙とは同じてあるといふことゝ、乙と丙とは同じてあるといふことゝとまた甲と丙とは同じてあるといふことゝは皆論理上の一區分をなしてゐるものである。故にこれらは皆別々の段落にかくべしといふのである。次の如きはその一例と見てよからう。

おのれつら〳〵思ふに人生は四季也。そのいとけなきよりわかきにうつりさかりなるにおよびて老ゆるにいたるまでのさまの何ぞ春去り夏來り秋ゆき冬となるに似たるに甚だしきや。

人のおさなき時は最心のたのしき時也。思ふまゝに遊びたはむれて、すべて世の中のうきふしをしらざるは、なほ春は草木のもえいでよろづのどかにしてつゆものかなしきけしきなきが如し。

人のわかき時は最望の大なる時也。心のまゝにふるまひて世の中すべきかなはぬものなきやう思へるはなほ夏になりて木だちしげく緑葉天地をおほへるに似たり。

人のさかりなる時は最力を事業にこむる時也。經驗をつみ修練をかさね名を後世にのこさむとするは草木果實を結び五穀秋穂のおもかげありとやいふべき。

人の老いたる時はたゞこもりて古を夢みるの時也。髪白く、齒おち、遂に昔日の氣力なきはなほ枝かれ、葉おち蒲目蕭條たる冬がれのさまありといふべきならずや。

かく人生を以て四季に似たりといはざるものぞ。げにあやしきまでに似かよへるは人生と四季となるかな。

文章をのべゆくにあたりまづ始めに大要をくゝりのべ、さて次にそれこをまかに叙述することあり。さる場合にそれを標準として大要をのべたるものを一段落にして細叙せるものと別つことが統一あらする第三の方法であるたとへば次の如きものをいふのである。

當代は田租を取るに二法あり一つには視取り二つには定免なり。

およそ年に豐年凶年あり。五穀の登るに上熟中熟下熟あり。視取といふは毎年の秋になり、代官ならびに手代等の役その他を巡行して穀の熟不熟を視て上熟には多く取り下熟には少く取る。俗にこれを免といふ。代官の巡行して見たるとほりをその領主に告げて領主それよりその年の免を定めて文書を民に下して租を徴す。これを免狀といふ。免狀下りて免狀の如くに收納す。故にこれを見視といふ也。

この場合において第一段において視取りと定免との二種あることをくゝりていひ、次の段落においてそれを細叙したのである。

また一事をいふに、まづ始めにそれを抽象的にのべ、さて、次にいろ〳〵引例して說明することあり。さる時には抽象的にのべたるものを一段落とし、引きたる例をまた別の段落にしてあらはす時は統一をたもたするに益あるものである。則左の一例を見て知るべきである。

人は何事もその身の分際相應にするがよき也。分限にすぎて奢るがわろきは申すにおよばず。又あまり降してかるくするも正道にはあらず。

大名は大名相應に御身をもちたまふがよし。質素がよしとて下々の武士の如

く御身をもちたまふべきにもあらず。次にその下にたつ武士も又その相應相應がよし。百姓町人も又その身上相應に身をもつが宜しきなり。

この段落において第一段落において奢らずまた質素にすぐべからざることを抽象的にのべ次の段落においてこれを大名と町人百姓との個々の場合にうつしてのべたのである。

無論これら統一を得るために段落を切るべき標準は一々かぞへつくすことが出來ぬ。たゞこゝにあげたるは殊に最いちじるしい多くの場合においておこる標準にすぎぬ。とにもかくにも吾人がある思想をのぶるにつきてはまづ始めより漸次に終にすゝみてゆくのである。而してその間には幾度も思想が廻轉し曲折して遂に圓圓なり斷定なりに到達するのであるがそのまがりめごとに一段落をつけて行つたならば必ず統一といふことを得ることが出來るのである。

三、輕重を明にせる段落。前に文のことを話した時に文に輕重を明にしたものを作らねばならぬといふことをいうたが、ちやうどそれと同じことが段落のうへにもいはるゝのである。則吾人が組立つる段落は必ず輕重を明にしたものでなければならぬといふことである。今こゝに一の段落がありとするに、段落は文のあつまりであるからしてその中に必要なる思想をあらはしてをる文もあらうし、また比較的に必要でない思想をあらはしてをる文もあるに相違ない。その場合にもし必要なる思想をあらはしてをる文を段落中の最必要なる位置に据ゑ、必要ならざる思想をあらはしてをる文をまた必要ならざる位置に据ゑおくといふことであるならばさやうなる段落を稱して輕重を明にした段落といふのである。

輕重を明にした段落の利益はいづくにあるか。これはいふまでもないことであるが。段落中の作者の主眼が一目瞭然となつてくることである。畢竟いかなることをいはむとて作者がこの段落をつくつたかといふことが明になつてくるのである。段落全體をよまずともその主要なる位置にある思想さへ會得すればその一段落を知ることが出來るといふことになるのである。

このことは實に今日の社會の如く讀むべき書物は汗牛充棟で費すべき時間はいそがしきため澤山ないといふやうなるありさまの時には最必要なことであらうと考へる。こゝに一部の書がありとするも吾人はなか〳〵それを精讀する餘裕をもたぬ。閑暇がない。されば たゞその大體を早く知りたい必要ならざる部分はしばらくおき、その主眼だけを早く承知したいといふ念慮がおこる。しかし、いかなる部

分だけよまば、その主眼がわかるだらうかといふことにつきて何等の目じるし方針もなかつたならば、吾人は、到底この望を達することは出來ぬのである。輕重を明にすべき段落の必要はこゝにおいて起つてくる。何どなればもし輕重が明にしてあつたならば一目して作者の主眼がどこにあるかといふことがしらるゝからである。

しからば段落の主要なる位置とはいかなるところをいふのであるかといふにこれも文の時にいうたと同じことで段落の始か、もしくはその終であるのである。されば段落の始にくる思想はおのづから重みがおかれ又終にくる思想も亦自然他の思想よりは重く感ぜらるゝやうなるのである。されば吾人の注意すべきことは吾人が主眼と考ふる思想は必ず段落の始か終か若しくは始の方終の方におくやうにすべきことである。

かやうなわけであるからして段落の最初の文は冒頭文ととなへられまた最終の文は收束文ととなへられて段落中のあまたの文中の最主要なるものと考へられてある。從ひて吾人の主眼とする思想はなるべくこれを冒頭文か收束文かであらはすといふことは吾人の常に心がけておくべきことである。

今左に冒頭文を以て作者の主意をあらはした一例をあげやう。

あだし野の露きゆる時なく鳥部山の煙たちさうてのみ住みはつるならひならばいかに物の哀れはなからむ。世はさだめなきこそいみじけれ。命あるものを見るに人ばかり久しきはなし。かげろふの夕をまち夏のせみの春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一とせを暮す程だにもこよなうのどけしや。厭かずをしと思はゞ千とせを過すとも一夜の夢のこゝちこそせめ。住みはてぬ世に見にくき姿を待ちえて何かはせむ。命長けれは恥多し長くとも四十にならぬ程にて死なむこそめやすかるべけれ。

また最初の一文のみにてあらはすことが出來ぬ時は二つもしくは三つの文であらはすこともある。

何事によらず業に就きては怠るべからず。成功は急くべからず。たゞ常に心をこゝに存すべし。成効に急なれば退屈の念生じて事遂げがたし。業に就きて怠らざればおもしろみその間に生じて成効の全を致すべし。學問の道は事業の中にても最難きものなれば最こゝに心得なくばあるべからず。

この文に於いては三個の文で主眼をあらはしてをるのである。

次には收束文を以て作者の主意をあらはした一例をかゝげやう。

仁和寺にある法師年よるまで石清水をがまざりければ心うく覺えてある時思ひたちてたゞひとりかちより詣でけり。極樂寺高良などを拜みてかばかりと心得てかへりにけり。さてかたへの人にあひて年頃思ひつる事はたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに山へ登りしは何事かありけむ。ゆかしかりしかど神へ參ることそほいなれと思ひて山までは見ずとそいひける。少しの事にも先達はあらまほしき事也。

時として最いちじるしくあらはさむとする思想である時には冒頭文と收束文とにおいて二個所でいひあらはすこともある。かくすれは文章の主眼が一層明瞭となるのである。下の如きは則一例である。

山本勘助は素性賤しけれと系圖正しき剛勇の士には遙にまされり。ある時小宮山助太郎小山田八彌秋山友市の三人をあつめて物語しけるに助太郎は談中しづまりて聞き八彌は笑ひてゐ友市は退屈したりければ勘助つゞ〳〵見て助太郎は大丈夫となるべく八彌は心さたまらず友市は不忠の名をのこすべしといひけり。後はたして助太郎は小宮山内膳といひ勝頼天目山にて生害の時死を共にしたり八彌は小山田八左衞門と名のり勝頼生害の時善光寺へにげゆきけり。友市は秋山内記といひ勝頼生害の五日以前に織田方へ降參しけり。勘助は一眼ながらよく見ぬきたり。

四、整齊なる段落。段落をつくるにあたりて最後に注意すべきことは整齊といふことである。今こゝに一の段落があつて、それを組立ててゐる多くの文がまことによく配列されてあつて、一文より一文へと讀みゆく際まことにすら〳〵と移りがよく何等の澁りなしに理解されるやう組立てられてあるときはそれを指て整齊なる段落といふのである。これにつきて常に注意すべきことは一文をしるしたならばよくその意味に注意して、今度はいかなる思想を次に置くが順序であるかといふ事をよく考へることである。さうでなくもし思想の出でくるまゝに配列しようならば必ずや整齊を缺くやうになつてくる。則思想のおしうつりがなめらかでなくなつてゆくのである。またなるべくされば、とかさるをとか而してとかいふやうなる接續辭を用ゐて文の關係を明にすることをも忘れてはならぬ。これらの言辭を省けるために意味が曖昧になることがたびたびある。吾人が文章を作るにのぞみては決してこれら前後の關係をあらはす言辭を吝みてはならぬのである。

第四章　明瞭

一、文章の三大美質。以上吾人がのべきたつたことは文章をくみたてゝをる成分のことであつた。則言語とか、文とか段落とか、文章のよつて成るところのものを說いたのである。これからはこれらの成分は無論のこと、一般に文章といふものが具へなければならぬ性質につきてのべやうと思ふ。

そも〳〵こゝに一の文章があると、その文章は必ず讀者にある感じを與へるにちがひない。感じといふのはたとへばその文章を讀むと意味が判然とわかるとか、わからぬとか。もしくはその文章を讀むと氣が引立てくるとかこぬとか若くはその文章をよむとなめらかでおもしろみを覺ゆるとかおぼえぬとかといふことをいふのである。

それで吾人が文章を讀むでうける感覺は千差萬別であらうけれどつまるところは以上の三に歸着するのである。則わかるわからぬか、氣が引立つか引立たぬかおもしろきかおもしろからぬか、この三である。更に考へて見るに意味がわかるかわからぬかといふとは吾人の智識によつて定まるもので。則智識といふ心のはたらきに關係してをることがあるからして、これを智識的の感じといふてよろしい。また氣が引きたつか引きたゝぬかといふとは吾人の感情によつて定まつてくるものて、則感情といふ心のはたらきに關係してをることであるからこれを感情的の感じといふてよろしい。またおもしろいかおもしろくないかといふとは吾人の趣味によつて定まつてくるもので、則趣味といふ心のはたらきに關係してをることであるからしてこれを趣味上の感じといふてよろしい。

こゝて文章にはまづ三の性質があるといふことがわかる。則一には智識的の感じを與へる性質、二には感情的の感じを與へる性質、三には趣味上の感じをあたへる性質である。それて智識的の感じをあたへる性質、則文章の意味のよくわかるやうにさせる性質を明瞭といふのてある。又感情的の感じをあたへる性質則文章の意味が吾人の氣を引たゝせるやうにさせる性質を生氣といふのてある。最後に趣味上の感じをあたへる性質則吾人におもしろみをあたへる性質を流麗といふのてある。さらに繰りかへしていへば、明瞭、生氣、流麗これが文章の具ふべき三大美質てある

二、明瞭とは何ぞや。吾人が文章をかく時には吾人の思ふところを寸分たがはずあらはさねばならぬ。たゞに寸分たがはずあらはさねばならぬのみならず、その

思想が寸分たがはず人に理解せらるゝやうあらはさねばならぬ。かく、思ふところをあらはしてその通り人にわからする性質を明瞭といふのである。

文章の目的は詮ずるところ思想の傳達といふことである。わが思ふところを人に知らするために吾人は文章をかくのである。しかるに、もしわが思ひどほりにあらはすとも出來ず、また思ひどほりに人に知らすることも出來なかつたならば文章を作るかひは果していづくにあるといふべきか。實に思想傳達の目的を逸したものといはねばなるまい。こゝにおいて明瞭といふことが文章の最缺くべからざる性質であるといふことがわかる。實に明瞭は文章の根本の性質である。生氣といふことも流麗といふこともつまり明瞭を土臺にしての事である。明瞭がなければ生氣も出來ず、流麗も出來ぬわけであるのである。また生氣といひ流麗といひ、ともに比較的の性質である。比較的といふのはある場合にしたがひて入用なる性質であるのである。則ある場合には生氣の必要なることもあるけれども、ある場合にはさまで必要でないことがある。流麗といふのもまた同じである。時にはなくてかなはぬものなれど、ある時にはなくてもよいことがある則どうして無てはならぬ性質では無のである、一の場合と他の場合と比較すると、ある場合よりもこの場合に必

要なるとか、この場合よりもある場合に必要なるとかいふ性質であるのである。故に比較的性質というたのである。しかしながら明瞭は決してかやうな比較的なものでなくて、則時によりては無くてもよいといふやうなる性質ではなくて、いかなる場合をとはず、いかなる文章の種類をとはず必ずなければならぬ性質である。則むづかしくいへば絶對になければならぬ性質である。則絶對的性質というてよろしい。明瞭がなければその文章はいつても必ず曖昧である。しかし曖昧なる文章はいかなる場合をとはず缺點のある文章である。ゆるすべからざる文章である。されば吾人はかういふことを知る則文章を明瞭にするのは實に吾人の義務である。故に明瞭は義務的性質であるといふことをさとるのである。

三、精細と透明。吾人は前にかういうた、則明瞭というのは思ふとほりをあらはした思想が思ふとほりに人に理解せらるゝをいふのであるというた。則明瞭といふ性質はこの要素から出來てゐる。則思ふとほりをあらはすことゝ、思ふとほりに理解さすることとである。それ故にいかにして明瞭を得むかといふことを考ふるにつきてはまづいかにして思ふとほりをあらはすことが出來るか、思ふとほりに理解さすることが出來るかといふこの方面から進みてゆかねばならぬ。まづいかにし

たならば思ふとほりをあらはすことが、出來るであらうか。

まづ始に必要なることは我思つてをることをそのとほりにあらはすべき言語を用ゐるべきことである。さて思つてをることをそのとほりにあらはすにもおほよそ二通りある。則大體そのとほりにあらはしてをるのと、隅々までくはしくそのとほりにあらはしてをるのとのふたつである。たとへば地球のまるきをいはむとて、「地球はまるし」というたならば地球のありさまを大體そのまゝあらはしてをる、しかし「地球は兩極において扁平なる楕圓體なり」というたならばそのありさまをまことに精しくあらはしてをるというてもよろしいのである。また次にある相撲の取くみをしるせる文を見よ。

荒岩に兩國は立上るや兩國の突掛くるを荒岩その手を捉へて泉川に極めたれば兩國は右に敵の前袋を引いてこらへ一氣に寄せつくると荒岩土俵に堪へて廻りこみ右四つとなりて揉合ふ中水となり後互に釣を見せしもきかず取勞れて引分。

この文において この兩人の相撲がどうとりくむてどう變つていつたかといふときはめて精しくあらはされてある。もしこれを

荒岩に兩國は立上るや兩國の突掛くるを荒岩その手を捉へておさへたれば兩國は右に敵のまはしの前方を引いてこらへ一氣に寄せつくると荒岩土俵に堪へて後方にかへり互に手をさしくみて揉合ふ中しばしやすませて後更に互に身體をもちなげむとせしもきかず。遂につかれて引分。

といふうたならば前ほどは精しくいうたのにはあらねど、またはつきりとおもふところをいひあらはしたものとはいふことが出來やう。

かやうに一の思想を大體においてそのとほりにあきらかにあらはす時はこれをさして透明といひごくこまかしきところまで詳しくかきしるす時はこれを精細といふのである。

さてこの透明を得るにはなるべく意味をよくあきらかにあらはすやうな言語を用ゐることが必要である。意味をあきらかにあらはす言語はそれ〳〵の場合において殊語である。殊語といふは前に言語の條下にものべたとほり意味のせまく漠然たらざる言語であるからして一の意味をよくあきらかに判然と人に傳ふることが出來るのである。たとへば

一國の風俗習慣嗜好がいかに殘忍なるか野蠻なるかの程度にしたがひて、その

國の刑罰の度も峻嚴となるべし。

といふ文と

一國の人民が戰爭を好み、鬪爭を嗜み劒戟をもてあそぶの程度にしたがひて

等はおほく絞殺磔刑斬殺等を行ふとおほかるべし。

といふ文にくらべ見よ。前の文よりも後の文のが意味を明瞭に與てをるではないか。なぜであるかといへばあとの文の方が殊語の用ゐられてあるとが前の文よりも多いからである。更にまた次の二文をくらべ見よ。

彼は年老いたり。病めり。また日用の物品に事かきたり。

彼は腰かゞまり、身體おとろへ、食ふに米なく寐るに衾なし。

前の方はまとに汎語が多くていひかたが漠然としてゐるけれども、あとの方は殊語が多いためによくあきらかに意味があらはれてゐる。これらにてもわが思ふところをなるべく透明にあらはさうとするには殊語を用ゐるが得策であるといふことは思ひなかばに過ぐるであらう。

それから透明よりすゝむで更に一層精細にあらはさうとするには術語を用ゐるがよろしい。術語といふのはその道その道の人々が專門的に使用する言語である。

例せば書物の大さをいひて菊版とか四六版とか四つ切とかいふ如き語である。菊版といふのは横が何寸、竪が何寸、四六版といふのは横が何寸、竪が何寸四つ切といふのは横が何寸、竪が何寸ときまつてをるのであるがこれらは本屋で專門的に使用する言語である。この術語といふものは普通の言語よりも意味を精細に傳ふるものである。横何寸竪何寸などくどくどしくいふよりも、菊版などゝいふ方がかへりて直ちに、又はつきりとその意味をあらはすのである。又前にあげた相撲のとりくみをかいた例のうちでも、泉川とか左四つとかいふ言語は皆術語である。一方の手を一方でしめつけるとか何とかいふよりも泉川とか左四つとかいへばそのとりくみやうが相撲通には精細にわかる。これが術語の利益である。

かく術語を用ゐる時は意味がその道の人にはまとに精細にあらはれてくるが、しかしその道以外の人にはかへりて意味のわからなくなつてくるおそれがある。則泉川とか左四つとかいふ言語は相撲道に達してをる人にはよくわかるけれども相撲を知らざる人には何のとか少しもわからぬ。たゞに術語を用ゐるばかりでなくあまり事物を精細にあらはす時は專門的になつて、一般の人には意味が不明瞭になつてくるのであるこれは前にあげた「地球は兩極において扁平なる楕圓體なりとい

ふあらはしかたがまことに精細て科學の智識あるものには意味をくまなく示してをるけれども科學の智識なきものにはかくいふよりも、かへりて「地球はまるし」という方がよく意味をわからせてをるのでも證明することが出來やうと思ふ。

そこで吾人はかういふことを知るのてある。則精細は時としてかへりて意味の不明瞭をおこすものてあるといふことを知るのてある。されば透明といふことはいかなる場合にも必要なるものてあるが精細は讀者のいかむによりてある時は用ゐ、ある時は避けねばならぬ。讀者のいかむとは專門の讀者てあるならば術語を用ゐてもよろしけれどたゞ普通の讀者てあるならばこれを用ゐざるやうにすべきをいふのてある。

かくの如く明瞭を得るには無論言語の使用法に注意せなければならぬことてあるが、しかしそれよりもつと必要てあることは明瞭なる思想をもつべしといふことてある。明瞭なる思想をもつとはつきりと考へることてある。凡て自分が考へて判然とわかつてそこて始めて人に話しても判然とわからするとが出來るのてある。自分てわからぬことを人にわからせやうとするのは不可能のことてあるされは一の思想を明瞭にあらはさうとせばまづその思想について判然たる考をもたねばならぬ。則明瞭なる思想をもたねばならぬのてある。吾人文章を作るにあたりては常にまづいふべきことをよく考へ十分筋道のたつやうになつてからこれをかきあらはすやうにするといふと、これ實に明瞭を得させるにあづかつて根本的に必要なることてある。初學のものが、やゝもすれはまづいかなるとを言はむか十分判然たる考もないうちにいたづらに紙に向ふためにしば〳〵無意味なる、まとまりなき文章となるとあるは實にこの根本の用意を失ふたからてある。くどいやうてあるが吾人は重ねて忠告する。それは何ぞといふに、則十分胸に何をいはうといふ成算の出來あがつた上始めて筆をとれよといふことてある。

四、平易。思想を思ふとほりにあらはす事をいかゞせばよろしきかといふことはすてに前にのべた。然らばその思想を思ふとほりに人に理解せらるゝにはいかにせばよきかといふが次に來る問題てある。無論思想を思ふとほりにあらす手段がおのづから思ふとほりに人に分らするに大なる効益なるは言をまたぬ。わが思ふとほりをあらはしてあればこそその通りに人に理解せらるゝのてある。されば前にいうた明瞭なる思想をもつと、殊語を用ゐると時として術語を用ゐる事が思ふとほりに人に分らするに力あることはいふまてもないのてある。しかしなほまた

二三の有力なる注意は與へらるゝのである、それはいかなることであるかといふにまづ第一には思想をあらはすになるべくやさしく手短かにあらはすべしといふことである。かくやさしく手短にあらはすことをこゝに平易といふのである。同じ一のことをあらはすにもやさしく話すとも出來るし、またむづかしく面倒に話すとも出來る。たとへば水雷の話をするにもこれを軍人に話をするにはこまかしく而倒に話してもよいけれど小兒に話をするにはきはめてやさしくわかるやうに話をせねばならぬ。畢竟おしなべての人が讀みてもわかるやうにあらはしてあることをこゝに稱して平易といふのである。

平易なる言語とはいかなるものなるかといふに言ふまでもなく平語である。綺語や術語や多書の漢語や古代の言語やなどをさけてなるべく多く平語を使用するといふことが實に文章の平易をいたす所以である。なるべく日常用ゐる平俗なる言語を用ゐるといふことが實に文章の平易をます所以である。

次なる文章は、源氏物語の夕がほの卷の一節である。が之を下なる種彦の田舍源氏の文章とくらべ見よ、文の巧拙はとにかく、その平易なりといふ點につきては無論種彦の文がまさつてをるといはねばならぬ。

きりかけだつものにいと青やかなるかづらの心地よげにはひかゝれるに白き花ぞおのれ獨ゑみの眉開けたる、をちかた人にもの申すとひとりごちたまふを御隨身ついゐてかの白く咲きけるをなむ夕顏と申侍る。花の名は人めきてかうあやしき垣根になむ咲きはべりけると申す。げにひと小家がちに、むつかしげなるわたりのこのもかのもあやしう打よろぼひてむねむねしからぬ軒のつまなどに、はひまつはれるをくちをしの花の契や一ふさをりて參れとのたまへばこの押しあけたる聲に入りてをるさすがにされたるやり戸口に黃なるすゞしのひとへ袴長く着なしたる女の童のをかしげなる出てきて、うちまねく。白き扇のいたうてがしたるをこれにおきてまねらせよ技もなさけなげなる花をとてとらせたればまた次のは田舍源氏の文章である。

ふるかたびらの解分けを板戸へ張りしをたてよせたる垣根も折戸もあをやかにこゝちよげにはひ縣れるかつらに白き花のみぞおのれひとり笑の眉開きしは何なるかと問はせたまへば籠かく男、あれこそは烏瓜その名は黑き烏めきて花は白く實は赤くかゝるいふせき垣根にのみ咲き候と答ふるにぞげにこのわたりは

小家がちうちよろぼひし軒のつまはひまつはれるくちをしの花の契や、一ふさを折りてまゐれとのたまへばかの男は心得てこの押しかけたるあみ戸のうちへ立入れば年の頃二十にたらぬ顏よき娘黄なるすゝしのまへかけし、花にもまさる雪の肌白き團扇にうちまねき、これにのせてあげ給へ。花は露けくとが〳〵しき蔓の茨がうつくしい。あなたのおてにさはらうぞとさもおもはゆげに立ちいづる。たゞ忘るべからざるは平易といふのは比較的のことばであつて、その程度が人によつて異なつてくるのである。例せばある人には平易ならざるものもある人には平易であることがある。學問ある人の目には何とも思はぬ文章も中學小學の生徒には大にむづかしいのである。前の源氏の文章と田舍源氏の文章の如きも田舍源氏の文章を理解するぐらゐの人にとりて源氏の文章がむづかしいのである。もし古事記祝詞空穗等の文學に通曉する人にとりてはこの源氏の文章も必ず平易であるに相違ない。それ故に平易といふのは比較的の性質であつてどのくらゐのやさしさに書くが平易といふべきであるといふ一定の標準をたつることは出來ぬのである。

しかしながら明瞭といふ性質は平易とちがつて比較的のものでない。則一人の人には明瞭であるけれともある他の人には不明瞭であるといふやうなることはないのである。もし明瞭なる文章であるならば、その字義さへ理解されればだれが讀みても明瞭である。平易の反對はむづかしいといふことで、明瞭の反對は曖昧といふことである。されば明瞭なる文章であるならばだれが讀みても明瞭であるし、曖昧なる文章であるならばいかに學問のある人が讀まうと曖昧であるのである。

されば吾人の記憶すべきことはかういふことである。則平易といふ性質は文章の明瞭をたすくるものであるけれど平易なるのみにては文章がいつでも明瞭となるものではないといふことである。

五、曖昧。　明瞭を得るについてかく〳〵すべしといふこと、則積極的條件につきてはすでにのべた。これからはかく〳〵してはならぬといふこと則消極的條件につきて一言しやうと思ふ。前段にいうた如く明瞭の反對は曖昧といふことである。して見ればこの曖昧といふことを避くるが實に明瞭を得る大なる助となるべきであらう。

一口に曖昧といへどこれに二の場合がある。第一には意味のあらはしやうが判然たらず、して二樣に解釋せらるゝが如き場合をいふ。第二には一層甚たしくてあ

らはされてある意味が全くぼんやりとし捕捉することの出來ぬ如き場合をいふ。

まづ第一よりいはむに試に次の文を讀みて見よ。

電車賃錢引上の非理なることは余輩さきにこれを論ぜり。今や輿論は囂然これに反對す。

この文は「電車の賃錢引上の非理なること」は余輩さきにこれを論じけるが今や輿論もかまびすしくこの引上に反對す」といふ意味にもとられ、また「電車の賃錢引上の非理なることは余輩さきにこれを論じけるが今や輿論はかまびすしく余の議論に反對すと」いふ意味にもとらるゝではないか。則二樣に解釋せらるゝなれば曖昧といふべきであらう。

また次の如き文を讀め。

山崎宗鑑犬筑波を撰びしより連歌をは貴み俳諧をばいやしき道と思へり。宗鑑が心さにあらず。

これは「山崎宗鑑が犬筑波集といふ俳諧書を撰むで、犬といふ形容詞を俳諧の上に冠らせてから世人は俳諧といふものを卑き道と思ふやうになつたが宗鑑が犬といふ形容詞を冠らせた意味はさういふ輕蔑の意味にあらず、といふ意味である。しかしながらまた「山崎宗鑑が犬筑波集を撰びしよりかれは連歌を貴み俳諧をばいやしきものと思つたやうに思はれるがしかし宗鑑の本意はさうでない」といふやうにも理解される。

かく二樣に理解せられるからしてこれまた曖昧なる文というてよろしかるべきである。古の發句に

、ひとゝせの月をくもらすこよひかな

といふ句があるがこれは二樣に解釋が出來る。則一は八月十五夜清明の吟と見て今晩の月があまりてりかゞやいてをるために今夜を除いて他の一年中の月は顏色なく光がないやうに見ゆといふ意味にもとらるゝ。又二には八月十五夜雨夜の吟と見て一年の長い間まちにまつたる今夜の月がくもつたからしてあだかも一年中の月がくもつたやうの感じがすとるいふ意味にもなる。則曖昧なる句といはねばなるまい。

第二の何のことやら意味のとりとめがつかぬといふ曖昧の一種は歌でいうたならばかの

闇の夜になかぬ烏の聲きけば生れぬさきの父ぞこいしき

の吟が例としてひかるゝに適當なるものであらう。眞にいはゆる無心所着の歌といふべきである。文章の例を引かうならば次のを讀め。

物語りはやあだあだしきはさる物から世のありさまのよしあしの見きくにあかぬことどもを後の代までも傳へまほしとてやよき事のかぎり擇び出てゝ教へたちたる文らのみ讀む人のあなかちにあばめ惡むらむこそあひなうさうさうしけれ。

道はや國のことゝに思ひかねて立たらむ法のみか事をも文をもかよはせては人妻はかりにめでうらやみつゝあないみじとも推いたゞけるも猶まろきに角なるものおし入なむわさの末遂に行はるべきかは。

御國の櫻木の海の外には生ひたたず江の北のからたちのためしはた思ひあはさるゝなりけり。同じ書ののりごとすらも御代の榮ゆくまゝによろづ改りゆくめり。

これは上田秋成がかいた伊勢物語古意の序の一節であるが、全體いかなる主意であるか容易に捕捉すべからざるものといはねばならぬ。これをどうして曖昧ならずといふことが出來やう。

さて考ふるに日本の言語には發音は同じにても意味の異なつたものが甚だ多い。また同じ一の言語ではあつても異なつた意味に用ゐらるゝことも甚だ多い。たとへばこゝにやさしといふ言語があるとこれは兩樣の意味をもつてをる。則はづかしいといふ意味と柔和なるといふ意味とを持つてをる。かやうなる言語を文章の中に用ゐるにあたつてどちらの意味に用ゐるかといふことが明にしらるゝやうにあらはしてないと文章の意が曖昧になりやすいものであるからして曖昧をさくるためにはこのことを注意せねばならぬ。

月のすむあさ茅にすだくきり〳〵す露のおくにやあきを知るらむ

といふ山家集の歌があると「おく」といふ言語は「置く」といふ意味と「奥」といふ意味と兩樣に理解せらるゝことが出來る。それ故にこの歌の意味が曖昧になつてくるのである。さればかゝる場合に明に「置く」といふ意味であるとか「奥」といふ意味であるとかゞわかるやうにあらはされてをるのでなければ實は明白なりといふことが出來ぬのである。

またかやうに二以上の意味ある言語が一文中において、あるは異なつた文中でも接近してそれ〳〵ちがつた意味につかひ分れてある時には混雜を起しやすい。

されば曖昧をさくる爲にはなるべく同じ意味に用ゐるがよいのである。たとへば勢といふ言語は軍勢の勢の意にも用ゐられるし勢力の勢といふ意にも用ゐらる。

さてこれを

つゞく勢なくて勢盡きたり。

といふやうに上下意味をちがへて用ゐる時はまた曖昧を起しやすい。則下のも「ぜい」と讀みあやまりやすのである。また

人および鳥獸などは果實を食してその味のうまきを喜びをれども、その實人および鳥獸がしらず〳〵の間にかへつて果實の用を足しをるなり。

といふ文を讀むに「實」といふ言語が「果實」の實と「誠は」といふ意味の實と兩樣に用ゐられてある。それがためにちよつと讀むと「喜びをれども」と讀むてきて「その實」といひあやまりやすき也。されどそれては意味が通ぜぬ故に思ひかへして「その實」と讀み直すにてこれまた曖昧の全くない文といふとは出來ぬのである。かくの如き場合には「實」といふ言語のかはりに「まことは」などいふ言語を用ゐる方がよろしいのである。

この他言語や思想の排列の順序のわるいことからして曖昧のおこることはたびたびある。人々はよく注意してこれらを避けて曖昧を除き、曖昧を除きて文章の明瞭を得むとつとめねばならぬ。

第五章　生氣

一、生氣とは何ぞや。前にものべたとほり、たゞ文章の意味が明白にあらはれてをるといふことばかりでは未だ以て完全なるものといふことは出來ぬ。則ある場合にはたゞ意味を傳へるといふ以外にその意味を力づよく感じの深いやうに傳へるといふ必要のあることがある。この場合においては文章は明瞭のほかに更に生氣といふ性質を備へねばならぬ。生氣といふはすべて讀者につよき感じをおこさせるやうに意味を傳へることであつてそのふくむ意味が甚だ廣い。人を悲ますること、人を笑はすること人を怒らすること、人を憂へさすること、等しく皆生氣である。古來雄健とか、壯大とか豪放とか勢力とかいふ如きものは皆この生氣のうちに入り來るのである。無論思想に生氣がなければいかに外側より生氣をそへむとするも出來ることではない。しかしながらすでに思想に生氣がある場合に其生氣を一層力あるやうに助長する二三の規則は與へらるることが出來る。下にのべむとするは即それについてゞある。まづその規則も大別してこれを三類にすることが出來る。則

一、言語の撰擇
二、言語の數
三、言語の配列

である。これよりつぎ〳〵にのべやう。

一、言語の撰擇　そも同一物をいひあらはす方法にも種々あれど最よくその意味を發揮してゐるのがいふまでもなく最好いものである。而して最少き勞力を以て意味を正當に理解することの出來るものほどまた最よく意味を發揮してゐるものといはねばならぬ。則讀むや否や讀者が直にその事物を考へその事物を實現するものほど最よく意味を發揮してゐるものといはねばなるまい。しからばいかなる言語をさして、さういふ種類の言語といふべきかといふに、第一には比喩を用ゐたる詞づかひが則それである。左の方丈記の文をよめ。その文章が吾人に感動を與へたるは實にところ〴〵比喩を用ゐたからである。

行く川の流はたえずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、しばらくもとゞまることなし。世の中にある人と住家とまたかくの如し。

玉しきの都の中に棟をならべ甍を爭へる尊き卑き人のすまひは代々をへて盡きせぬものなれどこれをまことかとたづぬれば昔ありし家は稀なり。あるひは去年破れて今年つくり、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所もかはらず、人も多かれどいにしへ見し人は二三十人が中に僅に一人二人也。朝に死し夕に生るゝならひたゞ水の泡にぞ似たりける。知らず生れ死ぬる人何方より來りて何方にか去る。又知らず、假のやどり誰がためにか心をなやまし何によりてか目を悅ばしむる。そのあるじとすみかと無常を爭ひさるさまいはゞ朝顏の露に異ならず。或は露おちて花のこり殘るといへども朝日に枯れぬ。或は花は萎みて露なほきえず消えずといへども夕をまつことなし。

圈點をうてるところは皆比喩也。この比喩あるためにいかに文章に生氣がついてあるかに注意せねばならぬ。あるひは次の語句を讀め。

戸は立てられぬ人の口。

日頃から齒に衣きせず申すを必ず氣にはさへられな。

福澤君は實に新日本文學の喇叭手たりし也。

おかげさまで心の垢をおとしました。

天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客。

これらは皆前の方丈記の文章の如くに何々に似たり、何々の如しなどいひて明に比喩してはないけれど、とにかく暗々に比喩を用ゐてあるといふことにつきては同じことである。而してまたかく比喩が用ゐられてあるためにその意味がまことに吾人の氣を引きたゝするやうにあらはれてをるてはないか。比喩の言語が文章に生氣を與ふるものなることはこれらで明であらう。

第二に文章に生氣をあたふるものは擬人あるひは一名活喩とよぶ方法である。これは生命のないものを生命あるやうに活かしていひあらはすことである。「花笑ひ、鳥歌ふ」といふ如きはその一例である。笑ふは人のすることである。その働きを花といふものゝ上にうつして花笑ふといひ、また歌ふも人のすることであるのを鳥の上にうつして鳥歌ふというたのでまことにおもしろくのどかなるさまがいちじるしく浮ぶやうになつてをるてはないか。近松門左衛門が博多小女郎浪枕に

千艘出づれば入りふねも日に千貫目萬貫目、小判走れば銀が飛ぶ金色世界もかくやらむ。

といふ文がある。「小判走れば」といひ「銀が飛ぶ」といへるに無量のおもしろみがこも

つてゐて、まことに金銀の出入いそがしき湊町の繁昌のありさまが力つよく感ずるやうにあらはされてをるではないか。以下皆この擬人の例である。

あたりは寂として居る。高く低く波のやうになつた畠地を越して月は今權現堂の森を黒くそめだしてゐた。

ふたりまつた水晶のやうな田の水はぬるい春風になでられて美しく小波をたてゝゐる。

歴史は常に吾吾に向ひてそれを語る也。

吾人が周圍にはいろ〳〵なものがある。しかしその内で何が一番目につきやすいかといへば動いてをる活いてをるものほど最目につくものはあるまい。動いてをるもの活いてをるものといふのは則生命のあるものである。されば擬人といふのは動かない則目につきにくいものを動いてゐる則目につきやすいものにとりなしてあらはすのである。この方法が用ゐらるゝ時は意味がいちじるしく著れてくるのは自然の數といはならぬ。

第三に必要なることは誇張といふ方法である。針ほどな小なものを棒ほどの大なるものにとりなしていふことを吾人は名づけて誇張といふ。誇にも千丈の堤も蟻の穴からくづれるといふことがある。しかしこれは實際はうそであつてさる事實のあるべきはずはない。しかしさうであるからといふて蟻の穴ぐらゐでは千丈の堤はくづれぬといへば何の感じをも吾人に與へない。それを仰山にいうて千丈の堤も蟻の穴からくづれるというたのて始めてわづかなる事から大事も敗れるものであるといふ眞理が強くあらはれてくるのである。擬人と誇張とは意味を著し く力たけくあらはすにあづかつて最勢力あるものというてよろしい。たとへば水雷艇が水雷をはなちて軍艦に損傷をあたへたるを、水雷を以て敵艦を轟沈すというたならばいかゞであらうか。軍艦に損害をあたふといへば正直に事實をのべたのである。しかし軍艦を轟沈すといへば仰山に事實をいうたのである。この仰山にいうたことて吾人の氣が引立てらるゝてはないか。誇張が生氣をあたふるといふは則これをいふのである。次にかゝぐる文章は上田秋成の雨月物語の一節て讃岐の白峰に西行がまうでゝ崇德天皇の御幽魂ををがみたてまつることをしるしたのである。而してこの文章の一讀してまことにおもしろくすごみが身にしみるやう感ずるは實に誇張がところ〳〵用ゐられてあるからてある。

この里ちかき白峰といふところにこそ新院の陵ありと聞きて拜み奉らばやと

十月はじめつかた彼山に登る。松柏は奥深く茂くりあひて青雲のたなびく日すら小雨そぼふるが如し。見が嶽といふ嶮しき峰背にそばだちて千仞の谷底より雲霧おひのぼれば咫尺をもおぼつかなきこゝちせらる。木立わづかに隔てたる處に土うづたかく積たるが上に石を三重ねに疊みしたるが荊棘薜蘿に埋れてうらかなしきをこれなむ御墓にやと心もかきくらまされて更に夢現ともわきがたし。

また崇德天皇の御幽魂の御ありさまをしるして、

時に峯谷ゆすり動きて風林を偃すが如く砂石を空にまきあぐる。見る〳〵一團の陰火君がひざの下よりもえ上りて山も谷も晝の如く明かなり。光の中につら〳〵御氣色を見たてまつるに朱をそゝぎたる龍顏におどろの髮膝にかかるまで亂れ白き眼をつりあげ熱き息を苦しげにつかせたまふ。御衣は柿色のいたうすゝびたるに手足の爪は毛ものゝ如く生ひのびてさながら魔王のかたちあさましくもおそろし。

とある如きはいづれも誇張なるかきかたを用ゐてあるために文章生動、鬼氣人に迫るものあるを覺えさせるのである。

もう一つ意味を力あるやうあらはす方法に相換法といふことがある。それは物の一部と一部を相換へてかき現はすより出た名であつて例せば船といふべきをその一部分である帆を以てこれにかへて白帆といふとか、小僧といふべきをその中の一人なる長松といふを以てこれにかへて長松といひなどすることをいふのである。而していかなる部分を以ていかなる部分にかふべきかといふに則最いちじるしき部分をぬき出してそれを以て比較的に著しからぬ他の部分に代るのである。

今この相換法の一例をいふと日本の旗といふよりも日の丸の旗というた方があり〳〵とその形が目の前にうかんでくるではないか。これはなぜであるかといふに日本の旗といへばその旗の全體をさしていふ言葉であるけれども日の丸の旗といへば一部分をさしていうた言葉である。日本の旗には旗掉もあり、旗のきれもあり、そのしるしの日の丸もある。しかしこれら多くある中で何が最日本の旗の旗たるところをあらはしていちじるしいものであるかといふに、いふまでもなく日の丸といふしるしである。そこで日本の旗といふかはりに日の丸というたのでありさまがいちじるしく浮びてきたのである。ひとり文章のみならず、すべて文學、否おしなべて美術といふものにはこの選擇といふことが甚必要である。多くのもののう

ちから、最いちじるしいある部分を選擇するといふことが必要である。これによりて繪が寫眞よりも尊くなり、彫刻が今戸燒より尊くなり、音樂が馬鹿囃よりとうとくなり、文學が新聞の三面記事より尊くなるのである。この原理によつた相換法であるからして文章の生氣をおこすといふことに與つて力あるはいふまではないのである。次にあぐるものは皆相換法の例といふべきである。

羽織着て綱も聽く夜や川千鳥。

山吹も反額も出る田植かな。

彼は實に日本の張良ともいひつべし。

彼の人なほ春秋に富めり。

羽織着ての句はつよき武士も羽織きて千鳥の聲をきく程寒き夜なりといふ意にてつよき人といふ多人數を代表せしむるに網を以てし、たる也。山吹も反額もの句はたくましき女が田植に出るといふ意にてたくましき女といふ多人數を代表せしむるに山吹と反額との二人を以てしたる也。彼は實に云々は彼は實に深沈にして遠き慮あるとはかの支那にありける張良ともいふべき人なりといふ意にてそのかしこき人といふ多人數を代表せしむるに張良を以てしたる也。春秋にとめりとは年齡にとめりといふ意なり。一年は春夏秋冬よりなりたてどそれを代表せしむるに春と秋とを以てしたるにて以上四は皆相換の法を用ゐたるを知るべきである。

相換法と似よつたことて易名法といふことがある。これは一物をあらはすにその物の記號を以てこれに換るかもしくは結果を以て源因にかふるかなどすることをいふのである。たとへば「日露戰を開く」といはずして「日露は干戈相見えたり」ともいふごときてこの場合において干戈相見ゆといふことは戰を開くといふことの記號である。その記號を以て一物にかへたからしてこれ則易名といふべきである。また戰を以て得たる國などいはずして血を以て得たる國などいふことあり。この場合に於て血は戰爭の結果である。この結果たる血を以て源因たる戰にかへたからしてこれまた易名といふべきである。何故に易名法を用ゐると文章に利益があるかといふにこれは相換法を用ゐた道理と全く同じである。則こゝに一事物があるとそれを全然いひあらはすよりも、その一事物の最いちじるしい記號ともいふべきものをあらはした方がかへりてよくその物を躍動させることがある。又その一事物をいふよりもそのいちじるしき結果をいつた方がまたそのありさまを著明にいひあらはすことの出來る場合がある。こゝにおいてこの易名法の必要がおこつ

てくるのである。

方今香火の盛なる、親鸞日蓮の二派より盛なるはなし。

他日の土木の勝想ふべき也。

聞くもの舌をふるはぬはなかりけり。

といふやうな文がありとするに、香火といふは信仰といふ記號である、土木といふは建築といふ記號である、而してまた舌をふるふといふは驚くといふ記號である。しかも最その本體をあらはしてある記號である。その記號を以て本體を代表せしめたのであつていづれもよく易名法を用ゐたものといはなければならぬ。

これまで述べ來れるとは皆言語の選擇についてのことである。次に言語の數のうへで文章に生氣を與ふる事がらにつきてのべやう。

おしなべて言語の數が少なければ少きだけ思想は力づよくあらはさるゝものである。冗長なる言語で思想をあらはすのは凹鏡で光線をうくるが如く、僅少なる言語で思想をあらはすのは凸鏡で光線をうくるが如きものである。前者に於ては光線が散飛して熱を失ふ如くに思想の力が全くぬけ、後者においては光線が集中して熱が高まる如くに思想に甚だ力がこもつてくるのであたる。たとてにをは一個で

も餘計なると然らざるとは文章の力の上に大なる差があるのである。

遲き梅は櫻に咲きあひて覺え劣り、けをされ枝にしぼみつきたる心うし。

といふ文があらむに「枝にしぼみつきたるは心うし」といふ意なれど、さりとてこのはといふてにをはを入れたらむには文の勢ぬけはつべし。除きたるところに生氣あることを知らなければならぬ。近松門左衛門がかつて淨瑠璃についてかういふことをいうた。それは淨瑠璃は語るものであるから少しは聲の伸縮自在になるやうに言語にゆとりをつけておかねばならぬ。それを強いて七五調にあてはめる時はかへつて歌ひにくゝなるものである。のみならず強いて七五調にせむする故餘計をてにをはなどを添へて「年もゆかぬ娘を」とひて宜しきところを「年はもゆかぬ娘をばなどいふために語勢がぬけてたるみが生じてくるものであるというたことがあるは、これは實によく文章の勢力といふことを知り得たるものといはねばならぬ。次のは枕草紙の發端である。

春はあけぼの。やう〳〵白くなりゆく山ぎはすこしあかりて紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏はよる。月のころはさらなり。闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などのふる

さへをかし。

この文においてなるべく言語を省きて生氣あるやうあらはした形跡がいちじるしく見ゆる。則この文は普通ならば、

春はあけぼのいとをかし。やう〳〵白うなりゆく山ぎは少しあかりて紫だちたる雲の細くたなびきたるもことにをかし。

夏はよるこそをかしけれ。月のころのをかしきは更也。闇もなほ螢とびちがひたるはいとおもしろし。雨などのふるさへをかし。

などいふべきをかしおもしろしなどいふ言語を省きなるべく言葉みじかくあらはしたるために文章に生氣生じて枕草紙中の名文とたゝへらるゝにいたりたのである。

言語の數といふことにつきてはまづこれだけとして次には言語の順序のうへて文章に生氣をあたへることにつきてのべやう。

まづ第一には對照といふことがある。對照といふのは意味の相反したる言語を上下相向すはるやう文中に順序することをいふ[illegible]てある。かくする時はその相對し相反照する力てもつて一方の意味が判然となり力がこもるやうに現れてくるのてある。例せば、

さても〳〵情なき親子の身てはあるぞいのと内は歎にくもれども外は春めく物賣聲

の如きをいふのてあつて内は歎にくもるといふはかなしきありさまてある、されど外は春めく物賣聲といふは陽氣なありさまてある。この全く相反對したるありさまを言ひ表はした爲に外のみ春めくさまが一層陽氣にきこゆるは無論のこと内の愁歎のありさまが一段かなしみを增してをるやうな感じを受くるのてある。これは全くこの言語の順序からしておこる結果てある。次にあげたるものは皆對照の一例といふべきものてある。

髮つかんで氷の刃脇腹ぐつと差通せばうんとのつけに倒れなし、刀は突捨てあたりをうかゝひ目をくばる奥はゆたかに音樂の調子。

昔は南陽の縣菊水下流を汲んで齡を延ばす。今は東海道菊川西岸にやどりて命を終ふ

いにしへは春をや人の惜みけむ今は花こそむかし戀ふらし。

第二には警句といふことがある。これは一見すると意味の辻褄があはぬやうて

あつてしかもよく考ふれば一貫の理があるやう言語を順序するなり、普通にいひあらはさないで、妙にひねくつて人を警策するやうに意味をあらはすによりてこれを名つけて警句といふのである。例へば

早う苦痛をとめて下され親に一世の逢初めの逢納め。

といふ文がありまするとと逢初めならば逢納めでなくある如く感ぜらるれど、よく考ふれば逢ひて直に死するのであるからして畢竟逢初めてもあるし逢納めてもあるのである。かやうに一見しては意味が撞着してをるやうであれどつまり道理のあることであるからしてこれを警句といふのである。

先生神儒を尊びて神儒を駁し、佛老を崇びて佛老を排す。

知らざるを知らずとせよ。これ知る也。

なか〳〵にわが齒まばらになりしより浮世の味はかみしめにけり。

の如きは皆警句の例にかぞへることが出來る。さてこの警句といふものは必ずしもかく短き一文の中にのみあらはれてくるものとも限らないので、時として一段落なり一文章なりに渡つて警句が用ゐられてあることがある。次の如きを見てそれを知るべきである。

保建大記を讀む。　　頼山陽

保建大記は我儕小人をして神璽寶劒內侍鏡を重ぜしむるもの也。しかれどもその言に曰く神璽寶劒內侍鏡のあるところを以て皇統となずと。もし然らむには假に盜賊をして神璽寶劒內侍鏡をもたしめむか。盜賊もまた皇統たらむなり。これ神璽寶劒內侍鏡を盜賊に資して我皇の國を奪はしむるもの。何ぞ貴重するに足らむや。これを棄つべしといへども可なるべし。則我儕小人をして神璽寶劒內侍鏡を輕むぜしむるものは保建大記也。

漢學者のうちにても頼山陽はしば〳〵この法を用ゐたやうである。彼が文章の警拔にして人を動すの力に富んでゐるものはそのひとかたはたしかにこゝに由るものであらう。かれが「宋論」に

天下を得る所以は天下を失ふ所以なり。

といふを以て起し、あるは孟子論に

智勇は以て天下を定むべし、しかも天下の定まらざる所以は常に智勇を用ゐるによる

といふ冒頭文を用ゐたるが如きは皆警句である。

最後に漸層といふことがある。漸層といふのは一層一層と漸次に意味をつよめて行つて最後に最力づよく意味をあらはすことをいふ。

京の中一條より南九條より北、京極より西、朱雀より東、道のほとりにある頭すべて四萬餘、なむありける。いはむや、その前後に死ぬるものおほく、原白川西の京もろ〳〵の邊地などを加へていはゞ際限もあるべからず。いかにいはむや諸國七道をや。

といふ文章がありとするに、始めから諸國七道の死者の多きことを述べては力のこもるとが割合にうすいかもしれぬ。それをさういはずして、まづ最死者の少き京の中のことをのべ次にそれよりやゝ死者多のき西の京白川などをいひ最後に諸國七道のことをのべたために吾人は最後にいたりて最つよき感じを受くるのである。かくの如きを漸層といふのである。次にかゝげた二例はともにこの種のものといふことが出來る。

見ぐるしきこの涙は何事ぞ。兵士の恥は艦の恥なり。艦の恥は帝國の恥なりと知らざるか。

遊ばむことを欲す。あそびて足らず。樂まむことを欲す。たのしみて足らず。

僞らむことを欲す。僞りて足らず。貪らむことを欲す。貪りて足らず。遂に盜まむことを欲す。

また誰も知りてをる龜の馬代の催促狀といふものがある。

一金三兩　馬代

右馬代くすかくさぬか。これどうじや。くすといふならそれでよし。くさぬにつけては龜がゆく。ゆくにつけてはたゞおかぬ。龜が腕には骨がある。この「くさぬにつけては龜がゆく、ゆくにつけてはたゞおかぬ」のところ則漸層の方法が用ゐてあるのであつて、この文のまとにおもしろく讀者をして力づよく感ぜしむる力はたしかにこれによつてをるであらうと考へる。

まづ文章の生氣といふことにつきては以上にてまづ終結を告げ次には文章の第三の美質たる流麗といふことにつきて述べやう。

第六章　流麗

一、流麗とは何ぞや。流麗といふのは甚だ意味の廣い言語である。則文章の調子のよいこと、文章のみやびやかなること、文章の粗野ならざること文章の俗氣のないなどは等しくこの流麗といふなかにはいつてくるのである。

まづ言ひかふれば流麗とは文章に品格のあることとてもいうてよからう。これを婦人にたとふるにいかに眉目のきつぱりした、愛嬌が人を動かすやうなるものであつても品格がなくげびた風のあるもので、あつたならばこれは決して立派な婦人といふ事は出來ぬのである。また花であつても桃の如きは色のあざやかさもあり、姿のをかしさもあるけれどもどとなく俗て品がない故遂に櫻や梅とならぶことが出來ないのではあるまいか。文章もまた實にそのとほりである。いかに一讀して直に理解し得る明瞭はありとても、一讀して手の舞ひ足の踏むを覺えざる生氣はありとてもたゞそれだけでは未だ文章を完全にするとの出來ない場合がある。この缺點を補ひて文章をして玲瓏たるすがたをたもたするものは實にこの流麗であるのである。

一の座しきにおいても床の間がなければ決しておもて正しい座しきとはいへぬのである。明瞭と生氣とのみある文章は床の間のない座しきである。流麗といふ床の間がついて始めてその文章がおもてたゞしき座しきのやうになるのである。しかしながら床の間があらうとなからうと人の住居するに不都合はない。流麗があらうとなからうと意味を理解するうへには何の關係もない。されば實用的からも考へては床の間が不必要である如くに流麗も不必要である。畢竟流麗は審美的性質である床の間があつて座しきが美術的になるが如くに流麗があつて美術的になるのである。すべて文章がいふにいはれぬ味を帶び來つて千載に不朽になるのは慥にこの流麗といふ事があづかつて大に力ありといはねばならぬ。試に左の文章を讀め。

歌のさまのよしあしを定むるは海山のけしきの人によりて心の引くかた異なるが如し。そは見る人の心高きと卑きとによりてしもぞ異なる。萬葉集に載りたる藤原奈良の頃の人々の優れたる歌どもは富士のねの雲にそびえて高く、熊野の海の底ひもしらず深きが見るも恐ろしく臨むもあやしきが如し。古今集の頃なる歌は須磨明石のゆぼひかなる海づら嵐山に小倉の峯の花紅葉のをりにあひ

て目もあやなるが如し。古今集よりくだりては、けしきはやゝ劣りぬれど猶おのづからなる海山なり。かくて題詠の歌もはらとなりてよりはおのづからなることのけしきは失せてみな人の心もてつくりなせる庭の如し。かの心廣き人は富士のね熊野の海須磨明石あらし小倉のおのづからなるけしきをめづれど心おくれたるきはのひとはかのたくみに作りなせし中島のありさまやり水の心ばへ岩木のたゝずまひなどの世に似ずをかしきにのみ目くれてかへりてはそをおのづからなる海山にも優れりとぞ思ふなる。そはおのがじゝの心の引く方なりともいひてやみぬべけれどもその道心高き方を、求むるこそまことのすぢなれ。さるを歌のみは高きかた求むる人のまれなるは口をしきわざならずや。（村田春海）

まことにすら〳〵として玉を盤上に轉ずるが如く、また品格ありてひとすぢの亂れたるところもないではないか。かくの如きは實に流麗なる文章の恰好の一例といふことが出來る。また

鶯の八聲もわきて花やかに明きなされてとしたちかへる空の光りは岩戸のひま見えそめし昔もかくやと心うきたつなむ若き時にかはらず。やう〳〵きさらぎになりては野山の梅さき出ぬらむ、川そひ柳もみとりならむ、明けはてばとく霞

をわけてなどおもひて鶯のねぐらながらの聲待つほどのこゝちまたたのし。まいて花よりしらむやよひ山のながめ、後にや風のうさもしられむときこえしちりがたのけしきなど、これがために旅ねせしところどころも思ひいでぬるをりはたましひ身にそはずこそ。（伴蒿蹊）

の文章に於きては角點のしるせるあたりは何となう語調がせまりてのび〳〵してをらぬ感じがする。この文章は前の文章とくらべて大に流麗をかいてをるというてもよろしい。しかしながら流麗をかいてあるというても主として流暢をかいてをるので文章の品格にいたりてはなほこれを具へてをるといふことが出來る。更にまた次の文章を讃め。

漢學者の本領は今更問ふまでもなし。その親玉の孔子を見よ。彼は支邦歷史における第一流の人物也。秦の始皇漢の武帝の大なるよりも更に大也。禮にあらすむは視ず。聞かず。言はず。動かずなどゝいやに四角張つては居れど融通のきく人也。大將となる腕前はなけれど政治家としては成功すべき拔倆あり。教育家としては古今東西、絶えてその比を見ず。

これにいたりては文章は紛々たる俗氣を帶びて毫も品格なきのである。かやうな

るものは決して流麗なるものといふとは出來ぬのである。

しからばこの流麗といふものはいかにして得ることが出來るかといふに甚だむづかしいのである。その性質が美的の性質であるからしてたゞ努力したばかりでは得られるものでない。美を感得し美術を味ふは實は天才のすることであつて、天才ならざるものが強いてなすことの出來ぬものである。從ひてこの性質も感得するより外によい手段はないのである。

かゝる理由あるものであるからして、吾人は思ふ。流麗を得るにはまづ流麗を以てすぐれたる作家の作を熟讀して知らず識らずの間にこれを感得してわが文章のうちにも流麗を得るやうにすべきであらうと思ふ。海保元備のいふた語に

文は古人の語氣をまなぶ也。されば文を作らむとするには先つ古人の文集或は選本等につきて數度くりかへして熟讀玩味しその文勢語路をして自然我に移りて口に騰り心にうかみてわが心と古人の文と一致にならしむべし。朱子曰韓退之蘇明允作文只是學古人聲響畫一生死力爲之必成而後止この學古人聲響といふこと極めての妙語なり。文の巧拙は全く古人の聲響を學び得ると得ざるとにあり。先儒文章を評して言ふ所の輕重緩急抑揚頓挫などいふは皆この聲響の細目なりと知るべし。

といふことがある。これは無論文章の諸性質全體を感得するをのべたのではあるがことに流麗につきてはこの語まことに動すべからざるものであらうと考へる。英國の詩人ラスキンといふ人もかつていうたことがある。

わたしの母はむりにわたしに勸めて毎日必ず聖書の長き章を心から學ぶことをさせた。のみならず大きい聲を出して朗讀をさせた。これが一年ばかりつゞいたのであるが、その間にわたしはこの書のいかなるものであるかといふことを知つたほかに大なるたまものを得た。それは何であるかといふに文章の美といふことを感得したこと、則文章につきて美的の嗜好をもつやうになつたといふことである。

人の知るが如く聖書は英文學中においてもことに流麗を以てすぐれてゐるものである。聖書はまた英語が外國語の聲律をまねせず、英國固有の聲律をそなへをつた時に英語に飜譯されたものである。それ故に最特得なすぐれたる聲律にみちてをるのである。ラスキンがかく流麗なる聖書を讀みて文章の流麗といふことを感得したのは理の當然といはねばならぬ。

日本の文學者のうちて流麗を最多く具へてをるものは誰てあるかといふならば古代においては紫式部鴨長明兼好法師小島法師葉室時長近代に於ては近松門左衛門山亭馬琴村田春海などことにいちじるき者てあらう。流麗を得むとする人々はこれら作家の著作たる、源氏物語、方丈記徒然草、太平記、平家物語、又近松の淨瑠璃、八犬傳、弓張月、琴後集等を常に讀むことを怠りてはならぬ。

かくの如く全體から考へて見れば流麗は感得すべくして學習すべきものてはないけれどもなほこれを助長すべきわづかの規則は授けることが出來る。今その四五をあげやう。

第一にはなるべく卑俗なる言語を避くることてある。かくして文章の品格がたもたれることがある。例せば前に流麗ならざる例として「あげた文章において、その親玉の孔子」とか、「動かずなどいやに四角張つては居れど」とか「融通のきく人也」とかの如き、いづれも卑俗なる言語也。ために品格を傷くること少なからざるなればかゝる言語は全く使用せざるやうにつとめたがよろしい。

第二には調子わるき言語を用ゐざるやうすることてある。これが流麗をすくふものなることはいふまてもあるまい。勿論わざ〳〵發音しにくき言語をつらねて、ある一種の感じをおこさせむとする場合はとりのけなれど、その他におきてはなるべく調子わるき發音の困難なる如き言語は除くやうせねばならぬ。

第三には同じ言語をくりかへさゞるやうにすることてある。これも意味を明瞭にもしくは勢力あるやうにわざ〳〵同じ言語をくりかへすといふ場合はとり除くべきなれど、その他においてはすべて、流麗といふ上から考へては同語をくりかへすことは忌むべきことてあるのてある。ことに文章をつゞるにあたりてそれを組立つるあまたの部分を同じ助動辭を以て結ぶなどいふことは大に文章の流麗をそこなふものてある。次の文章を見よ。之を結ぶに大むねなりといふ助動辭を以てしたるために、まことに流麗を欠きたるてはないか。

談林派の專ら勢力を費しゐ所は連句にあり。殊に會席の連句に功名を擧げむと欲したるは前に述べたる如きなり。その發句にいたりては時に甚たしき亂調の句を詠むありといへども自ら獨り沈考して幽玄の發句を詠せしものありしなり。故に談林の發句はこれを亂調のものと正調のものとの二に別つを得べし。而して二者ともに貞德時代の發句と大に異なる所あるなり。幽玄の句にいたりては古風に全く望むべからざりしもの、その亂調の句の如き、もとより貞德派の得

試むべき勇氣なかりし也。

これに反して次の文章においては各文の終が一樣なる言語もて結ばれてあらぬために甚だ文章の流麗なるやうおぼゆるのである。

吾人は必ずしもこれを以て書牘文の好模範といふにあらず。然れどもたゝ君が文學の手近きを證するの一とするのみ。その某氏某處と謂はずして實體的に人と場所を指し、然もその人は與一兵衛定九郎にして、その場所は山崎街道といふ。請ふ思へ、天下何人か與一兵衛定九郎を知らざるものあらむや。人の悉く知るところにしてまた人の敢てこれを自家藥籠中の物となすあたはざるものをは悉く採て以てその材料に供す。君が文章の他と面目を異にする、その一は即ちこゝにありとす。而してその大なる勢力を有する所以、またこゝにあらずや。

文章を讀みゆくのは譬へていふと飯を食ふ如きものである。丁度飯をたべるにある分量だけ口に入れてそれを咀嚼して呑み下してから更に新に箸てはこぶ如くに文章もまた始めから終まで一度に理解せらるゝものではなくてまづ思想のひとまとまりである一文づゝ意味を呑みこむてゆくのである。

そしてまたある分量の飯をたべる時も直に呑下するのではなくて二三遍もしくは

四五遍かみてさて呑み下すが如くに一の文を理解する時にもその形の長きものである時にはそれを二つか三つに讀み切りて理解するのである。例せば。

余江戸にありし頃さる諸侯の座にて手づま品だまといふ藝者をめされしを拜見せしことありしが甚上手にて目を驚かすこと多かりき。

といふ文がありとすると、これはたゞ一の文であつてその意味は一度にまとめて理解すべきものであるけれども、さりとて始めから終までひと息に讀み下すのではなくて、これを三つにも四つにも切りて讀むのである。則頃といふ所にて息を繼ぎ、座にてにて又息を繼ぎ、ありしがにてまた息を繼ぎ、さて多かりきにて終るなるがもし一文の中に息を繼ぐ事の出來る場合がないといふやうな時、もしくは息をつぐ所から次に息をつぐ所までの間に非常に長短の差があるやうな組立て方の文である時にはその文章にはなはだ流麗を欠いてくるのである。

前にかゞけて作蓋蹊の文章の流麗ならざる所以は全く息をつぐ間の部分に長短の差があつたからである。而してその反對に村田春海の文章に流麗があつたのは息をつぐ間の部分に長短の差が少なかつたからである。今次の如き文がありとせむに

漁火浪を燒きて海角を離れむとする新月の影さやかなり。

これを讀み下す時には燒きて息を切り「とする」にて切り以て終にいたるのである。てこの息をつぐ間の三部は多少長短の差こそあれ、大體においてその形が同じ程であるからして調子がよろしいのである。もし

漁火浪を燒きて海角を離れむとする新月さやかなり。

と爲むにこの場合に於ても燒きて、とするにて息を切るのであるか最後のさやかなりといふ部分が他にくらべて短きため、總體に流麗ならざる結果をおこしてをるといはねばならぬ。

文法上の誤謬もおのづから流麗をさまたぐるものである。「明日雨ふれば花さかむ」といふよりも「明日雨ふらば花さかむ」といふ方が流麗であるのはこの故である。

卯の花の月見む小野の山里はくれて後こそ訪ふべかりけれ。

とあるよりも

卯の花の月見る小野の山里はくれて後こそ訪ふべかりけれ。

といった方が調子よきは亦この文法上の誤を脫してをるからである。

流麗といふことにつきてはこれて止めておく。

第七章　構想法

一、構想とは何ぞや。從來述べ來つたことは言語とか文とか段落とかまたそれら文章の成分の具ふべき性質とか、一の思想があつて、それをあらはすについてのことがらをいうたのである。次には順序として一歩遡つていかにしてその思想を得ることが出來やうかといふことにつきて知らねばならぬ。この、思想を得ること、思想を心のうちに組立つることをこゝになづけて構想法といふのである。

つら〳〵考ふるに魏の文帝の詞に「文は意を以て主となし氣を以て輔となし、辭を以て衛となす」といふことがあるが、實にその通りである。實に文章の根本は意則思想である。思想があつて言語がそれに副はつてくるのであつて、言語があつて思想が出來るのではない。この故に文章を作らひとするものゝまづ第一に必要なることは思想を捕ふることである。しかしながらいかにして思想を得べきかといふことはかゝる講義などの規則では最教へにくいことがらである。畢竟これは個人の天賦の性になるのである。從つて思想を得るといふことは各個人がひとりでなさねばならぬ。たゞ間接に人がこれらの思想を得るに手助けとなるべき注意だけは、

することが出來る。それにつきてはなほ後にいたりて述べやう。

とにかくまづ第一に思想を獲得するといふことが必要である。しかしながら、たゞ得たばかりでは不十分である。これだけでは構想といふことは出來ぬ。則それらの思想中より撰擇を行なはなければならぬ。得た思想にも適當なのも不適當なのもあらう。これは無論作者が心のうちで取捨撰擇を行ふのであるけれども時としては外部の關係上から適否が定まつてくる。則聽衆もしくは讀者のいかゞによつて、あるは話すべき時間頁數の如何によつて、もしくは取るべき文體の如何によつて適當不適當が定まつてくる。かくして不適當なる思想は省きて始めて表現してよろしい思想を得ることが出來るやうになるのである。このはたらきは、ある程度までは規則にて敎ふることも出來るが、またある程度までは作者の天性またその判斷力によらざるを得ないのである。

しかしなほ考へて見るにこれら撰擇せられた思想がよく順序せられ配列せられるまでは未だ眞によく構想せられたといふことは出來ぬのである。そも文章といふものはたゞ多くの思想をよせあつめたものではない。その各思想が相互に明かなる關係をたもち輕きは輕く重きは重くして秩序整然として一の有機體の如くになつてをつて始めて文章といふことが出來るのである。英國詩人ラスキンといふ人が次の詞をいうた。

よき文章にありてはその中のことごとくの思想がよくその間に聯絡をたもつてをつて互に他を說明する助をあたへまた他より說明せらるゝ助を與へらるゝやうに順序よくまた力づよくあらはされてをるのである。さればこの鎖の如き思想の聯續が讀者の眼の前にあらはさるゝ時にはなはだおもしろくまたはなはだ勞力なく理解さるゝやうなるのである。

これはまことに動かざる言といふべきである。思想を配列し順序するといふことは最深く規則で說き示すことの出來ることがらである。さればこれより漸次述べてゆかむとする構想法のうちでも畢竟これについての事が大部分を占めるのである。

更に吾人をして構想法の三段の順序をかぞへしめよ。いはく思想を得ること。得た思想を撰擇すること。撰擇した思想を順序すること。

二、思想を得る法。人が思想を得るといふのは前にもいうた通り半ば天賦の性によるのである。則作者といふものは半ば生れ半ば作られるものである。されば

作家とならむとする者はまづ始めにその生れながらの才能の性質を知り、それに從ひていかなる方面の思想を發達さすべきかといふことを知らねばならぬ。

そも〳〵人の創作的才能といふものは實に種々のちがひがあるものである。いかなる人といふとも兩人が兩人とも一の題目につきて同じ思想を出すといふことは必ずない。則各個人の心はそれ〴〵別段の世界をもつてをる。おの〳〵異なつた領域をもつてをるのである。これを以て人には必ずある種の思想――たとへば理窟ぽいことゝか感情的のことゝか――その思想を養成すれば發達の見込のある思想があるのである。しかしこれは人みづからそれを知るのであつて傍から指示することは出來ぬのである。

さてこれらの思想の種類はかぞへつくすことは出來ないがその著しいものを數ふると、第一は、ある作者には單純な具像的な事がらをとかく考へる性質のものがある。則その人の好むところは常に見聞の事がらについて明かに規則正しく、作らずかざらず取扱ふことである。昔の作家でいへば新井白石の如き今の作家でいへば坪內逍遙の如きであつてこれらは共に物を考ふるにいつでも平俗にわかりやすくするのである。ある作家は捉へ來る各題目をことゝ〴〵く詩的な、想像にとむだ考へかたで花やかに、かざり多くあらはすのである。紫式部や曲亭馬琴や尾崎紅葉やなどは皆このうちに入るべきものであらう。またある人は世間の事物につきてとかく哲學的の態度を以て考ふるものがある。則たゞ平俗にいひあらはすことを嫌つてむづかしく理窟ぽく考ふるのである。この種の思想に富むだ作家はこれまでは雅好法師などを除いてはあまり日本になかつたが近來哲學などの盛なるにつけてはやう〳〵澤山あらはれてきた。幸田露伴といひ森鷗外といひ、ともにこの種の思想ある作家といふべきであらう。

かやうなわけであるからして人はおの〳〵おのれの思想の傾向を考へてその方に修養を積み發達をさせねばならぬ。紅葉が今日一流の作家たるを得たのはおのれの考へかたの性質を知つてその方面に主力をそゝいだからである。露伴が今日の位置を得たといふのもまた自家の特質を見拔いてその方に專ら進むで行つたからである。もし紅葉が露伴の眞似をし、露伴が紅葉の眞似をしたならば兩人とも今日の名望は得なかつたのであらう。

かくの如く各個人にはそれ〴〵獨得の傾向ある思想が具はつてあるけれど、これらの思想はひとりでに發達し生長してゆくものではなくつて、必ずやこれを助長さ

する刺激を俟つのである。しからばその刺激とはいかなることをいふのであるかといふと、一に觀察の習慣を養ふこと、二に讀書の習慣を養ふことである。今つぎ〳〵にこれを略述しやう。

三、觀察の習慣。實に吾人が創作力に深甚なる助をあたふるものはするどくたくみに目と耳とを使用すること則觀察することである。もしこゝに二人の人があつて一人はするどくちよつとした事までに注意をとゞめ、他の一人は聞かざるが如く見ざるが如く茫然としてをつたならば同じ書物の一頁も一人には多大の示現をなし、他の一人には何の啓發をもあたへぬであらう。されば創作的活動力を熾にせむとするものは絶えずこの觀察のはたらきを敏活にし緻密にするやうつとめねばならぬ。

ロード、ベーコンのいつた詞がある。いはく「好き問はなかば智識である」。まことにおもしろき警句ではないか。始終好き問を發するといふのはたえず事物に氣を留めてをる證據である。されば吾人の面前あるは周圍に氣をくばりて必ずやある思想を獲得せむと思ひたえず質問の態度をとるやうにするといふことが實に觀察の習慣を養ふことになるであらうと思ふ。

四、讀書の習慣。多く書を讀むことの思想を得るにあづかりて必要なるはいふまでもない。あまたの書を讀破してその中の愛すべく奇とすべき意と辭とを儲蓄して後に發して自らの文章の上に用ゐることが出來るからである。讀書萬卷下筆如有神の杜甫の句もあるではないか。歐陽公が三多の第一に看多をかぞへしは前にあつた通り韓退之、柳子厚などもしば〳〵この讀書の必要を說いてゐる。韓退之がかつて李巽に上りし書中に

經傳史記百家の說を窮究し訓義に沈潛し句讀に反復し、事業に磨磨して文章に奮發す。およそ唐虞このかた編簡存するもの大にして河海となり高うしては山岳となり明にしては日月となり幽にしては鬼神となり纖にしては球璣華實となり變にしては雷霆風雨となる。奇辭奥旨通達せざるなし。

といひもしくは柳子厚がみづから讀書のことをいひて

貶官より無事にして百家の書を讀み上下馳騁して乃ち少く文章の利病を知るを得たり。

などいへるを見ても思ひ半にすぎやう。しかしながら讀書といつてもその方法に種々ある。出遇ふ書物の性質にしたがひて方法をかへねばならぬ。吾人は簡單に

讀書法につきてのべて見やう。

バークのいうたことがある。それは

讀書することに多く讀書することは甚必要也。たゞし、知り得たることを咀嚼し消化し、萬事に活用することがことに最必要なり。

といふことであるが實に萬確の語といはねばならぬ。たゞ書物を流觀したばかりで活用することがなかつたならばむしろ始より讀書せぬ方が宜しいのである。人は讀書して他より思想なり文辭なりを受くると同時に更にこれを他にむかひて放たむことを務めねばならぬ。かやうに人から受けた物を更に自分の物にして出す讀書法を創造的讀書法といふのである。

されば吾人が讀書の際常に心がくべきはこの活動的の態度である。この態度を執つて始めて讀書の價値があらはれてくるのである。

無論總體にわたりていへば吾人の用ゐるべき方法はこの創造的讀書法であるがその讀書法にもまた二三の場合がある。これもベーコンのいうた語であるが、ある書籍は呑下すべし。あるものは咀嚼すべしとある如くに書物の性質によりて同じく創造的讀書法を用ゐるうちにも細讀すべきものもあるし、またざつと讀むで好いものもあるのである。

まづ始めにいふべきは細讀する方法で、これを熟讀法といふ。これは同一の書物を何遍となくくりかへしてよむことである。則完全に丁寧に、忍耐に、意義を解き理路をたどり、文書中の含蓄と示現とをさとるやうによむことである。

無論これはあまたの時間を費すによりていかなる書物にても皆この讀書法を應用することは出來ぬ。則最自己に關係ふかき、而して一世に卓絶した價値のある數部の著書にかぎられねばならぬ。十分なる利益をあたへ、讀書を創造的ならしむるについてはこの熟讀法が最効益が多いだらうと考へる。

第二にいふべきは速讀法といふことである。これは前と反對で流覽一過して僅少の時間内にあまたの書籍を讀破する方法をいふのである。天下の書籍に熟讀法を用ゐるべきものは澤山あるが、速讀法を用ゐなければならぬものは一層澤山あるかと思ふ。新聞紙の如き、小説の如き、旅行案内記の如き皆この種の讀書法を用ゐるべきものである。これらは詳しくよむ必要はない。一讀呑下してよろしいものである。

速讀法によりて吾人は萬般の書物に眼をさらすことが出來る。たゞこの方法を

用ゐるにあたりて忘るべからざることは迅速に讀過するをよく注意をあつめておいて茫然としてをらぬことである。またその上に必要なることを逸せざるやうに機敏に眼をつかふべきことである。もしこの注意がない時には讀み了りても胸中一物も止めざる如き事があるべく、胸中にある物が止りても不必要なる事からが澤山止るといふやうなることがおこるのである。

第三にいふべきは解題的讀書法ともいふべきことである。これは速讀法よりも一層速かなる讀法を用ゐたいといふやうなる場合に用ゐるべき者で、則ところ〴〵ひろひ讀みすることをいふのである。文章中の見出しだけ見て文意を理解せむとする如きことをいふのである。時としては序文だけ見て又例言だけ見て、もしくは題だけ見てその書の內容を知る如きことがあるより名づけて解題的讀書法といふたのである浩瀚にして自己に關係うすき書物、すべてわが專門とすること以外の書物、あるは統計報告書などは皆この讀書法を用ゐて可なるものであらう。

この讀書法をなすにあたりて必要なるは明察の力を具ふべきことである。これ明察の力があつて拾ひ讀みをする時、必要なること不必要なることを判斷することが出來るからである。解題的讀書法をなす時に吾人に最助をあたふるものはその書の索引である。また內容の目次である。撰述の由來を明にせる序文である。これだにあらば書籍の內容の大要は一目瞭然とあることが出來るからである。これにつけても日本の書物の不便なることは目錄のなきことなり。目錄はあれど索引のなきこと也。これは實にわが國書籍の一大缺點であつてこれがために吾人が研究の際不便を感じ無用の勞力と時間とを費すことは尠少であるまいと思ふ。

五、題目の撰定。以上述べ來りしは思想を考へ出すことにつきてありしが、これよりはその思想を配列する事に就て一言しやうと思ふ。まづ第一に文章を作るにあたりて吾人の心胸に來るはその題目である、題目は畢竟文章のうちに叙述せむとする事項の主想也。思想全體をわづかの言語に集沖して一目瞭然たらしめたるものである。この題目が定まらなければ筆を着くべき範圍が定まうぬからして吾人が文章の第一着手に考ふべきはこの題目を撰定することであるのである。今題目の二三をかゝげれば

言語學者として新井白石を論ず。

神道の宗教的價値。

わが國平安時代における教育。

の如きである。しかしながら、もしかくいはずして「新井白石」「神道」「日本の教育」などいうたならば題目といふことは出來ぬ。なぜであるかというたならば、そのおほふところ廣漠としてほとんどその意を捕捉することが出來ぬからである。よしや「新井白石」といふことを題にせむとしてもたゞこれだけでは筆の着けやうがない。新井白石についてのいかなる事を書かうか。その政治的才能を書かうか。その文學の才能を書かうかと種々考へてどれと定まつて始めて筆をおこすことが出來るのである。されば「政治家としての新井白石」とか「文學者としての新井白石」とかありて始めて一篇の思想を集沖させてをるのであるからして、これを題目といふことが出來るのである。たゞ「神道」というたばかりでは題目にならず、また「日本の教育」というたばかりて題目にならぬこともこれと同じ道理である。

一すべて題目は狹ければ狹き程かくべき思想の範圍を明瞭にさせる。從來の中小學校の作文の教師がやたらに大なる題目を生徒に與ふるはいたづらに兒童の頭腦をくるしむるに過ぎないこれは深く注意すべきことであらうと考へる。

六、結構を定むること。構想の順序として題目が定まらばそれに關したる古今の學者詩人の思想感情またそれに對する故事等すべての材料を蒐集することをつとめねばならぬ。たゞこの古今の學者詩人の思想感情を蒐集するにのぞみて吾人のかへす〳〵注意すべきことは必ず剽竊といふことを行ふまじきことである。古今の名文名句によりて吾人の思想を觸發せしむるはもとより妨ない。またそれらに換骨奪胎の法を用ゐて陳を轉じて新となし故を變して清となすも決して差支ない。しかれども古今の名文名句を全く自分のものゝ如くにしてあらはすといふことは實に剽竊であつて固くつゝしまねばならぬことである。

さてかくして材料が蒐集せられたならば次には一篇の思想の骨子をくみたつることが必要である。則いかなることを始めにいひ、いかなることを終にいひ、而していかなる事を中間にいふといふやうに大體の組織を明にしなければならぬ。さて骨子もその文章によりて種々の形をもちて來るだらうけれど通例次の形式においてあらはれがちのものである。

一には冒頭においてのぶる事。

二には展開においてのぶる事。

三には結尾においてのぶる事。

冒頭といふのはいはゆる入題で、こゝは全文章に述べむとする大意をかゝぐる部

分である。綱領を篇首に冠するのである。冒頭につぐものが展開である。これは冒頭にのべたる大意を鋪叙し詳述する部分である。かの文章においていはゆる變化といひ抑揚といひ、頓挫といひ、波瀾といふやうな方法の用ゐらるゝは實にこの部分をおいてゝある。最作者の手腕をふるふべきところである。これを軍にたとへていはゞ冒頭は前衛である、而して展開部は實に中堅とも參謀部ともいふべきところである。さて結尾は展開においてちらばつた思想をまとめて收束する部分である。一見すると甚だ不必要なる部分の如くに思はるゝけれど實はなか〳〵肝心なる部分である。いかなる文章においても結尾の勢のふるはざるは誠に勢のないものである。從ひて人に感動をあたへることが少い。冒頭展開の部分において折角ひろげた文勢のちゞまらざるやうに、恰も敵を擊つて退かむとする軍隊の正々堂々毫も亂れたるところなく從ひて敵をして追尾する能はざらしむる如くに一篇を結ぶかこの結尾のつとめてあるのである。今左にこの三段を具へたる文章の一例をかゝげやう。これは安積艮齋の書いた唐宗詩醇の序である。

天地に元聲あり。人これを得てこれを詩に發す。古詩三百篇の如きはこれならむ。後世相去る邈遠たり。しかれども天地の元聲未だ嘗て泯びずして溫柔敦厚の旨なほこひねがふべきものあり。さるを輓近の作者浮艶纖佻の風を喜ぶは學ぶところその方を失ふなるなからむか。

それ詩は古人を師とすべし。古人に名家あり。大家あり。名家は峨眉天台の如くにして各奇態の賞すべきものあり。しかれとも未だ宇内の全勝を具ふる能はず。大家は岱嵩の如し。雄俊高壯、天を摩し地に蟠り峯巒怪詭雲煙滃渤天下の偉觀を極む。學者これを以て師となさば則趨向正しく規模宏くして竟に風雅の旨を失はじ。

これ故ては詩は天地の元聲であることをいひこれを學ぶには宜しく大家を以て師となすべきことをいへるにて廣く學詩の方針をすべくゝりてのべたる也。されば この二段落は冒頭なりといふことができる。更に次を讀め。

歴世詩道の盛なるは唐を以て冠冕となす。陳子昂張曲江、は雄渾を以てすぐれ王維孟浩然韋蘇州は韻神を以て勝れ、岑參適高王昌齡は典雅を以てすぐる。その他指を屈するにたへず。然れども百代を籠罩し萬物を陶鑄して高逸沈雄古今の變天下の能事をきはむるものはたゞ李杜のみ。韓文公は直に二子を追ひてこれに觀せむとするも未だ迹あるを免れず。しかもその學以て千古を包羅するに足

りその才以て萬彙を彫鏤するに足る。二子のほか更に勁敵なし。白香山は一副の鑪鞴を開き、才調清婉古今の人情を曲盡し讀む者をして咨嗟泣下らしむ。あるひはこれを淺俗といふといへども安むぞ推して大家たらしめざるを得む。

宋の初崑體盛に行はる、歐陽公起てこれを洗ふ。黄陳の奇恣、素張の贍蔚旗鼓相當る。獨り蘇長公才力天縱光怪百出變化神に入る。嚮然として杜韓の後勁たり。陸渭南、清隔香山に類し、忠憤慷慨綽として少陵の風骨あり。范楊はなほ膝薛の如きのみ。およそこの六家は異曲同工にして、煙燿鏗鏘、天地の元聲大雅の遺音賴つて以て益す明かなり。而して氣格宏大泰山喬嶽の如きは、以て百世の師となすべし。

この二段は前の總論をうけてこれを舖張し唐宋の諸家を細敘してその特質をしるせるなれば以て發展といふことを得べし。さて

乾隆の御選唐宋詩醇はその選公にその評精しく六子の精神面目ことゝ〳〵く出づ。洵に藝苑の正軌也。山本行時まさにこれを梓に鋟らむとす。橋本大路爲に籤注を加へ余に屬してこれに序せしむ。方今承平日久しく奎運ますます盛なりしかも詩風はあるひは浮艶に流れむとす。この書布せられ者皆詩道の正軌に

に由るを得ば異日休明を舖敷し泰平の盛を鳴し、大雅の音を接せむものまさに彬々として出でぬべし。故に余欣然として筆を濡らしてこれに序せり。

といふにいたりて一篇をすべくくりこの書によりて後世を益することの大なるをのべたるなれば以て結尾となすことを得む。

七、思想の充塡。吾人が文章を作るにあたりてはまづ始に一篇の結構を定むべきものなるはすでに述べた。しかし結構といふは冒頭發展結尾にいかなるとをいはむかを定むるにて、いはゞ一篇の骨子を作るにすぎないのである。無論この骨子だけでは文章は出來ぬ。この骨子に肉や衣服をきせねばならぬ。則皮肉となるべき思想をつけ加へて文章を完全にせねばならぬ。之を思想の充塡といふのである。さて充塡に種々の方法がある。あるは粗より精に入ることによりて、根本より枝葉にわたることによりて、あるは意義を反複することによりて、あるは說明的例證を添ふることによりて又ある時は故事格言を引用することによりて充塡は爲さるるのである。次にかゞげたる徒然草の文章は「花はさかりに月はくまなきを見るものかは」といふ骨子を充塡したるものと知るべし。

花はさかりに月は隈なきを見るものかは(骨子)。雨にむかひて月をこひ、たれこ

めて春のゆくへ知らぬもなほあはれに情ふかし(反複)。歌のことば書にも花見にまかれりけるに早くちり過ぎにければとも、さはる事ありてまからでなども書けるは花を見てといへるに劣れることかは(反複)。花のちり月の傾くを慕ふ習はさることなれど、殊にかたへなゝる人ぞ、此枝彼枝散りにけり。今は見どころなしなどはいふめる(反複)。

萬の事も始終こそをかしけれ(骨子)。男女の情もひとへに逢見るをばいふものかは。逢はで止みにしうさを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとりあかし遠き雲居を思ひやり、あさぢか宿に昔をしのぶこそ色このむとはいはめ(反複)。

構想につきては前にもいひたりし如く、その大部分は規則もていひあらはす事が出來ぬ。構想の自在なると自在ならざるとはほとむど天賦の性による。さればまづこの位にしてこの章は止めておかう。

第八章　記體文

一、記體文とは何ぞや。いかなる進歩しない社會の人民でも、自分たちの見聞した事がらや、また想像したものごとを言葉にあらはさうとする働は生れながら具はつてをるやうに見える。則人がその心に感じた事物のありさまをその通りに他人にあらはして見せやう聞かせやうとする働は先天的にあるやうに見えるのである。この故に世界のいづれの國でもその最古い文學としてあらはれてゐるものは皆このわが見聞したことどもを人に見せやう聞かせやうとする目的を持つてをるもののみである。

さてそれから漸々に社會が發達してゆくにしたがひ、人が自分の信じてゐる眞理を證明せむとする働もしくはわが願ふところを人に行はせむために人を説服する働などが人の心のうちにおこつてくるやうになつてくる。それで前のわが見聞のことがらを人に見せん聞かせむと思ふ働があらはれて出來た文章が記載文である。またある眞理を證明せむとする働があらはれて出來た文章が議論でわが願ふ通りに人を行はせんとする働があらはれて出來た文章が誘説文である。

記載文といひても物を見せ聞せむとする文章と事を見せ聞かせむとする文章との二にわかれる。換言すれば一は記體文であつて二は敘事文である。そのうちこの章においてはまづ記體文につきて略述しやう。

今こゝに記體文の定義を下さうならば

記體文とは言語を以てある定まつた物の姿をあがきいだせる文章をいふのである。この定義において注意すべき三の點がある。一はある定まつた事といふことで、二には物の姿といふことで、三には書くといふことである。

まづ始めのある定まつたといふことにつきて説明しやう。記體文に書く物は千差萬別である。しかしながらいかなる物を書くとしてもその物は必ず作者が見たか聞いたか、もしくは想像したある特別の一物でなくてはならぬ。もしその物がどの物ともきまらぬある抽象のものであるといふならばそれはその文章は説明文といふべきであつて記體文とはいへぬのである。則吾人がこゝに馬のことをしるさうとする。その時その馬といふのは實際あつたものでも、もしくは假想のものであつても、とにかく作者が見たか、もしくは見たと假想した、則世間に實在する馬でなくてはならぬ。それと異なつてたゞ馬といふ概念をしるしたならば、それは説明文である。動物學に説明してある馬といふことは馬といふ概念であつて、ある特別の一個の馬を指したのであらぬ。則記體文のうつすべき物は固定の一物であつて、どの物にも應用し得べき概念ではあらぬのである。記體文と説明文とは共に物の姿をしるすものなれど、かういふ根本の區別があるのである。吾人はこれを忘れてはならぬのである。

次には物の姿といふことを説明しやう。物といふのはその意味が極めて廣い。たゞ家とか山とか川とかいふやうに眼に見ゆるものばかり物とはいはぬ。人の心、人の性質世のさまなどでも物といふ中に含まれてくるのである。則物質的と精神的との論なくすべて事がらにあらざることは皆物といふことが出來るのである。ある人は記體文といふのは花鳥風月のさまをしるした者とか、家屋人物の姿を書きたものとかをばかり記體文と心得る者があるか知らぬが、それはまだ記體文の考へかたがせまいのである。人のかなしみに沈める心のありさまを書いた文章、人の性質の溫順なるを寫した文章、もしくは世の中非常に亂れてゐる姿を躍らせた文章があつたならば、それらは等しく記體文の中に數へることが出來るのである。今日敘情文などいふ名目をたつる人もあるなれど、かかる名を用ゐる必要がない、なにとな

ればみな記體文の中に入れることが出來るからである。またよし物を寫すにしても、その物の靜まつてあるありさまを寫すのであつて、働いてある樣はうつさぬのである。物の靜まつてある狀態がそのありさまで、その働いてある狀態が働きである。記體文はありさまを寫すなれど働はしるさぬのである。同じく川のありさまを記すのでもその廣々したるさまとか淸らかなるさまとかを描いたならばそれは記體文である。さやうでなくその山間より出て丶里に出で海にながれこむ運動をしたならばそれは叙事文である。吾人が記體文のうちて物の姿といふことに注意しなければならぬといふはこゝをいふのである。

最後に考ふべきは書くといふことである。一物の姿をしるすにあたりて只片はしから各部をならべてしるしゆくが必ずしもその物の姿を書くといふことは出來ぬ。無論一物の各部をかぞへてその物を知るといふことも無用であるとはいはぬ。たゞ一物についての智識を得たいとかいふ時にはかく目錄的に各部分を順次にかぞへて滿足するといふことがしば〳〵ある。しかしこれは記體文の一種であつて、かくするのがいつても記體文であるといふことは出來ぬのである。記體文は物の姿を書くのである。畫家が色彩を以て花鳥風月のさまを畫き出す如く言語もて物の姿を書くのである。物の姿が書のやうに髣髴として讀者の眼前に躍るやうにさせるのである。女の姿を書くとするにみどりの黑髮と紅顏と雪膚と細腰と玉手とをよせあつめただけては未だ書いたとはいへぬ。豐頰、嬌口、娟嬋として蓮步をうつす活美人を紙上にうかばして始めて書いたといふことが出來やう。かやうにするのが記體文の務である。記體文の働である。書くといふことがなくては記體文の記體文たるところは失はれたのである。

物をしるすといふことまたその姿をしるすといふことにつきては規則を與ふる必要もない。たゞ吾人の知らざるべからざるはいかにしてこの描くといふ目的を達すべきかといふことである。されば記體文の說明は所詮は描きかたの說明にすぎぬ。吾人は今つぎ〳〵に述べやう。

二、細寫法。記體文において物の姿をしるす方法は二に大別することが出來る。一は細寫法で、二は活寫法である。細寫法といふのは一物を各部分にわかちてそれらを一々かたはじから列記してゆくのである。活寫法といふのはしるすべき多くの部分中からある最顯著なる部分のみを撰擇してるすのである。まづ細寫法からいはう。次の文章の如きは細寫法を用ゐた記體文の一例である。

これはフホードのジョージ、ワシントンといふ書中の一節でワシントンをしるしたものである。

ジョージ、ワシントンは身長たかだかとして印度人の如く六フート二インチの丈であつた。體量は千七百五十九年衆議院の椅子を占めた時百七十五ポンドあつた。かれの體格は筋肉よく發達し形貌傑偉であつた。その手足や骨や關節は非常に大きくあつた。また肩巾廣腰のあたりは程よくあつた。鼻大く高く、青黑き眼は烱々として光するどし。その顏はひろしといはむよりは長しといふべく、頰骨高くまろく、顎形よくしまつてあつた。皮膚の色は日光に燒けたれど、光澤がある。黑き鳶色の毛髮があつて、容貌は愉快に心切らしく、しかもどことなく威があつた。その口は大にしてたえず固くとぢたれど時としてそのまばらなる齒をあらはした。その姿うるはしくやさしく、顏の筋肉は完全に發達して種々の深き感情をあらはすに適してあつた。人と談話の時はてきぱきとおもしろくまたかろ〳〵しくなかつた。その聲は強いといふより心よくあつた。その風貌よくとゝのほりてかつ威嚴の犯すべからざるものがあつた。

また次のはワシントン、アービングがグラナダ市をしるしたもので細寫法の一例とすることが出來る。

グラナダ市はこの國の中央に位してシーラ、ネバダの山脈にかくされたり。この市はこの高き丘を蔽ひたり。その丘の中間を流るゝ川は則ダロ河なり。この丘の一に宮城あり。またアルハムブラ城あり。この城は優に四万五千の人を容れてあまりありといふ。この丘に向へる他の一の丘には頂上にひろびろしたる原野あり。人家稠密し炊烟いとしげし。こゝはアルカツアバといふ城もて固めらる。これらの丘の麓には七万にのぼれる家屋のムーア市の習慣にしたがひてせまき正方形の町に分たれてみち〳〵たり。家々には庭園ひろく、庭園には泉や水などよしありてくさ〳〵の果實を結びたる木立てり。されば此の市の家屋のこれら小丘のかたはらに連りたるさまあだかも市と森と混交せられたる如き觀ありて眺望極めて佳なり。さて全市は高き城もて包圍せらる。周圍三リーグにわたり十二門を有し、一千三十の物見によりて固められたり。

また左にあるは、ある人の姿を細寫したものである。

身のたけ五尺三寸骨ぶとに肉肥えたる方、頭大く肩はゞ廣し。色は黑くして、頭髮やゝ白髮をまじふ。眼細くして長し。鼻ひくゝ口はきはめて大に齒ならび好

し。顎細くして耳へかけて一面に黒髯生ひたり。衣服は琉球がすりの綿入に紬の羽織をかさね博多の帶黒木綿の足袋を穿ちて桐の駒下駄を穿きたり。

細寫法は大概實用的の文章において起つてくるものである。しかし前にもいうた如く、物の姿をたゞこまかに列擧したといふだけでは未だその物を畫がいたといふことは出來ぬ。何となればこれによりていつでも物の姿有樣がうかびてくるとばかりも限らぬからである。たゞ細寫法が一つでも物の姿をうかばすると限つて居らぬのみならず、かへりて細寫法を用ゐざる方がかへりてありさまの活動してくることがある。他の語にていへば片言の萬語にまさることがある。隻句に長篇の及ばぬことがある。こゝにおいて細敘法の反對なる活寫法といふことが出來てくるのである。

三活寫法。活寫法とはかくの如くしるすべき多くのものゝ中よりしてあるものを引抜きてじるし以て情景を躍動させるのをいふのである。さればこの法を用ゐるにつきて吾人の知らざるべからざる事はいかにあるものを引抜いてしるしたならばありさまを躍らすることが出來るかといふことである。これはいふまでもなく最顯著なるものを撰擇すべきのである。全體を代表すべきものを引きぬくべきのである。例せば源平盛衰記に熊谷直實が無官太夫敦盛を追蹈してこれを殺さむとする時始めてその容貌を見たことをしるした段がある。そのところに敦盛のさまを畫いて外のことはいはず、たゞ

薄化粧してかねぐろなり。

とばかり書いてある。しかしこれによりて敦盛の二八の容顏花をあざむくばかりの美麗なるさまがよく浮んでをるではないか。これ敦盛のありさまにつきては種々記すべき事があれど薄化粧してかね黒々とつけたるは殊にいちじるしきやさしき有樣なる故これを撰んで全體を活かしたのである。

又左傳に、晉と楚とが邲での合戰に晉の軍勢が大に敗れたさまをしるした一節がある。そのところの文章を見るに敗れたありさまをくだ〳〵しくしるさないでただ

中軍下軍爭舟。舟中之指可掬。

とばかりある。これは敗軍の士卒が互に死を免れんとてわれがちに舟をとりつきてそれがために舟が沈まむとする故舟中の人これを恐れて刀を拔きて取りすがりたる指をなで斬りに斬りはらひし故落ちたる指が手もて掬ひ得べき程多かりきと

いふことてある。との一句でよくその時の亂軍のさまを浮ばせてあるかと思ふ。

また同書に宋の南宮長萬といふ者その君の閔公を弑して陳といふ國へ逃亡しける時宋よりこれを貰ひうけたき事を陳べ申し込むだ。しかるにこの萬といふ者大力であつたから酒に醉はして犀の皮でつゝみて送つてきたことがしるしてある。

さてそれが宋に屆いた時のさまを記して

以犀裹之。比及宋手足皆見。

とばかりある。これで萬が途中で酒が醒めて驚き怒りたる大力のさまがよくあらはれてをるかと思ふ

又一つ例をあげむに賀茂眞淵の歌に

播磨がた瀬戸の入日の末晴れて空よりかへる沖の釣舟

といふがある。これは瀬戸内海の晩がたの絶景を詠じた歌でまことに繪に向ふやうなこゝちがする。このわたりの晩景はなか〳〵數語を以て悉すべきではあるまい。遠山の暮靄につゝまれて眠るが如き、松風の颯々として琴をかなづる如き、あるひは長汀曲浦の目もあやなる、あるは金龍の海上にをどれるが如き、その千樣のながめはとても千言萬語にてものぶることは出來ざれど、ことに夕日晴れわたり遙かの沖合より豆大の釣艇のよび聲かすかに歸りくるありさまは最うつくしくのどかに趣味あるありさまてよくこのところの絶景を代表してあまりあるだらうと思ふ。このありさまを摂びてしるしたるために一首躍動、景致を紙上に畫き得たるは、信に故ありといふべきてはないか。

香川景樹の中空日記のなかに次の歌がある。

あまのすむ磯べの家はあばらにて門より裏の海を見るかな

門より裏の海を見るといふ一句わづかに一句なれど、よくあまの家の小くはし近く、あばらにて粗末なるありさまを浮ばしてをるではないか。これまた選擇の當を得てをる故といはねばならぬ。かの能因法師が歌に

山寺の春の夕くれきて見れは入あひの鐘に花ぞちりける。

といひてよく山寺の春の夕ぐれのさびしさまを描きたる、もしくはつれ〳〵草にはるかなる昔の細道をふみわけて心細くすみなしたる庵あり。木の葉にうづもるゝ筧のしづくならでは露音なふ者もなし。

といひてまた山里の幽棲のさびしさを思はたるなどは皆この活寫法を巧みに用ゐた例とすることが出來る。

かくの如く活寫法は多くのありさまの中から、ある物を撰擇することではあるけれども、しかし、この撰擇したるものはいつでも少數であつて必ず二三の語で言ひあらはすことが出來るとばかり限つては居らぬ。否天才の文章にはしばしば數語で全幅の景致を躍らせたものもあるけれどもそれより以下の作家のものにありては、もそつと多數の語句が使用せられてあるといふが普通である。しかのみならず、描くべき物の種類によりてはこれをさま〳〵の方面より觀察してしるす必要のあるものがある。さういふ場合には是非とも澤山の語句をならべてうつすにあらざれば十分その姿を書くことが出來ぬのである。

さて活寫法と總稱するけれどこれにもいろ〳〵の種類があらうと思ふ。則いろいろの手段によりてなしとげられた活寫法があらうと思ふ。それでそれら活寫法の方法は人々の創意によつて千差萬別で數へることも分類することも出來ぬけれども左に述べむとする四の方法は最普通に行はるゝ方法であらうかと思ふ。四の方法とは何かといふに、一には周觀法。二には概括法。三には敘事法。四には述果法である。

四、周觀法。こゝに一物のさまをしるさむとするに、だゞ一方面からのべたばかりでは十分書くことの出來ぬことがある。その場合にはこれを種々の方面から周く觀察して書くことがある。これを周觀法といふのである。例へば空間に關係のあるものならばその位置の順序によつて次第に述べてゆくごとき事をいふので、則一の家のさまをしるすに始は門のこと次に玄關のこと次に應接室のこと、次に居間のこと、次に臺所のことゝいふやうにしるすのである。次にしるした中島廣足の古寺をしるした文章の如きはこの一例である。

松風木高く吹き渡りてはる〳〵とのぼりゆく道のをかしきに大きやかなる石碑のかたへに立てる苔むして讀むべくもあらねど此寺の古き故よし記したるなるべし。例の唐めきたる門、軒くちていたう古りにたれどあたり清らに掃きたるは、さる方のつとめにはさすがに心入れたる程も見ゆ。御堂に詣で、犬ふせぎの内を見入るれば、いと大きやかなる佛の古き佛したるが立ちたまへる、むかし百濟より渡し奉りしもかゝる御さまにこそはと覺ゆるに名香のいとかうばしく薫り出でたるもいと尊し。僧房のかたへ行くに筧の水音靜かにて人のけはひもせず。かゝる所に二三日籠り居て書など讀みたらむにはいかに心澄みてをかしからましと覺ゆ。鳥の聲々谷ふかく聞えて日かげもやうやう傾くに

おもほへず、撞き出てたる鐘の音の山深うひゞきたる、所からましていとあはれになむ。

この文章中、始より「記したるなるべし」といふまでは寺までゆく道のさまをいひ、「例の唐めきたる」より「心入れたる程も見ゆ」といふ迄は門のわたりの、さまをいひ、「御堂にまうて」より「薫り出でたるもいと尊し」といふまでは御堂のさまをいひ、また僧房のかたへ行く」といふより「心すみてをかしからましと覺ゆ」といふまでは僧房のわたりのさまをいひ、それより以下は寺のうしろの山谷のさまをいうたのである。

また時間に關係のある物ならば順序によつて次第に述べゆく如きも周觀法といふことが出來る。則花のありさまをいふに朝のさま晝のさま夜のさまと順序にのべて花のさまを十分にあらはす如きをいふのである。次にあげたる清水濱臣の終日見花といふ文章は恰好の一例であらうと思ふ。

いてや世にめでたき櫻のうへをば何にかはよそへ心見む。たゞなつかしき女のかたちにこそは似かよひたりともいはめ。峯の梢やう〳〵霞みわたりて、ふた花三花ほころびそむるより思はぬ風にさそはれて、あらぬ姿にやつれゆくまでげに一時の程も猶さこそはあれ。

咲ものこらぬあした妻戸おし明けて見出すに宵の雨のなごり晴渡りて、露に眠れる花のさま寐くたれのおもゝちまづ思ひ合せらるべし。とかくする程日かけさしのぼりてさと吹く風の露拂ふまゝに花の面起したるは向ひ居たる櫛げおしのけて迷ふ筋なき黒髪をかきやりたらむけはひぞするや。晝間の程心のかぎり匂ひみちたる梢にうち向ひたるは思ふらむ人とむつ物語するこゝちすべし。落ちかゝる入日の空一きはあがりて影なのめにさしたる夕ばえわざと作り出たらむやうにもてはやされて、てりかゞやけるは、かはらけの數重りていさゝか醉をあらはせる顏つきとも見なば見なさるべし。暮果てゝ月さしのぼれるにきはやかにはあらで、なつかしき程に匂へるはおほとなぶらのもとにそばみるたらむ火影のえもいはぬさますべし。しかのみにあらず、霞たなびくあしたは、をすの透影おもほえ、小雨そぼふる夕べは袖の涙思ひやらるゝよ。

からやうの物とこそならべいはめ、よしやいかばかりのかたち人なりとも、ひねもすに物の隔なくうちかたらはましかば玉の瑕見出なまし。この花の姿ばかり明るより暮るゝまであから目もせず、向ひ居たりとも更に塵ばかりのうたてしきところ添はじなど、思ひなさるゝ女、おのが齡にふさはしからぬ花心とや人々笑は

むかし。

五、概括法。一の物のすがたをしるすにあたり、まづそれをすべくゝりて則概括して始にあげ、その次にありさまをこまゝとならべしるすを概括法といふのである清少納言の枕草子の發端は適例であらうと思ふ。

春はあけぼの。やうゝ白くなりゆく山きはすこしあかりて紫だちたる雲の細うたなびきたる。

春はあけぼのといふは春はあけぼののさまがいとおもしろしといふことである。かく概括して述べてをいてさて、こまかに曙のけしきをのべたのである。

夏はよる。月の頃はさらなり。闇もなほ螢とびちがひたる。雨などのふるさへをかし。

これも夏は夜がをかしと概括してのべてをいてさて、次に夜のありさまをのべたのである。

秋は夕ぐれ。夕日はなやかにさして、山の端いと近くなりたるに、烏のねどころへゆくとて、三つ四つ二つなどとびゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちいさく見ゆるいとをかし。日いりはてゝ風の音、虫のねなどいとあはれなり。

これも始に秋は夕ぐれかおもしろしと總べくゝりてさて次にこまゝと叙景の筆を用ゐたのである。

冬はつとめて。雪のふりたるはいふべきにも非ず。霜などのいと白き、さらでもいとさむき。火などいそぎおこして、炭もてわたるもいとつきゝし、昼になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、すびつ火桶の火も白き灰がちになりぬるは惡し。

これはた始に冬は朝がおもしろしと統括してのべて後に詳しくそのさまをのべたのである。源氏物語に宇治の姫君のことをしるして、

姫君はいとあざやかにけだかういまめかしきさましたまひてげにだゝびとにて見奉らば似氣なうぞ見えたまふ。

といひてまづその總體をすべくゝりてまことにたゞ人にて見奉るは似合はしからざるまでに高尚なる御有樣なりといひ、さて、その次に、

櫻の細長山吹などのをりにあひたる色あひのなつかしきほどに重りたる裾まで愛嬌のこぼれるおつるやうに見ゆ。御もてなしなどもらうゝじう心耻しきけはひそいたまへり。

と立ちかへり、こまかに述べたるはこの概括法を用ゐたると見て宜しい。源氏物語には人物を畫く時しば〳〵この法が用ゐられてある。若紫の卷に紫の上をいひて、

十はかりにやあらむと見えて白ききぬ山吹などのなれたる着て走りきたる女子數多見えつる子どもに似るべくもあらず(概括法)、いみじう生ひさき見えてうつくしげなるかたち也。髮は扇を廣げたるやうにゆら〳〵として顏はいと赤くすりなしたり。

としるし、また紫の上の祖母の尼君をしるして、

いとなやましげに讀み居たる尼君たゞ人とは見えず(概括法)。四十あまりばかりにて、いと白くあてにやせたれどつらつきふくらかにまみの程髮のうつくしげにそがれたる末もなか〳〵長きよりもこよなう今めかしきものかなとあはれに見たまふ。

と述べたるもわかて同筆法である。

六、叙事法。記體文は物の姿をうつす文章であつて、叙事文は物のはたらきをうつす文章である。かくその間に區別があれど、時として物のはたらきを叙して以てその姿を躍動せしめむすることがある。則叙事によりて記體の目的を達せむとすることがある。いふまでもなくこの場合において作者の目的は記體である。しかしその目的を達する手段として叙事を用ゐるのである。かゝる活寫法を指して叙事的活寫法といふのである。簡單なる例にていはゞ其角の句に

船頭の喧嘩は濟むで蛙かな

といふのがある。これは夏の晩がた川岸などで船頭が何かの行違ひから喧嘩をして非常にさわがしかつたが今はそれもすむで誠に靜になつて蛙が鳴いてをることである。といふ意味である。船頭の喧嘩は一の事件である。さればこれを叙したは叙事である。しかしこの叙事をなしたるはこれが目的であるのではなくて今のしづなる有樣をしるさむためにその對照としてひき來つたのである。

則靜寂なるありさまを畫かむためにこの事件をしるしたのである。されば以て叙事的活寫法の一例とすることが出來やう。又次なる中島廣足の漁村といふ文章を觀察せよ。

磯のすみかばかり哀なるものはなし。いと便なき海べの風もたまらぬ松蔭などに唯かりそめに作りたる蜑屋どものさま浪うちよせなばやがて流れもうせぬべういとはかなけに見ゆるを繪にかきすさびたるなどはなかなかにをかしきも

のからさて住まひなば何こゝちかせましと思ひやるだに心細し。

夕つかたなど年老いたる男の手がらみしたるが磯べに立ちて今日はいと遲くもあるかなどいひつゝ沖の方をまもりをり。孫どもにやあらむ眞砂の上を走りありきつゝ遊び居たるに入日さしたる島蔭より三つ二つかへりくる船の梶引をりて誇らしけなるを老人まちえ顏に打ほゝえみたるは幸多かりしにやと見ゆ。

渚によせて飛下るゝまゝ網繰りよせなどとかくしつゝのゝしるに男も女も又出てきて大なる籠に魚どもとり入れつゝ荷ひもてゆくさま、さはいへど賑ははしげなり。くどつめく物もてきて小き魚三つ四つ乞ひもてゆく童などもあり。すべて人多く立ちこみさわぎて舟のあたりかしがましくさしよりて覗くべうもあらず。いと長き網の渚にかけほしたるを繰りためて取入るなどやう〳〵靜まりゆけばこなたかなた火ともしたるすき影もあらはにていとあはれに見ゆ。

この文章のなかに漁船のかへりくる事、船や網をかたづくること童が魚を乞ひにゆくことなどは事を叙したのであつて記體ではあらぬ。しかし、この叙事によつて漁村の晩景が浮むでくるのである。則作者は記體文を作らむために、ことさらにその間に叙事の筆を挿むだのである。さればまた叙事的活寫法の一例と見るべきもの

のであらう。

七、述果法　物のありさまをのべむとする時にそのありさまをくだくだしく述ぶることをなさずしてその物のありさまが吾人の心にあたふる効果をのべておのづからそのありさまを推量せさすることがある。この方法をなづけて述果法といふのである。述果とは結果をのぶといふことである。源氏物語に光源氏の君の御ありさまをしるして、

いみじきものゝふあたかたきなりとも見てはうちゑまれぬべきさまのしたまへれはえさしはなちたまはず。

といひてある。いみじき武士あるはあたかたきなりとも見てはうちゑまれぬべしとは源氏の君の美貌がそれらの物におよぼす結果である。この結果をのべたによつておのづから源氏の君のさこそ美しかりけめといふことが現はれてきたのである。かくの如きを述果法を用ゐた活寫法といふのである。

また清少納言の枕草子に下の文がある。

臨時の祭の日いまだおまへには出はてゞ物のうしろにて横笛をいみじう吹きたてたる、あなおもしろとまつほどに、なからばかりよりうちそへて吹きのぼせた

るほどこそ、たゝいみじうるはしき髪もたらむ人も皆たちあがりぬべきこゝちぞする。

これは笛の音のまことにおもしろきことをしるして、それを聞きて毛髪もおのづから樹立すといひてその調べの美妙なることを含ませたのである。則また結果をしるして記體の目的を達したので述果法の一例といはねばならぬ。この方法は用ゐかたの如何により、では姿の少しもあらはれぬこともあるし、また極めて力強くあらはれてわづかに數語にして千言萬句にもまさることがある。

以上述べてきた記體文につきての簡單なる規則は無論十分に人をして記體の文章に熟達せしむるには足らぬ。しかしながら、人が他人の文章を讀みてそのうちにある記體の文章を味ふについての助とはなると思ふ。文學ことに詩においてはその記體といふことがその美處の大部を作つてをることがある故に記體を味ふの力は自然、文學就中詩を味ふに缺くべからざるものである。文學に志す人々は常にこの點に眼をそゝぎ記體がいかになされてあるか成功したりや否やを考へ以て文學の眞價を知る方に近づくことを忘れてはならぬ。

第九章　叙事文

一、叙事文とは何ぞや。　叙事とは平易にいへば話をすることである。なほ詳しくいへば實際の事でも想像したことでもすべて作者が心胸にある事件をさながら讀者の心に浮ばすることをいふのであつて、それをしるした文章が叙事文である。

叙事文は事件を叙するのであるからして中にしるすべき主なる事が事件であることは勿論である。しかし事件といふものはおのづから起つてくるものではなくつて必ず人間の働によるものである。もしくは人間が事件のために働かさるゝのである。また人間である以上は必ずある境遇に住んでをるのである。それ故に叙事法には三の要素があるといふことがわかる。一は事件、二は人、三は境遇。この一を缺きては完全なる叙事文は出來ぬといふて宜しいのである。

二、事件。叙事文の第一の要素であるところの事件といふことにつきて一言しよう。しるすべき事件は千差萬別であつて、その種類等は無論こゝに盡しきるるものではない。たゝいふべきはその事件をいかやうにしるすべきかといふことである。きはめて簡單なる叙事文にありては、事件も簡單であるからしてそれを叙ぶる

方法も容易であるなれど複雜なる叙事文にありては、事件も複雜になりてくるからしてこれを叙ぶることは容易ではない。それでまづ第一に心得べきことは事件の進みを止まらせぬやうに話すべしといふことである。事件の成行きがすら〳〵としして進みてゆきて少しも停滯せぬやうすべしといふことであるこれにはその事件に直接に關係ある事のみをしるして關係なき、もしくは關係薄き事はなるべく省くやうにせねばならぬ。然らざればそれが邪魔になりて話がとどこほり誠に不愉快を感ずるのである。これは決して話に上手なりとはいふことが出來ぬ。鈴木弘恭氏のかゝれた鹿島詣の記の左の一節を讀め。

梅雨晴まある頃津輕松浦長岡の三卿並に松浦の若君ら、香取をかけて鹿島詣せばやとのたまふに、ぞ弘恭もめしぐせられて津輕家のずさ大橋ぬしと共に隨ひまつりて今年七月十二日の午前六時といふに本所の停車場よりたび立ちぬ。まづ長岡の君が口すさびたまふは

にほとりのかつしかわさ田露みえて夏も涼しくゆく旅路かな

さて市川の川を渡り中山の驛船橋の宿を過るほどに松浦の三位の君

梅雨の雲も晴れたり鹿島立神の心やまづうけにけむ

とぞのたまふ。そも〳〵旅たづことを古へより鹿島立といへるは昔はこの近き渡りの國々より防人などにめされて旅立人のまづ氏神宮に詣て道のほどの平らかならむ事をいのりかと出をいはふ慣はしなりしかばしかいへるにや、そはこの武甕大神は始てこの國のさわげるをことむけ和し給へうし神なればなるべし。萬葉にあられふり鹿島の神を祈りつゝ皇軍に我は來にしをなどあるもこの意ならむかし。右の方に人家のあまた見ゆるは千葉町なりといふ。

まづ始より「梅雨の雲も晴れけり」の歌あるところまでは發足のことをしるしたるなれど「そも〳〵旅立つことを」といふより「この意ならむかし」とあるまでは鹿島立といふ語の穿鑿にうつりたるなり。この旅行の話とは關係なし。則横道に走れる也。これがために「右のかたにあまた人家の見ゆる云々」といひて再び旅行の話にかへるまでは話の進行が止まつたのではないか。吾人が車に乘りても鐵道にのりても進行しては止り、止りては進行するのは決してよきこゝちのするものではない。よしや早くとも、おそくともなるべく止ることなく停滯することなくすら〳〵と前進してこそ誠に心持が好いのである。話を聞く時も丁度これと異ならぬのである。

曲亭馬琴はあれほどの小說家であつて話をなすには熟練して居つた人であつた

けれどもしば〳〵この誤に陷つてゐる。それは話の途中で何かある一の説明を要すべき事物に出遇ふと、それについて和漢の故事などを引き來つて長々と筆を費すのである。それがためにこれまでの話がとぎれて聽者はしばらくの間立ン坊をして小むづかしき長談義を聞かされるのである。これは思ふにかれの博學といふことが却りて叙事の上に煩を及ぼしたのである。八犬傳椿説弓張月等にもしば〳〵あるが、こゝには八丈綺談の中白木屋諸平が息子諸太郎が金魚を養ひける條下を一例としてあげむ。

あくれば天文十五年春はすぎ夏たけて梅の花くたし晴るゝころ諸太郎が鐘愛せし金魚を鼬にとられたり。金魚はむかし我國になし。先の帝後柏原の御時に文龜二年壬戌の春正月異國よりこれを渡して堺の津に來舶せり。この時は魚の色も赤白黒の三種にて更紗などいふものはなし。その後これを蓄ふものあり。其種類もあまた出て來て銀魚あり。瑁玳魚あり。これは今いふ更紗なり。又金魚にして尾の形鮒魚に似たるを金鯽魚といふ。いはゆる今の和金魚なり。又金鯉魚あり。矮魚あり。金鯉は則ちむちゆうにてらんちゆうは蠻名ならむ。その色黄なるを丹魚といふ。これらの呼名は漢名なり。又籠尾あり。凹尾あり。兩端葡萄一文字また十文字鶴鴿筒尾の種々は尾の形もて名を得たる三尾四尾箭尾房尾楫尾熨斗尾と名もいろ〳〵に聞えしにいと後の事にて始めて金魚の渡りしより僅に四十餘年を歴たれば價も殊に貴けれども諸太郎一度これを見てより得まほしとて泣きにければ云々。

さて第二に事件のしるしかたにつきて心得べきことはその順序である。これに二の方法がある。一を正叙法といひ、二を逆叙法といふ。そも事件は年代を追うて起つてくるものである。また原因となるべき事がおこつて次に結果たる事件がおこつてくるのである。故に最自然なる事件の順序は年代の遲速のまに〳〵これを列擧してゆくか、原因を前に記し結果を後にしるすかの方法である。元年におこつたことを第一にしるさば、二年目に起つた事を第二にしるし、三年目に起つたことを第三にしるしてゆくごときをいふのである。しかるに時として文章の單調を避くるために、殊更にこの順序をたがへて終にかくべき事を始めにしるし始にしるすべきことを終にしるすやうな書き方をすることがある。これを逆叙法といふのである。例せば人の傳を書くのでも始めに卒年のことをしるしさて立ちかへりてその幼年壯年時年の事をしるすごときをいふのである。又乘好法師がつれ〳〵草にまづ

つれ〳〵なるまゝに、日ぐらし硯にむかひて心にうつりゆくよしなしごとをそこはかとなくかきつくればあやしうこそものぐるほしけれ。

とことわりて原因をしるしさてその後に種々の結果たる事實をしるしたればこれは普通の順序であつて正敘法といふことができる。しかし更に轉じて次の文章を一讀せよ。

よひの程に凉みにとて往きかふ人多く市中賑ひしもふけゆくまゝに鳴りは靜まりぬ。蒸す如き暑さをねじて扇を妻に蚊帳に入りつ。汗はあゆばかりなれど戸さしてよ障子たてゝよなどいふ。まどろむと思ほどこそあれ。がらがらと音して家も躍る樣なるにゆりおどろかされて見れば枕邊のともしびふつと消えて戸障子は早う倒れたり。われともなしに走り出づれば地割れ裂けて今にも落ちぬべく家の破れる音は雷のやうなり。大木の蔭をたのみに立ちよるにそれもゆるぎ倒れむさまなれば小柴垣をたよりに辛うじて竹林へ入りぬ。地震は止みぬれど兒女の援をよぶ聲はをちこちに聞えて山びこさへぞ答ふる。月もなく星もをぐちければ妻子とものあるやうも知られず。ただとく明けよとのみぞいそがるゝ。一時千秋といふことは人待つ時にのみにはあらざりけり。羽なければ空へもあがるべからず。龍なれみば雲にものぼらむことかたしと昔の人のいひしも思ひあはせられて世のはかなきをかこたれぬ。阿蘇の湯や湧きいでつる。金山峯や裂けつらむと思へばいと恐ろしくかなし。やう〳〵明け離れむとするに鳥よりさきに聞ゆるものは人みなの喜ぶ聲なけりり。（中略）

その八月の中つころかしこより上りこし人にあひて時のさま詳しく聞きつるに思の外に恐ろしかりしかば、いかて後の世の人にも傳へばやとやがて物語のまゝにをかきつけしは夕すゞみのけはひかまびすしく往來にぎはふ京都かも川のほとりなる旅のやどりにてのこと也。

これは小中村義象氏が熊本の大地震につきてしるせる文章である。この物語は後の世に傳へばやと思ふためにかきたるなれば、まづその原因たる則その八月の中つころといふ以下の文を始にしるしさてよひの程は云々としるしゆきべきてあるをかやうに結果となれるものを始めにのせ原因となれるものを却りて後にしるせるは順序を轉倒せるもので則逆敘法といはねばならぬ。しかしこの逆敘法を用ゐてあるために大に興味が増されてをることをも同時に注意せねばならぬ。

三、人物。すべて敘事文においてはその中にあらはるゝ人物について明かなる

思想をもたせるやうにするといふことが甚必要である。篇中の主人公においては
ことに然りである種々復雜したる事件は皆人物のはたらきによりて起りてくるの
である。人物の心が動機となつて善事も凶事も起つてくるのである。それ故に人
物の性質が明に描かれて居らないとなぜかういふ事件がおこつてきたであらうか
といふことが明にならぬ。いかに事件が入り組んできても、これはかういふ譯があ
るからだと合點をさせるためにいかにしても人物を明に描き出しておく必要があ
るのである。尤も少年の御伽話やその他の極めて簡單なる物語にあつてはたゞこ
れ〳〵かういふ人があつたといふだけで別段詳して說明を用ゐぬ事がある。しか
し複雜なる話說になればなる程人物につきて詳說をなさねばならぬ。

敘事文を讀みて吾人の快樂を感ずる一つの事はその中の人物が躍々として眼前
にあらはれてくるといふことである。人間が明になるので事件との關係が明にな
つてくる。かやうな人間であつた。かやうな事件に遭遇してかやうな擧動に出た
のは自然のことであるといふ事がわかる。そこでます〳〵興味が深くなりくるの
である。されば手腕ある小說家になればなるほど性格といふことに重みを置く。
よく性格を畫いて始めて事件を活かすことが出來るからである。

源氏物語の宇治の十帖のうちに浮舟の君といふ姫君がある。この姫君は薫中將
といふ人の思ひ者でありながらふとしたことから匂宮といふ人の目にふれて、その
方にもお近づき申すやうになつた。これは甚だ道義にそむきいかゞはしき行であ
る。なぜかやうな行をしたであらうか。紫式部はこの婦人の人となりをしるして
いふ、

つゝましげに見出したる眼(浮舟のなり)などはいとよく思ひ出でらるれど(薫中
將の正妻にあたる姫宮をさすなり)たいらかにあまりおほどきすぎたるぞ心もと
なかめる。

氣まるわるさうにしてゐる眼つきなどはよく薫の正妻たる人に似て居れどあま
り氣が好すぎておとなしく意地のないところが不安心なる婦人なりと也。かゝる
おとなしすぎたる人なればこそ匂宮の御言葉をもいなむことが出來なかつたので
ある。則この性格の說明ありて始めて浮舟のはたらきが自然なるやう感ぜらるゝ
てはないか。又次を見よ。

伊藤介亭は東涯の弟也。人となり質直純茂なり。その弟なほ少なりければ或
は遊蕩して花街に宿ることあり。あしたに歸りくるに介亭のすでに起きて堂に

あるを患ひて戸に入らむとして呼びていふ、火災ありと。介亭聞くやすなはち屋に乗りければその間に室に入ることを得たり。後これを常とせり。奥田三角といふもの介亭にいふ、先生しば〳〵令弟の術中に陥るはいかなる故ぞ。介亭いふ予固よりその詐なるを知れども萬一實火あらばいかむせむと思へばなりと。

介亭がはかなき謀にわざ〳〵陥ること誠に愚なるが如しといへども、はじめその人となりの質直純茂とあるにてなるほどと合點せらるゝではないか。

今例に擧げた二の例は性格の畫き方がきはめて簡單なるものであれど、それにもかゝはらず事件を理解せしむるに大なる助をあたへてある。まして詳しくしるされてゐればある程事件の自然をたもつやうになるは言ふまでもない。小說と歷史とが吾人の頭腦に異なつた印象を與へるのは主としてこの故である。小說にありてはよく主人公副主人の性質をたち割つてこれを說明する。しかし歷史にありては名をあぐるに止るのみである。よし性格をかくとしてもたゞその皮相を畫くにすぎない。それ故になぜかういふ事件がおこつたか。この人とこの事件といかなる關係があるだらうかといふ事などが巨細に分らぬのである。小說が生かして社會の話をなし、歷史が死んだまゝの社會の話をなすやうな傾向があるのは實にこに起因してゐるのである。

四、境遇。前にのべた如く人物の性格を知るのは無論叙事に大なる助を與ふるものなるがそれと同時にその人物の働いてゐる位置ならびに周圍の狀況のあらはされてあるといふ事がまた叙事の意味を十分に會得さするに大なる助を與ふるものである。境遇は場合を變ずるものである。同じ雨のふるのでも冬と夏とは異なつてゐる。同じ夕ばえでも島國で見るのと大陸で見るのとはちがふ。從つて同じ事件の話であつても西洋でおこつたのと日本でおこつたのとはその間に相違があらねばならぬ。同じやうな性格な人物でも行動のちがふといふのは周圍の境遇が同じでないからである。されば境遇が明かでなければいかに人物の性格が明であつてもなほ十分に事件の眞相を知り得たといふことは出來ぬ。境遇の說明の必要はこゝにあるのである。人は時代を作るものである。故にその時代の出來ごとを知らうとするにはその人を知らねばならぬ。しかしまた同時に、人は時代の子である。されればその人を知らむにはまた時代則境遇を知らねばならぬのである。境遇といふは意味が廣い。その時の社會のありさま、家計上のありさま、一身上の都合ならびに住居の場所など皆その中にはいつてくる。

例せば吾人今松平定信の傳記をしるして彼が政治經濟に對する行動、風俗の匡正學政海防に對するはたらきを示さむとするには、まづ定信が執政時代の天下のありさま如何を顧みなければならぬ。當時田沼親子の專横なりしこと、賄賂贈遺の行はれしこと。風俗壞敗し武士道すたれたりしこと、學界黨派の爭ありしこと、邊警のしきりにいたりし事など、則定信が周圍の境遇を說かなければならぬ。批評體の歷史が編年體の歷史にくらべて一段の價値を增せるはこの點において勝つてをるからである。近代の傳記がおほむね總論において傳すべき人の時代の大勢をしるせるは前の必要を感じたからである。三上參次氏が嘗ていうたことがある。

予は歷史に一の新體を搦めんとす。即ち我邦數千年の歷史を一の大なる圓柱と看做し時代ごとにこれを橫斷してその截り口を示さむと希ふ。されば偉人の傳記を截り口の中心とし政治法律學問宗敎人情風俗等その時代のありさまの一班をこれにかけてしるさむとする也。

これはよく人物と境遇との關係をいひあらはした語だと思ふ。

五、叙事文の種類　かくの如く叙事文は文章の一種類をなしてはをるなれど、全く叙事のみで成り立つてをる文章といふものは甚だ少いかと思ふ大概は叙事の中に記體がはいり込むとか議論がはいりこむとかしてをるものが多いのである。しからばそれら種々な文章が混交してをる場合にはいかにしてそれが叙事文であるか、あるは記體文であるか、あるは議論文であるかといふ事を區別すべきであるかといふに、これはその文章の目的によりて定むるより他にしかたがない、いかに記體文が混じてあらうとその目的が所詮一の話說をなすにあつたならばそれは叙事文である。またいかに叙事文が混じてあらうとその目的がつまり物の姿を畫くにあつたならばそれは記體といはねばならぬ。

さて然らばこの叙事文といふものは如何にこれを分類すべきかといふに先四種になすべきかと思ふ。一には歷史、二には傳紀、三には紀行、四には小說、この四である。

叙事文中ことに重要にして又最しるすに困難なるものは實にこの歷史である。古人も史は才學識の三を兼ねたるものならでは能はずといへりしもこゝをいうたのである。歷史に最尊ぶべきことは事實の正確である。いかにして正確を得べきであらうか。まづあまねく材料を蒐集することが必要である。たとへ乾燥なるものでも些細なるものでも關係のあるものであつたならばことゝく集めねばならぬ。事實の正確なき歷史は沙上に立ちたる家屋の如くである。いかに外見は立派

でも基礎がゆるいのである。いかに文字は壯麗でも典據とするに足らぬのである。かくの如く事實の正確といふことゝ並むで歴史に缺くべからざる事は事件を活かせるといふことである。戰爭なら戰爭、騒動なら騒動があだかも眼の前で起つてをるごとく見せるといふことである。たゞあまたの材料を列擧しただけでは決して事件を活かせるものではない。これらの事件をつゞり合せて一の有機的團體として生命のあるやうにすることが必要である。これが實に歴史家の手腕を要するところ、眞の大歴史家のまれなるも職として之に由るのである。これを支那にしては史記の作者司馬遷これを英國にしてローマ衰亡史作者ギッボン、これを日本にしては日本外史の作者頼山陽これらは眞に大歴史家として耻ぢざる者といふてよからう。

源氏盛衰記や保元物語や、平治物語や太平記やなどいふ軍記物は事實の正確といふ點から見ては價値が乏しいか知らぬが當年の詩的な戰爭、花々しき武者ぶりなどを躍動させてをるといふ點に於いては今日の乾燥なる事實の陳列を以て甘んずる歴史家の到底及ばざるところだろうと考へる。この點において、これらの軍記物は吾人に大なる手本を與へてをるといはねばならぬ。

歴史に編年體のものと批評體のものとがある。編年體のものは年代の順序にしたがひて事件を述べたるもので、批評體のものは中間に著者の議論を挿みてよく事件の原因結果を明にしたものをいふのである。

第二にいふべきは傳紀である。傳紀をしるすに忘るべからざる事は其人と時代との關係である。人がいかに時代を刺激せしか時代がいかばかり人に影響を與へたるか。この間の消息を傳へることに十分の力を注がねばならぬ

傳紀に二の種類がある。一はある人が他人に對して作りたるもので、二は自ら自分のことをしるしたるものである。この第二の種類を自叙傳といふ。新井白石の折たく柴の記の如きは適例であらう。

第三にいふべきは紀行である。道の記ともいうて旅行について記述したものである。旅行において吾人は種々の事件に出遇ふと同時にあまたの名山大川を見勝地佳境を踏むのである。この故に紀行には叙事と共にいちじるしく記體の分子がまじつてくる。否時として過半が記體文もて埋められる、如き場合もあるのである。けれども所詮旅をした話說がその主なる目的であるからして叙事文の一種に加へたのである。

紀行文は旅行の話である。故に旅行者が踏破した山川藪澤が宛然紙上に躍るやうしるさねばならぬ。さうでなくたゞ名所佳境の名だけを列擧したならばそれは案内記である。名所圖繪である。紀行は案内記や名所圖繪と同一であるべきものではない。案内記や名所圖繪はたゞ固有名記の駢列にそへて古人の詩歌をかゞげた書き物であつて文學とはいへぬ。紀行は文學である。必ずや景に對して情をおこし、情を以て景に臨み、言語の裝飾に注意して情致の活くやう印象の深かるやう作らねばならぬ。獨造はこゝに生じて紀行をして案内記を脱して文學の範圍内に來らすのである

ある人が大和めぐりをなして吉野山の吉水院のさまをしるした文章の一節がある。

左の方の岡に吉水神社あり。元弘の初年世の中いみじう亂れければ時の御門後醍醐天皇はしばしとて此院にうつらせたまへり。夫より二代の天皇もこゝにとゞまりたまふ中にも後醍醐天皇は和歌を好ませたまひければ、をりにふれて、よみ殘したまひし歌いと多し。そが中に

こゝにても雲井の櫻さきにけりたゞかりそめの宿と思ふに

これを同じ事をいひたれど次なる本居宣長が菅笠日記の文章にくらべて見よ。

この院は吉水院道より左へいさゝか下りて又すこしのぼる所離れたる一の岡にてめぐりは谷なり。後醍醐の帝のしばしが程おはしましし所とて有りしまゝに殘れるを入りて見ればげに物ふりたる殿のうちのたゝずまひ世の常の所とは見えず。かけまくもかしこけれど

いにしへの心を酌みて吉水の深きあはれに袖はぬれけり

かのみかどの御像後村上帝の御手づからきざみ奉りたまへるとておはしますを拜み奉るに

あはれ君この吉水にうつりきてのこる御影を見るもかしこし。

又そのかみの古き御たからどもあまりありて見けれど盡くも覽えず。

又雲居の櫻といふもあり。後醍醐の帝のこの花を御覽じて

こゝにても雲居のさくら咲きにけりたゞかりそめの宿とおもふに。

とよませ給ひしも

世々をへて向ひの山の花の名に殘る雲居のあとはふりにき。

前のはたゞ案内記的なるに反して後のは感情ふかく想像はたらき明らかなる印

象を吾人の腦裏に與へてゐる。かゝるをこそ紀行文の鑑とすべきであらう。

さて最後に小説につきて一言しよう。小説は中に用ゐる材料のとりあつかひかた、あるは材料の種類にしたがひて種々に區別される。しかしこゝではその詳しい分類を説く必要はない。たゞそのうちの、ことに著しいもの四を擧げておく一は歴史小説、二は傳奇小説、三は寫實小説、四は教訓小説この四である。歴史小説は歴史上の事實を材料としたるもので大閑記とか俊寛物語とかいふものはその一例である。傳奇小説は歴史小説と同じく多く歴史上の事實を用ゐるけれどただ事實を傳へるのみならず、神怪なる事、冒險的の事をも合せしるしたるものをいふ。朝夷巡島記、兒雷也物語などその一例である。水滸傳の如きはことに著しいものといはねばなるまい。寫實小説は人生をありのまゝにあらはさむとする小説である。敢へて古代の事を假らず、敢て奇怪なる事實を語らず、平々の境に筆を著けて人情の機微を捕へむとするものである。源氏物語とか西鶴物などは皆このうちに入るべきものである。教訓小説といふのは勸善懲惡といふことを目的としたるもので曲亭馬琴の小説はおしなべて恰好の例であらう。

傳奇小説家はおもしろみがないとて寫實小説家を非難する。寫實小説家は人生の眞相を傳へぬとて傳奇小説家を攻撃する。そのほかすべて種類の違つた小説家の間には議論が絶えぬ。無論優劣はあるにはあるが、とにかく吾人は次の二點を以て小説の優劣をきめる公平なまた一般の標準かと思ふ。それは第一には作者が、かねて讀者の心にある効果を與へむとしたるその目的がよく達せられてをるか如何か。第二には作者のあらはした人生觀が人間をして高尚ならしめ、同情深からしめ人生の眞趣を解せしめ、人間の精神上行爲上における美を感得せしむる働があるかいかゝか。この二の目的を遂げてあれば以て優等なる小説といふことが出來るべく、もし遂げてあらざらば價値の劣等なるものと定めなければなるまいと思ふ。

第十章　説明文

一、説明文とは何ぞや。前章において述べたるごとく人間が最はやく持つにいたる心の働は自分の周圍にあらはれてある事物のありまさや運動を物がたらうとすることである。この働があらはれて記體文となり敘事文となつた。されば人間がまづその心に知るものは外界の實在物である。個々特殊のあるものである。山ていへば自分の故郷の山川ていへは自分の家の前の川、また馬ていへば自分の乘る馬といふやうな物體である。しかるに漸次年代をへて、經驗をつむにしたがひて、故郷の山以外に澤山山といふものを見るやうになる、自分の家の前の川以外にあまたの川を見るやうになる。また自分の乘る馬以外の數多き馬を見るやうになる。こゝにおいて人々の心に始めて、それらの個々特殊のものから抽象された山とか川とか、馬とかいふ考をもつやうになるのである。この山といひ、川といひ、馬といふは實驗した個々特殊の物に共通した性質のあつまつて出來たものであつて、たゞ考として存在するけれども實際あるものではない。これを概念といふのである。さて人が事物についての概念をもつやうになると、今度はこれを人に物語らうとする働を

もつにいたるのである。而してその働のあらはれて出來た文章がやがて説明文である。されば敘事文につゞきて人間が思想表白の最おのづからなる形といふべきはこの説明文であらう。

かやうに考へると説明文は甚だ高尚なる文章の如く考へらるゝけれど、實はこれは吾人が日常の談話中などにもしば〳〵用ゐるところのものである。吾人が天氣の晴れくもりを見て、その雨になるか、雪になるかを話す時、物品を賣買する時その價のたかき低きを説きあかす、時小兒の問に答へて草木の色あひ種類をさす時これらの場合において吾人のいふところのものはことごとく説明文といふべきものである。なほ進むでは數學の教師が問題を解釋する時、國語の教師が辭意を訓解する時、裁判官が宣告をあたふる時などは又皆この説明文を用ゐてあるのである。更に一層こみいりたるものにいたりては教育の原理をときたるもの、古來哲學者の學説を批評したるもの、人倫の道を説きたる者海陸の戰術を述べたるもの、美術となく學術となく、それにつきての事理性質を明にし、幽をして明ならしめ、難をして易ならしめ、深きをして淺からしめたものであるならばいづれも説明文の範圍内にはいつてくるのである。

かやうな次第で說明文の例はいたるところはに横つてをる。左に一二の例をかしげやう。

屬文說

裏や文を屬し、顧みて大將の兵を用ゐるが如しといふ。百言を屬するは百騎を用ゐる也。千萬言を屬するは千万騎を用ゐる也。法にあれざらばこれを用ゐるべからず。これを用ゐば法に拘はるべからず。その機は我にあるのみ。前權後勁、左龍右虎、陣を圍ち伍を束ね、その旌戟を列ぬ、これを文の正となす。正變じて奇となる。游卒はその兩翼を搏ち伏軍疑兵首尾共におこり縱に麾けば縱に、横に麾げば横に、百千萬騎、跳躍騁頓して人、その端倪を知るなし。而して麾きてこれを收ひれば則陣伍依然として刁斗の警むるところ萬馬聲なし。よく然るものは何ぞや。その機われにあるのみ。何ぞ必しも古法を襲はむや。古法を襲はずして古法に合す。こひねがはくは文に英雄たるものならむか。

これは頼山陽のしるしたもので一篇文を作るべき心がまへを說きたるので則說明文といふへきである。また三浦安貞の文章に

金は天下の至寶なり。これを貯ふるものは家富む。されどこれによりて身を失ふものあり。人參黃耆は藥の隨一なり。劍術兵法は身を衞るもの也。されどこれによりて身を殺すものあり。醫術は人を救ふものなり。されどこれによりて人を殺すとあり。飲食は生を養ふものなり。されどこれによりてわが體をやぶる事あり。國の大臣は國を治むべきものなり。されどこれによりて國を亂るものあり。このさかひよく〳〵工夫すべし

とあるは物には一得一失のあるといふことを說明したのであつて則說明文といふべきである。

おなじく物體をしるすといふ點においては說明文も記體文も異なるところはない。たゞし記體文においては、しるすところはいつでも、ある格段な實在してある物の姿をうつすのであるに、說明文においては全くその反對で常に物の概念をしるすのである。實在せぬ、たゞ考ふることの出來る物をしるすのである。これ兩者のいちじるしい區別といふべきである。大伴家持の歌に

かさゝぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞふけにける

とあるは鵲を見てそのありさまをしるしたのであつて則記體文を用ゐたのである。されど

大さ鴉の如く、頭背黑くして褐を帶び、肩に白き羽あり。翅は黑くして碧に光る。尾は身よりも長く、黑く綠にして光る。その端は紫に光る。胸腹は白くして褐を帶ぶ。聲鴉に似て低し。一名唐鴉。筑後に多ければ筑後鴉いもいふ。とあるは一般の鵲についてしるしたのであつて則鵲の概念をしるしたのであつて說明文ともいふべきものである。

二、說明の方法。說明文を以て事物の說明をなすにも種々の方法がある。そも〳〵說明文はその目的とするところ思想の說明である。深遠なるものを平易にし、複雜なるものを簡單にし、晦澁なるものを明白にするのである。かやうな次第であるからして說明文に最必要なる性質は明瞭といふことにあるべきはいふまでもないことである。こゝにおいてか吾人は第一に明瞭な言葉づかひを用ゐることを忘れてはならぬ。同一に曖昧なる言辭を避くることをつとめねばならぬ。綺語を避けて平語を用ゐるやうにし、長語よりも短語を使ふやうにしなければならぬ。また文の構造もなるべく短くして長大ならぬやうにし段落の布置の如きもよく注意して前後の關係の一目瞭然たるやうにせねばならぬ。

以上は說明文を作るにあたりての大體の注意なるが、更に次に說明にあづかりて力ある二三の方法がある。つぎ〳〵に叙述じやう

三、引例法。これは一の思想を說明せむとする時に、ある格段なる事物を引き來りて說明することをいふのである。例せば圓形といふことを說明せむとて盃の如しといふとか、あるは流動體といふことを說明せむとて水の如しとかなどいふ如きをいふ。梅園叢書に理屈と道理とのわかちを說明して

理屈と道理とへだてあり。理屈はよきものにあらず。たとへば親羊をぬすみたるは親の惡きなり。親にてもあれ、惡は惡なれば直に訴ふべしといへるは理屈なり。親羊を盜みしは惡ながら、親惡事あればとて、子これをいふべきやうなしとてかくしたるは道理なり。人死しては再びかへらず。歸るべき道あらばなげきても歎くべし。かへらぬ道なれば歎きても益なしといへるは理屈なり。人死しては再びかへらず。歸るべき道あらば歎かずともあるべけれどかへらぬ路こそ悲しけれなど歎くは道理なり。

とあるは一例として見るべきである。なほ他の例をかゝげむ。

人の生れしまゝの心といふ物は極めてよき物なり。其元といへば皇產靈の大神の賜はれる靈魂にて、その靈魂のよろづに思を凝しむる官府を心といふ。この

心よ、上にも申せる神教に赤き心と詔へる如く、もといと〳〵清くうるはしし潔く微妙の至極なる物にて世に寶てふ寶の多き中にも赤き心のみぞ二なく上なき寶物にはありける。いて人性のもとより善きてふ話を語り出むに東遊記に加賀の飛脚金子二百兩を頂りもちて京へ登るに江州河原市より輕尻の馬をやとひ板本の宿に泊る。馬方は河原市にかへり馬のすそを洗はむと鞍を解しに鞍下より財布一つ出て金二百兩あり。馬方大に驚き今の飛脚のとり忘れたるにこそとて板本に走り行き、かの泊れる宿にいたり對面し委く問ふに相違なければその金を返しけるに飛脚は悅のあまりに行李より金子十五兩を取出し馬方にあたへまづ當座の御禮まゐに贈奉ると涙をながして渡しければ、馬方大におどろきてそなたの金をそなたに取納めたまふに何の禮といふ事のあるべきとて手にだに取らず、終に金二分としてせめてこれはかりはをさめたまふべしと飛脚の理を盡していふにぞ、馬方いふやう、さらばそのうち烏目二百文を賜はるべし。これは今夜休むべきところをこれまで追かけ來れる賃錢なりとて二百文にて酒を買ひその家の人にふるまひ我も醉ふほど呑てかへらむとす。飛脚は感に堪かねそこはいかなる人にておはすと問ふに名あるものに非ず。たゞ我が近所に小川村といふところあり。そこに與右衛門といふ人夜毎に講釋ありて某もをりふし行きて聞きはべりしに人の物は取らぬものなり無理非道は行ふべからず。などいふ事常々かたりたまふによりて今日の金子も我物に非ざれば取るべき理なしと心得しまでのことゝいひ捨てゝかへりぬとぞ。

これは正直なる馬子の一例をあげて人性もと善といふことを説明したのである。

四、譬喩法。これは事理を説明するにあたりてそれと類似してある他の事理を引きたりて譬喩となして説明するをいふ。例せば善事をすれば善き報あり、惡事をすれば惡き報あるといふことを説明するに、なほ善き樹には必ず善き果實がなり、惡き樹には常に惡き果實がなる如しなどいふ如きをいふのである。左にかゝげたる二文章はともにこの法を用ゐたる例とすべきである。

軍艦と人命といづれか貴重なるかと問はゞかりそめにも人命こそ貴重なりと答へざるものはあるべからず。死者は復活せしむべからずといへども軍艦は人力を以てこれを製造するを得べし。軍艦を以て人命よりも貴重なりとするは人道に反するの嫌なきに非れども時に常變あり。道に奇正あり。常時の正道において最貴重すべきものも時變の奇道を以てすれば斷然これを一擲せざるべから

ざるの場合は實際に乏しからず。喩へば平時にありて金銀珠玉は米麥布帛よりも幾百千倍の貴重品なれども一朝凶歳餓寒に瀕する場合には山の如き金銀珠玉も米麥布帛に易ふべからざるのみか、一握の糟糠半片の襤褸にもしかざるべし。今やわが國は非常の勁敵と空前の大戰爭を開き變時中の大變時に會しつゝあるを以て諸事萬端常道を以て律すべからざるものあるは恰も凶年に際して金玉と米布とその價値を顚倒するに異ならず。

これは戰時にありては戰鬪艦の貴重なりといふことを凶年の米布にたとへて說明したのである。

昔より天の下に道一すちおこすたくひは世界の上に打むかひて立てるに侍れば、もとよりこなたに親む人なく、おほやけの心ありて我世の後をも見とほす眼なからむかぎりはかへりてのろはしうあたみねたむ事おほよそことわりの前にてそれがわざはひにかゝりて煙を分け刄を渡るもやがてこの大道をふむにて侍り。こゝしき嚴もたぎる水には推たゝよはされて打もまろふめり。さりとも波とともにくだけされば遂にとゞまる所にたてりて千とせの苔みどり深し。かの盛なりし水の勢この時いつくにかある。況んや新桑原とうつりはてゝはなかれのあとだに知る人なし。されば後を思ふ人今のまどしきをなげかむやは。

これは人間の功名は不屈の精神によることを激流と石とに譬へて說明したのである。

五、引句法。これはある思想を說明する時その意を明にいちじるしくするため古今の格言名句あるは諺等を引用し來ることをいふ。則次の如きものをいふのである。

心を清く赤くしてかりそめにも奸曲邪佞をおもはず、正直に忠誠にしてその職を怠ることなく務めて及ぶだけは他の病苦貧苦種々の艱難をば相憐み相救ひ助けて慈仁を加ふるぞ富貴榮華をながく保ち子孫を受けつたへしむるゆゑにぞありける。すべて人は正直を第一とすべきこと皇祖の天神の御誨に出て古人も何くれといへる事多く近世にも加藤清正ぬしがたゞ律儀ものに武者多しといはれ、加藤嘉明も氣先のけなげなるものは人の目をおとろかす程の働をなすといへどもふみ詰めたる武功は律義者にありといはれたり。

又次にかゝげたるものも一例と見ることが出來る。

いとけなきより。さかりに成り老い、衰へて死に至るまで百とせの齢も亦いく程もなし。人の世にあること、假にやどれる旅人の如し。東坡が詩に「一年一夢の如く百歳眞に過客」といへるもうべなり。

いかにしてまことの富を保つべきぞといふに正直忠誠にして陰德を積むに如くはなし。小惡にても積りては大惡となり、小善にても積りては大善となること塵積りて山となるといふ譬の如くなれば心中に惡念の萌すは妖鬼に見込まれたるなりと恐れて善にうつるべき也。

六、反複法。これは一の思想を說明するに種々にいひかへ何遍もくりかへして說明することをいふ。かくして落ちなく思想をあらはすことが出來るのである。徒然草の中でも有名なる「花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは」の段の如きはの反複法を用ゐて物は十分なることをのみ賞すべきにあらずといふことを說明したのである。

花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは。雨に對ひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬもなほあはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢散りしほれたる庭などこそ見所ゐほけれ。歌の詞書にも花見にまかれりけるに早く散りすぎにければとも障る事ありてまからでなども書けるは花を見てといへるに劣れる事かは。花の散り、月の傾くを慕ふならひはさる事なれど、ことにかたくなる人ぞ、この枝かの枝散りにけり、今は見どころなしなどはいふめる。よろづの事も始終こそをかしけれ。望月のくまなきを千里の外まで眺めたるよりも曉近くなりて待ち出でたるがいと心深う青みたるやうにて深き山の梢に見えたる木の間の影うちしぐれたる村雲がくれのほど又なくあはれ也。椎柴白樫などのぬれたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ身にしみて心あらむ友もがなと都戀しう覺ゆれ。すべて月花をばさのみ目にて見るものかは。春は家を立去らでも月の夜は閨の內なからも思へることそいとたのもしうをかしけれ。

なほ一例をしるさむ

道とは自然の則也。人倫事物すべて皆自然にとあるべしかくあるべしといふ則あり。この則は人のともに由りて行ふべき者なる故行路の意にて道とはいへる也。凡天下の萬事萬物一つとして則なきはなし。大なる物にていへば父は父の則あり。子は子の則あり。君は君の則あり。臣は臣の則あり。小き者にていへば視るには視る則あり。聽くには聽く則あり。持つには持つ則あり行くには

行く則あり。近くは一身一家より遠くは四海萬邦にいたるまで皆然らざるはなし。すべてこれを人道といふ。

七、對照法。これは一の思想を說明せむとするに、それと全く反對したることがらを引きたりて對照の力によりてその意を明にせしむるをいふのである。例せば批評といふことを說明して「批評といふは一物を遺憾なく賞鑑することなり。たゞ罵詈讒謗を逞うするをいふにあらず」といふとか、あるは儉約といふことを說明して「儉約といふは入るをはかりて出すを考へ、なるべく浪費を省くをいふ、たゞ吝嗇なるをいふにあらず」などいふ如きを指すのである。なほこゝに一例をあげやう。

今の世の人は大に樂むべき事ひとつあり。これを知りて人每に樂むべし。その樂むべきは何ぞ。大君の御惠によりてかゝる太平の御世に生れ堯舜の仁にあひて白頭まで干戈を見ざること也。亂世に生れなば朝夕兵革を事とし或は難をのがれさけて身のおきところもなく山にも海にも白波の立田山夜半にひとり行きがたきのみならず白日といへども同じきともから多く伴なはざれば近き所だにゆきかへる事やすからざらむ。老いては身の死なざる事をきらふといひしは古の人亂世の苦をいへる也。

とあるは太平の樂しさを說明せむとて亂世の苦みを對照し來つたのである。

さてかく說明の方法に種々あるが、一の說明文には必ずしもこの內の一法をのみ使用すべしと限られたるのではない。則これらをいくつも混じて一の說明文中に用ゐることがある。否長き說明文にありてはたゞ一種の說明法のみで押し通すことはむしろ稀であるのである。今左に種々の說明法をとりまじへた說明文をかゝげやう。これはつれ〴〵草の一節である。人間は思ひ立つた時に一事を修業すべし。しからざれば瞬時に年をすごして悔ゆともかひなかるべしといふことを說いたのである。

ある者子を法師になして學問して因果の理をも知り說經などして世渡るたづきともせよといひければ敎のまゝに說敎師にならむためにまづ馬に乘りならひけり。輿車もたぬ身の導師に請ぜられむ時馬などむかへにおこせたらむは桃尻にて落ちなむは心憂かるべしと思ひけり。次に佛事の後酒など勸むる事あらむに法師の無下に能なきは擅那すさまじく思ふべし。とて早歌といふ事を習ひけり。この業やう〴〵境に入りければいよ〴〵よくしたく覺えてたしなみける程に說經習ふべき隙なくて年よりにけり。(以上引例法)。